

SK4 (Fig.29 ~ 31)

調査区北部に位置する。北部と東部が攪乱を受けるため、平面形態は不明であるが、検出規模は東西確認長1.66m、南北確認長1.12m、深さ26cmを測る。断面形態は皿状である。埋土は灰黄褐色シルトで、埋土中に炭化物を多く含んでいる。

出土遺物は、個体数にして磁器（中碗14・小碗6・小杯2・小皿4・中皿1・碗蓋2・鉢3・蓋物6・小瓶1・爛徳利2・紅皿2・餌鉢1・不明1）、陶器（中碗1・小碗2・小皿5・播鉢1・捏鉢1・鍋3・鍋蓋3・土瓶5・爛徳利1・蓋物2・瓶3・甕4・灯明皿1）、土器（小皿9・中皿1・焙烙2・焜炉1・焜炉さな2・竈1・火消壺1・人形1）、鉄製品（釘1）、及び少量の瓦片である。

図示したものは、197～209である。197～201は磁器。197は能茶山窯産の端反形中碗で、高台内に角枠内「茶」銘をもつ。198は関西系の筒丸形小碗である。199は鍋島焼の七寸皿で、外面に宝文、内面には柳と石の文様が見える。1780～1860年代の製品である。200は関西系の爛徳利。201は肥前産の餌猪口である。

202は陶器。能茶山窯産の鉄釉小皿で、見込み蛇の目釉剥ぎの後白化粧土を刷毛塗りする。

203～207は土師質土器。203は関西系の焙烙。204は在地系の焙烙である。205～207は竈。205・207は内面に布目痕が残る。208は鳩笛。型押し成形左右貼り合わせで、中空。体部の上面と尾の部分の先端に円孔を穿つ。209は平瓦。「片常」銘印をもち、片地産（高知県香美市土佐山田町片地）である。

図示したものの他にも、能茶山窯産の鉄釉甕、鉄釉瓶、飛鉋を施した行平、関西系の灰釉蓋物、口縁部に緑釉を施した灰釉爛徳利、橙色の低下度釉を施した軟質施釉土器等、19世紀中葉までの遺物が出土しているが、酸化コバルトの染付磁器は確認できていない。

SK4は19世紀中葉（幕末）に比定される。

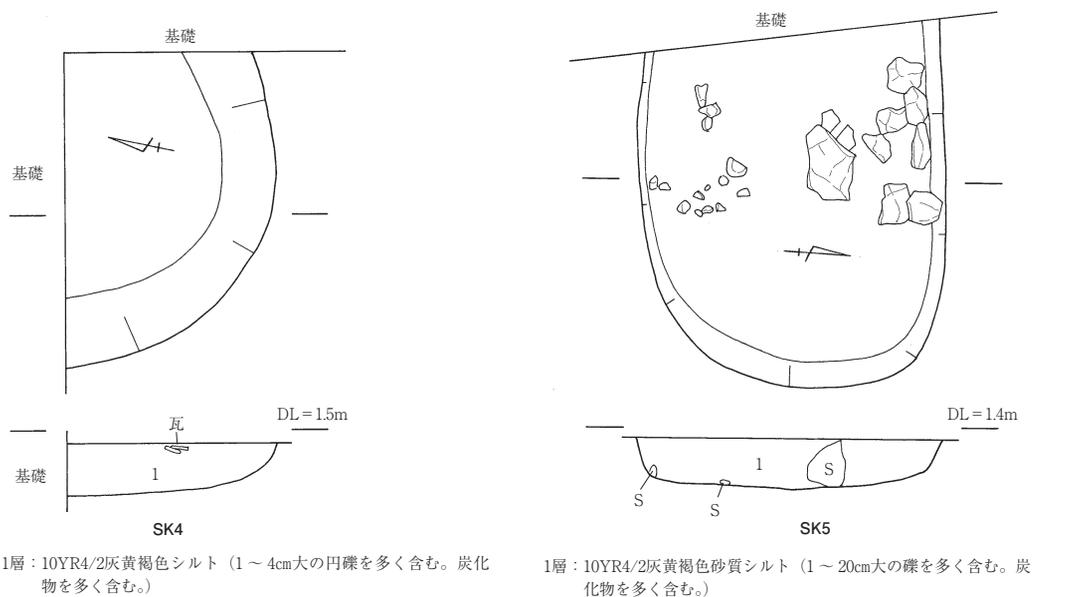


Fig.29 SK4・5平面図・セクション図



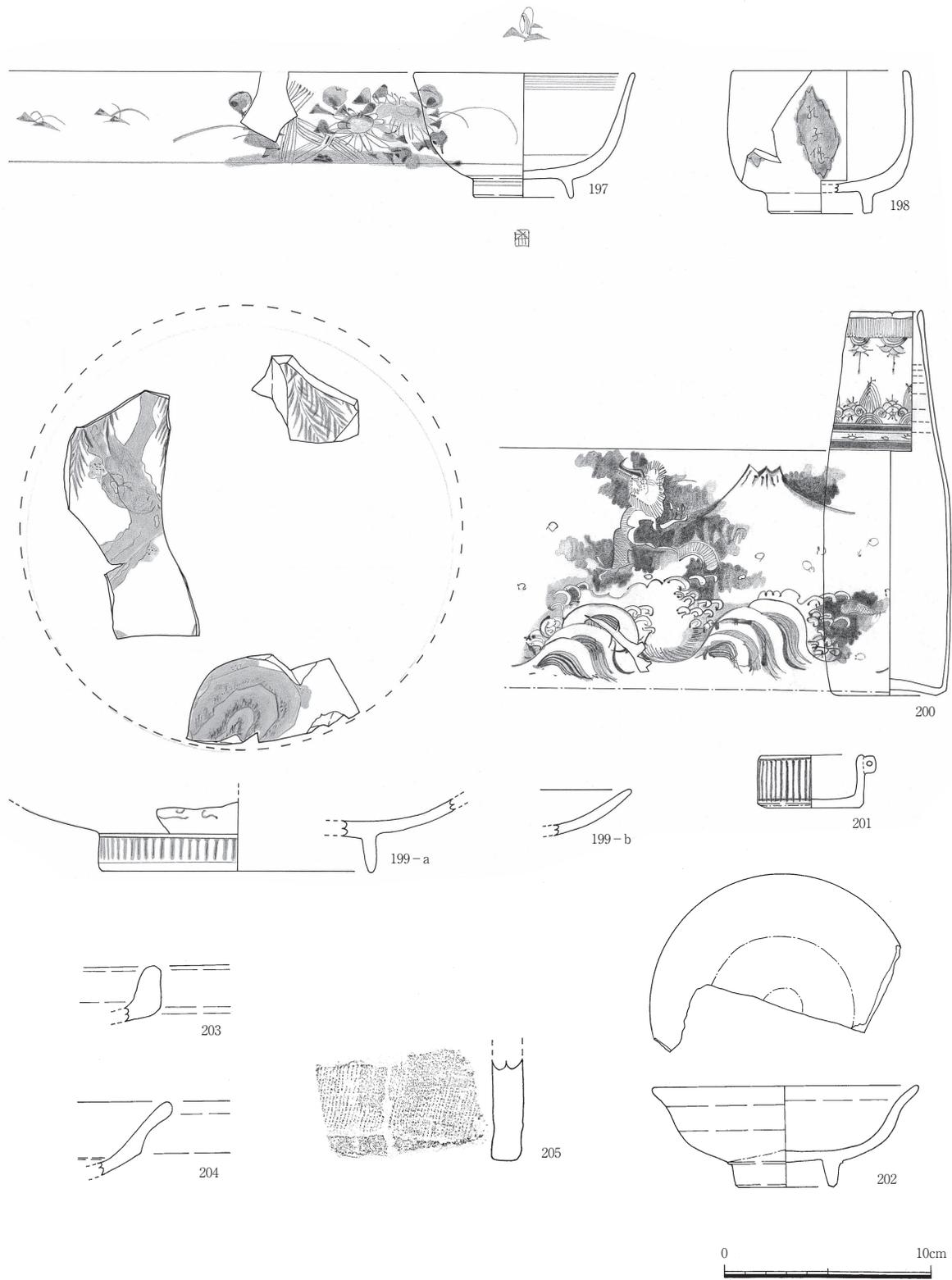


Fig.30 SK4出土遺物実測図 (1)

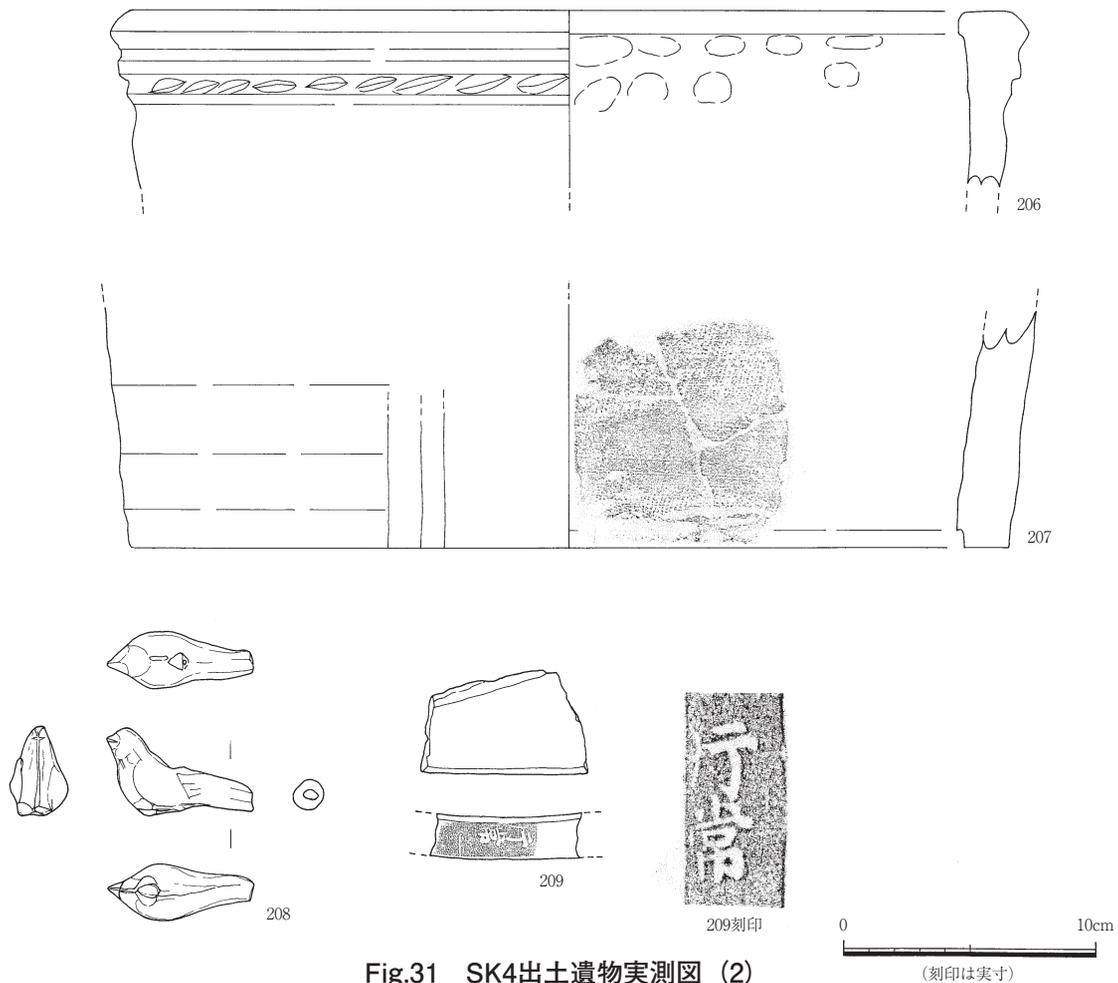


Fig.31 SK4出土遺物実測図 (2)

SK5 (Fig.29・32・33)

調査区北東部に位置する。西側部分が攪乱を受けるため、全体の規模は不明であるが、東西の残存長1.90m、南北長1.62m、深さ26cmの楕円形土坑である。壁は外上方に立ち上がり、床面は平坦である。埋土は灰黄褐色砂質シルトで、埋土中に炭化物を多く含んでいる。床面からは20～40cm大前後の石灰岩の角礫がまとまって出土している。

出土遺物は、個体数にして磁器（中碗17・小碗6・小杯4・小皿9・手塩皿1・猪口8・鉢2・蓋物1・蓋物蓋2・瓶2・壺1・水滴1・ミニチュア1・不明3）、陶器（中碗18・小皿2・中皿2・鉢1・播鉢2・蓋1・甕2・壺又は甕2・灯明皿10・火入れ1・鬢水入れ2・不明1）、土器（小皿32・白土器小皿2・焙烙1・焜炉1・ひょうそく1）、鉄製品（包丁1）、及び多数の瓦片である。

図示したものは、210～238である。210～216は磁器で何れも肥前産である。210は丸形中碗で高台内に渦「福」。211は白磁小杯。212は盤形の手塩皿である。213・214は波佐見産の蛇の目釉剥ぎの染付小皿。215は内面に墨弾きによる文様を描き、見込みにコンニャク印判による五弁花文を配する。高台内は略化した文字か。216は水滴で、建物を形取り、上面に円孔を穿つ。

217～231は陶器。217・218は尾戸窯の灰釉碗で、217は外面に鉄錆で文字を描く。219は肥前産又は肥前系の灰釉丸碗で、高台施釉。灰釉は灰黄色に発色する。220は京都・信楽系のせんじ碗。221は灰釉碗で灰白色を帯びる半透明の釉を施す。222は京都系の灰釉碗である。223は肥前産の甕

で、外面に白化粧土刷毛目を施す。224は香炉か。外面に丸彫りによる鐫を施し暗褐色の鉄釉を施す。胎土は灰白色を呈し、尾戸窯産の可能性をもつ。225は瀬戸・美濃産の胴丸形壺で、黄褐色の半透明の釉を施す。226は瀬戸・美濃産の鬢水入れ。227は肥前産の火入れ又は香炉で、外面の双方に白化粧土打刷毛目を円形に施している。228～231は灯明受皿で、錆釉を施す。

232～235・238は土師質土器。232・233は尾戸窯の白土器小皿で、232は陽刻型押しによる松竹梅鶴亀文、233は高砂文を施す。234・235は土師質土器小皿で、ともに口縁部に灯芯油痕が残る。

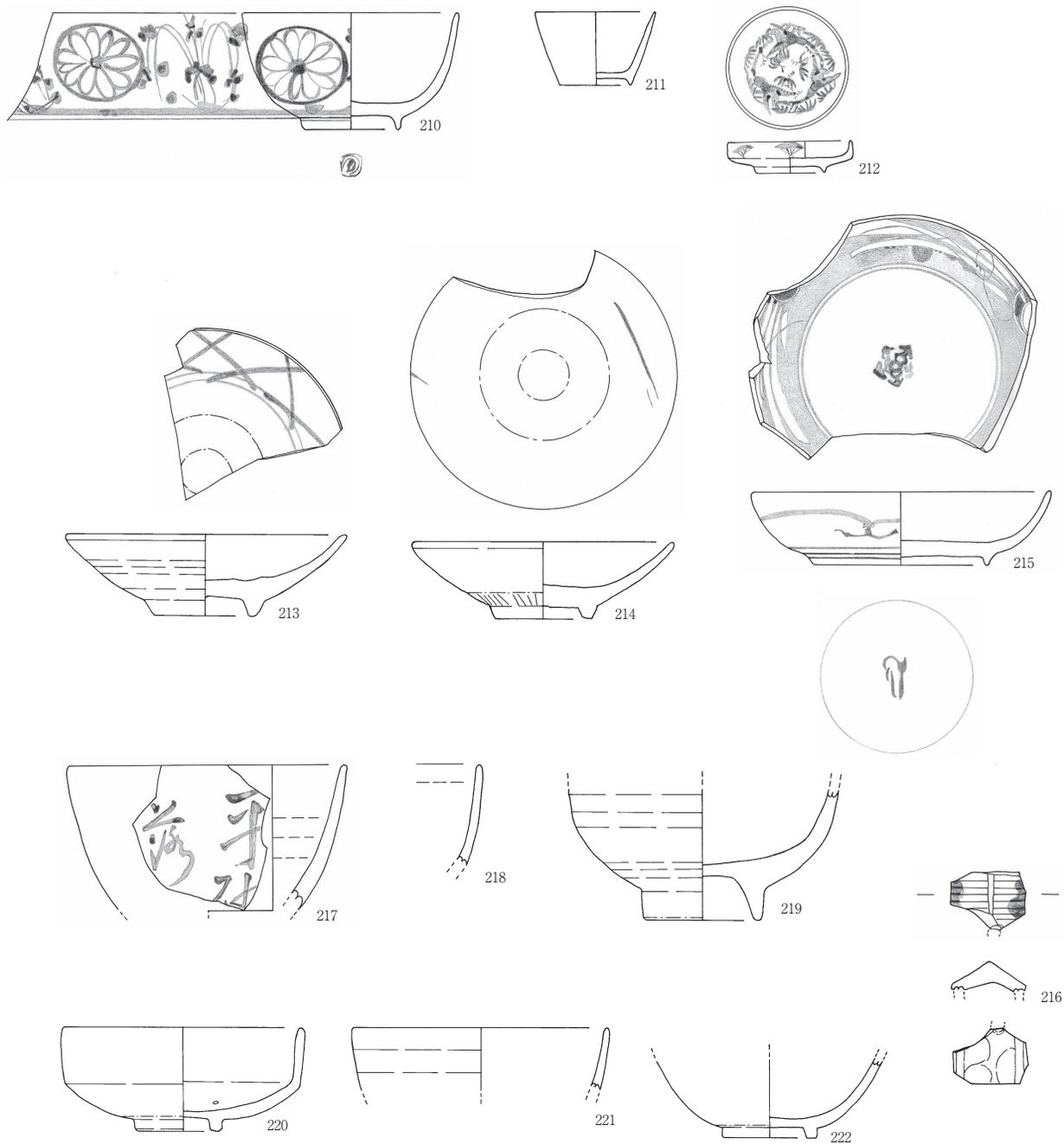


Fig.32 SK5出土遺物実測図 (1)



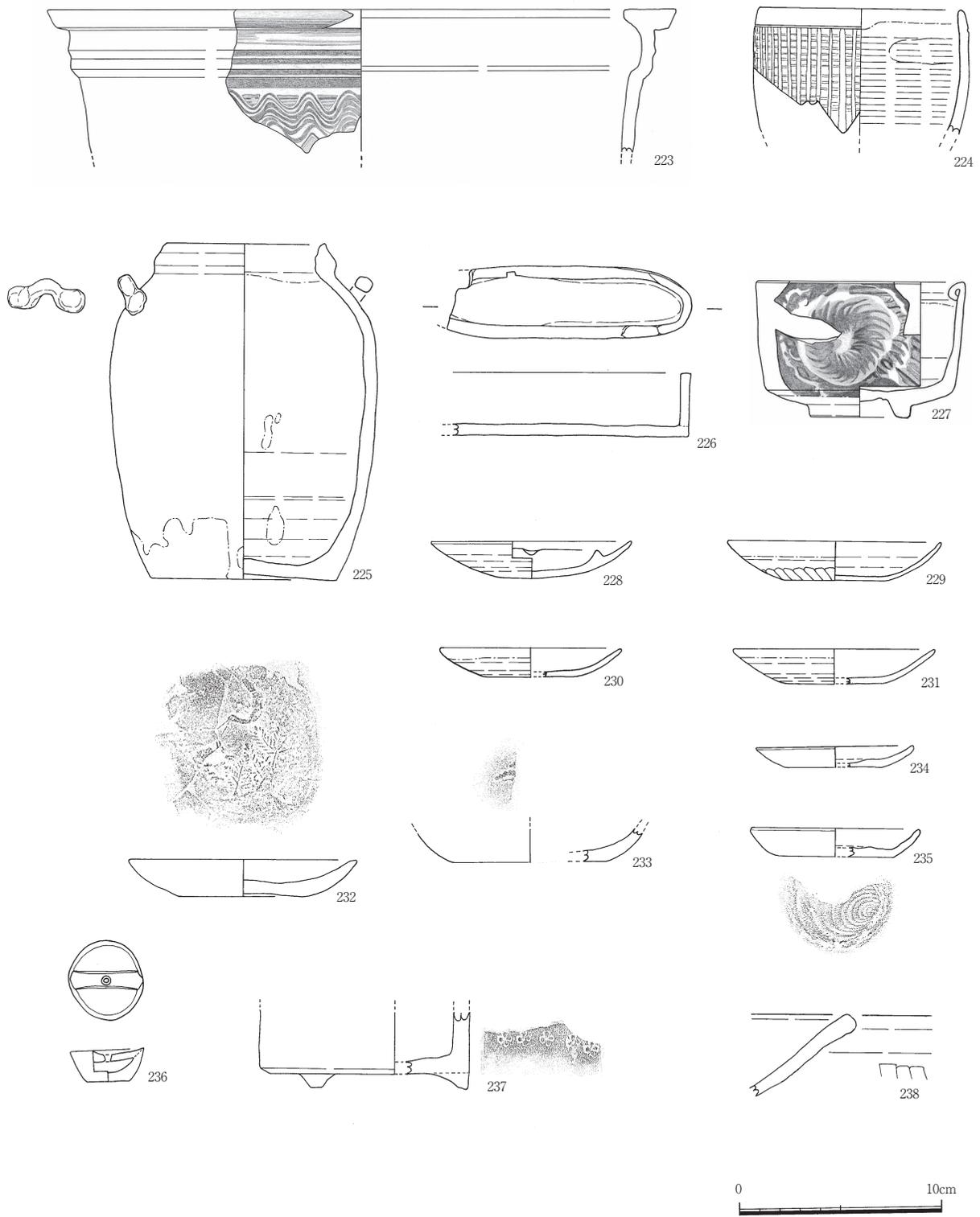


Fig.33 SK5出土遺物実測図 (2)

236は施釉土器のひょうそく。型押し成形で、内面に浅黄色の低下度釉を施す。237は瓦質土器の焜炉か。外面に印花文を施す。238は讃岐岡本系の焙烙である。

SK5は18世紀中葉に比定される。

SK6 (Fig.34・35)

調査区北部に位置する。平面形態は楕円形で、規模は長軸2.65m、短軸2.22m、深さ29cmを測る。断面形態は逆台形で、床面は平坦である。埋土は黒褐色粘質シルトで、埋土中には炭化物を多く含んでいる。他遺構との切り合いは無いが、西に近接するSK3とは出土遺物の接合関係があり、同時期に機能した廃棄土坑であったことが推察される。

出土遺物は、個体数にして磁器（中碗3・小杯5・小皿3・猪口4・鉢2・蓋物2・蓋物蓋3・瓶2・人形又は水滴1・不明1）、陶器（中碗4・小皿11・中皿2・播鉢3・捏鉢1・不明1）、土器（小皿30）、瓦10である。

図示したものは、239～255である。239～251は磁器で何れも肥前産である。239は初期伊万里の半筒形碗で、渦と蓮弁文を描く。高台に灰白色の粗砂が付着している。240は白磁碗で、細線のヘラ彫りで蓮弁文を描いている。241・242は高台無釉の白磁小杯である。243は白磁の菊花形鉢で、内面にヘラで菊弁を描く。244は丸形小皿。245は蓋物、246～248は蓋物の蓋である。

252・253は陶器。252は瀬戸・美濃産の灰釉水鉢で、内面に櫛描きによる波状文、見込みに印花文を施す。253は鉄釉の片口。254は肥前産の甕の底部で、SK3出土の甕（169）と同一個体である。外面に格子状の叩き目が残り、内面はヨコナデであるが、部分的に同心円状の当て具痕が見える。

255は土師質土器小皿である。

SK6は17世紀末に比定される。

SK7 (Fig.34・36～38)

調査区南部に位置する。西壁を除いた三方が攪乱されており、規模、形態とも不明であるが、東西の残存長3.44m、深さ90cmまで確認している。断面形態は逆台形で、壁は斜め上方に立ち上がり、床は平坦である。埋土は褐色砂礫である。切り合うSK12とは出土遺物の接合関係があり、同時期に機能した土坑であったことが分かる。

出土遺物は、個体数にして磁器（中碗35・小碗6・小杯10・小皿16・中皿4・猪口6・鉢3・碗蓋8・蓋物3・蓋物蓋3・瓶7・髪油壺2・紅皿7・人形又は水滴1・不明1）、陶器（中碗14・小碗7・小皿5・中皿5・播鉢5・捏鉢1・片口1・鍋5・鍋蓋3・土瓶4・土瓶蓋1・蓋物蓋3・蓋1・瓶4・壺1・甕5・火鉢3・火入れ3・火入れ又は香炉3・灯明受皿10・不明5）、土器（小皿20・白土器小皿5・焙烙4・羽釜1・焜炉8・さな1・火消壺1・火鉢1・土鍾1・人形1・ミニチュア2）、窯道具（ハマ1）、銅製品（煙管2・棒状製品1）、鉄製品（釘8）、瓦片20、及び貝殻である。SK7では19世紀を主体として幕末までの遺物が含まれるが、志野焼の体部細片など17世紀の遺物も少量含まれる。

図示したものは、256～296である。256～267は磁器。256・257は能茶山窯産の中碗。256は丸形中碗で外面に桜と四方嚮を描き、高台内に「能茶山製」銘をもつ。257は外面に花卉、見込みに宝文を描き、高台内に角枠内「茶」銘をもつ。258は肥前系の広東形碗である。259は関西系色絵小碗で、上絵付（黒・赤・その他は剥離）で鼠を描く。260は碗蓋で、摘み内に「□□山□年製」銘を

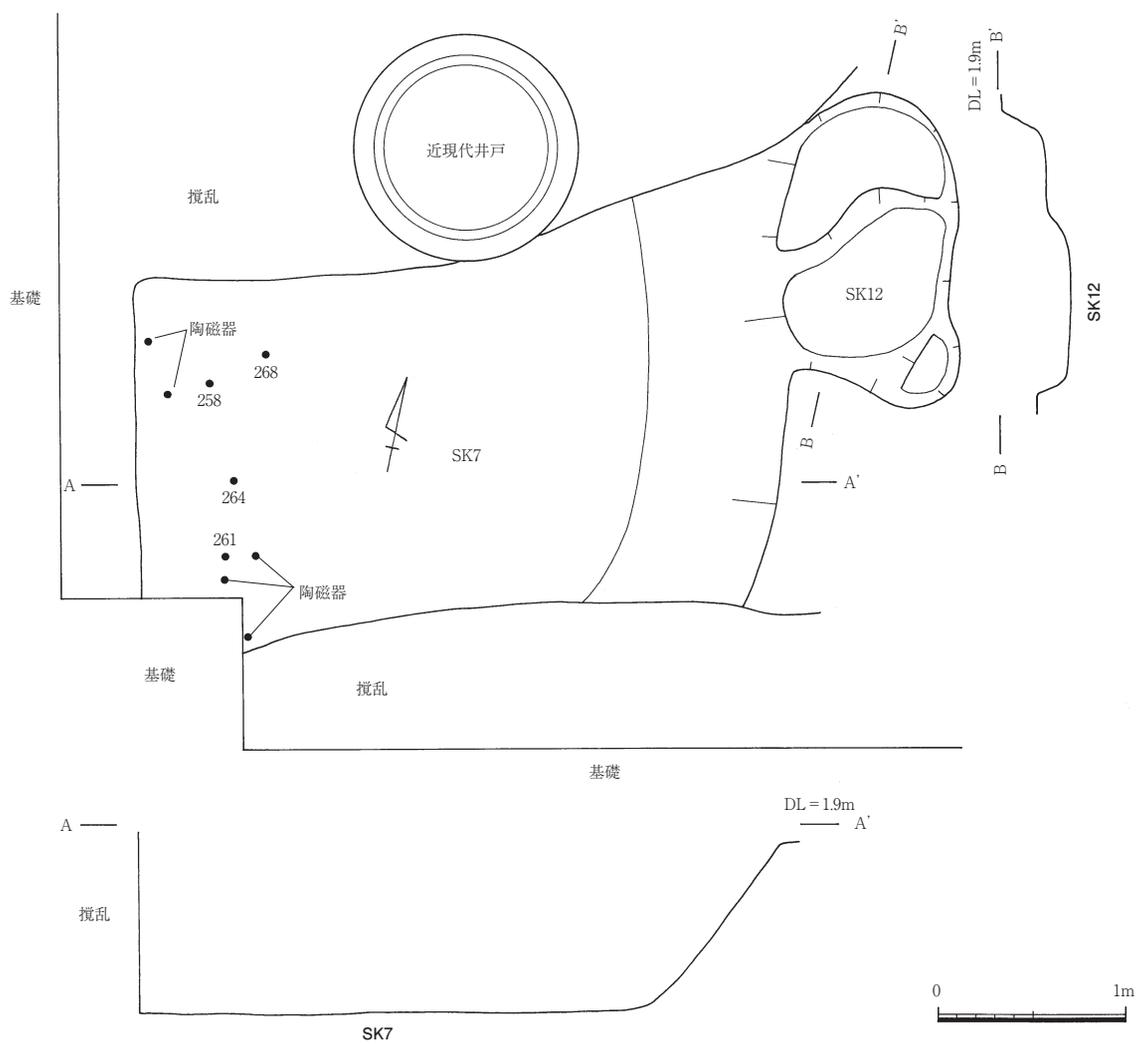
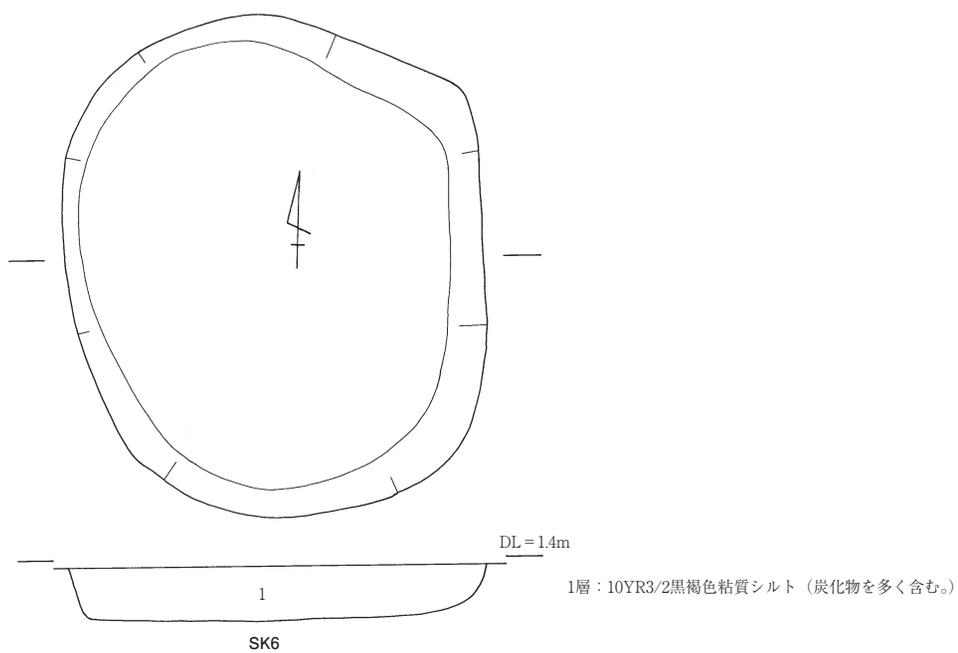


Fig.34 SK6・7・12平面図・セクション図・エレベーション図

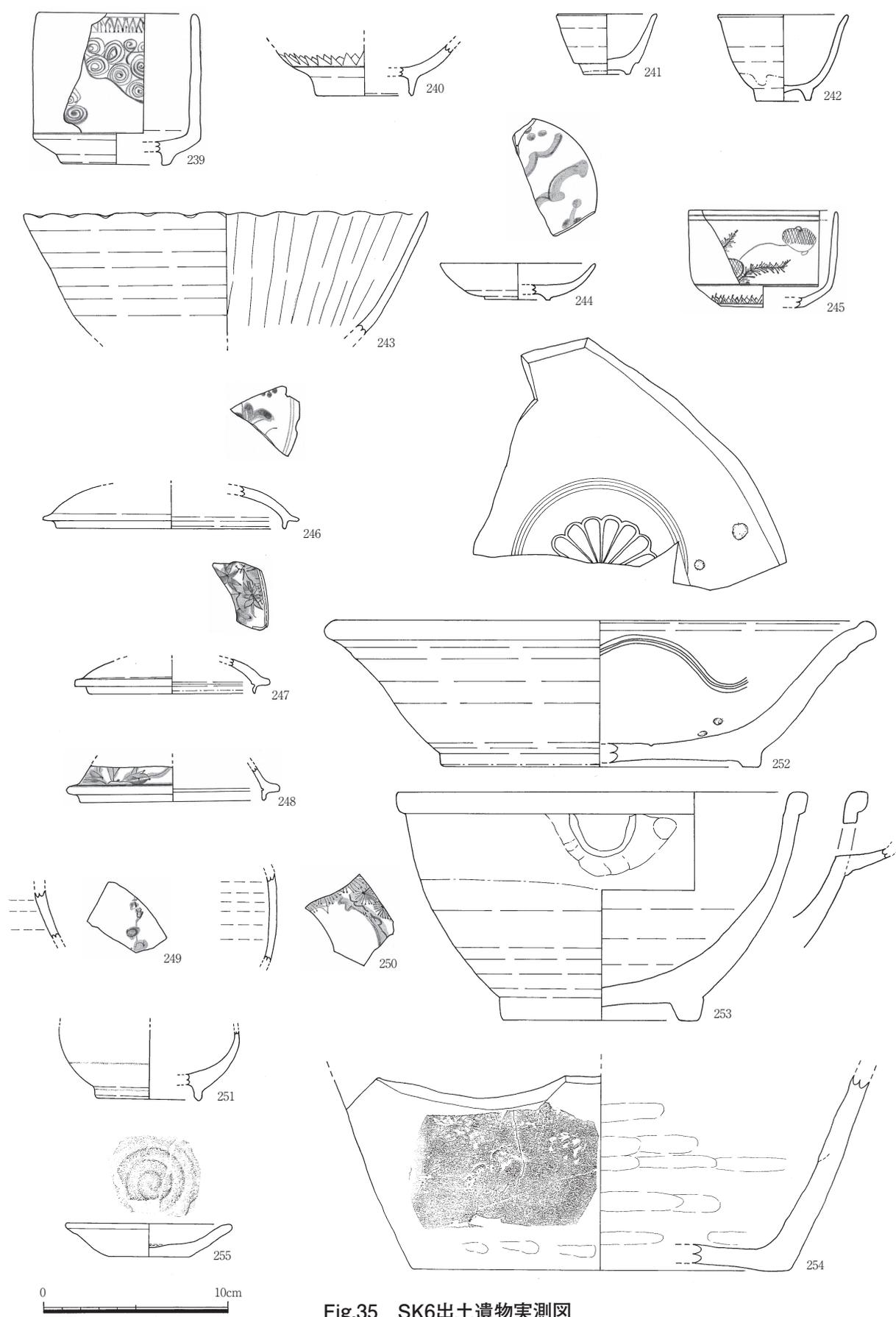


Fig.35 SK6出土遺物実測図

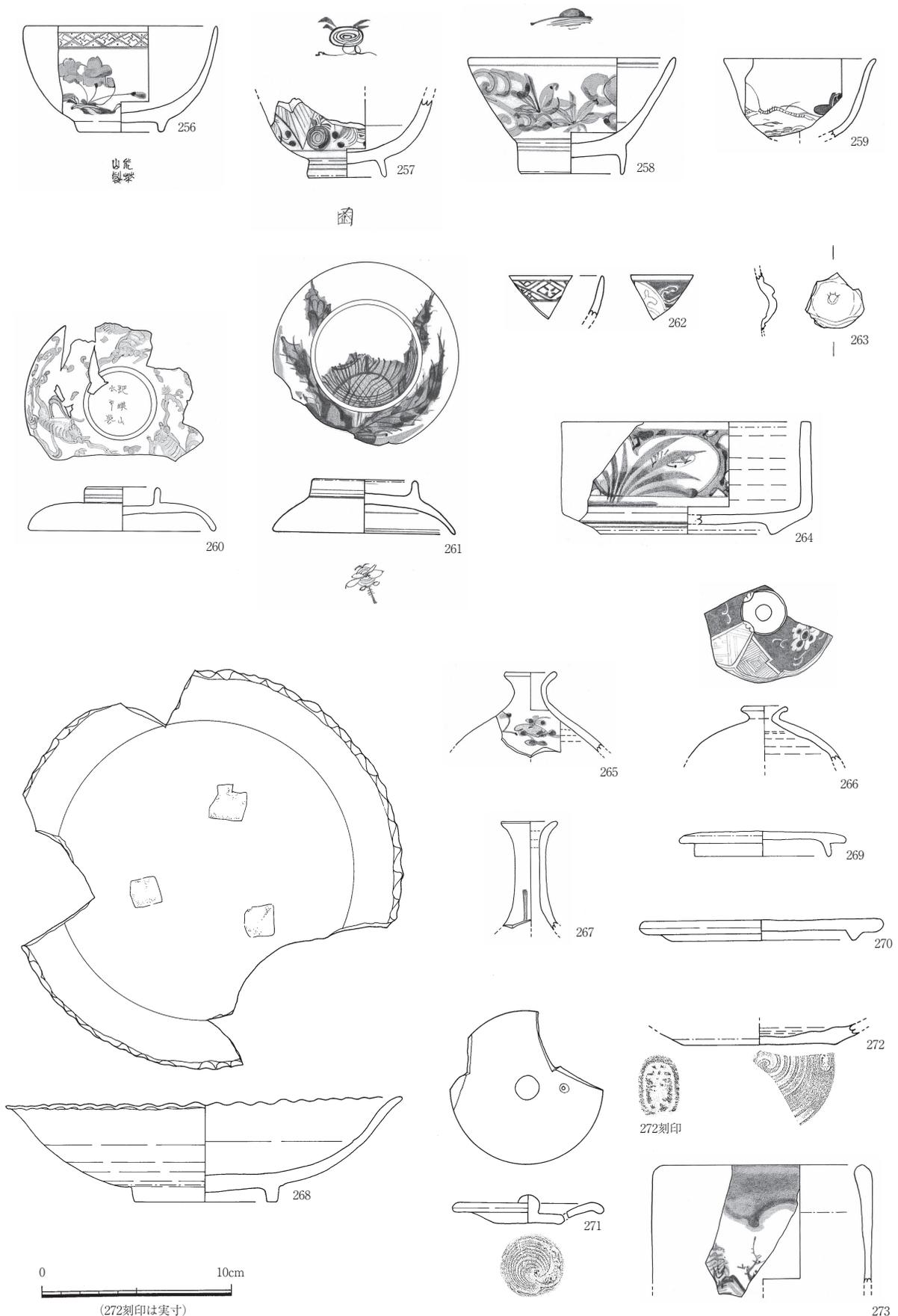


Fig.36 SK7出土遺物実測図 (1)

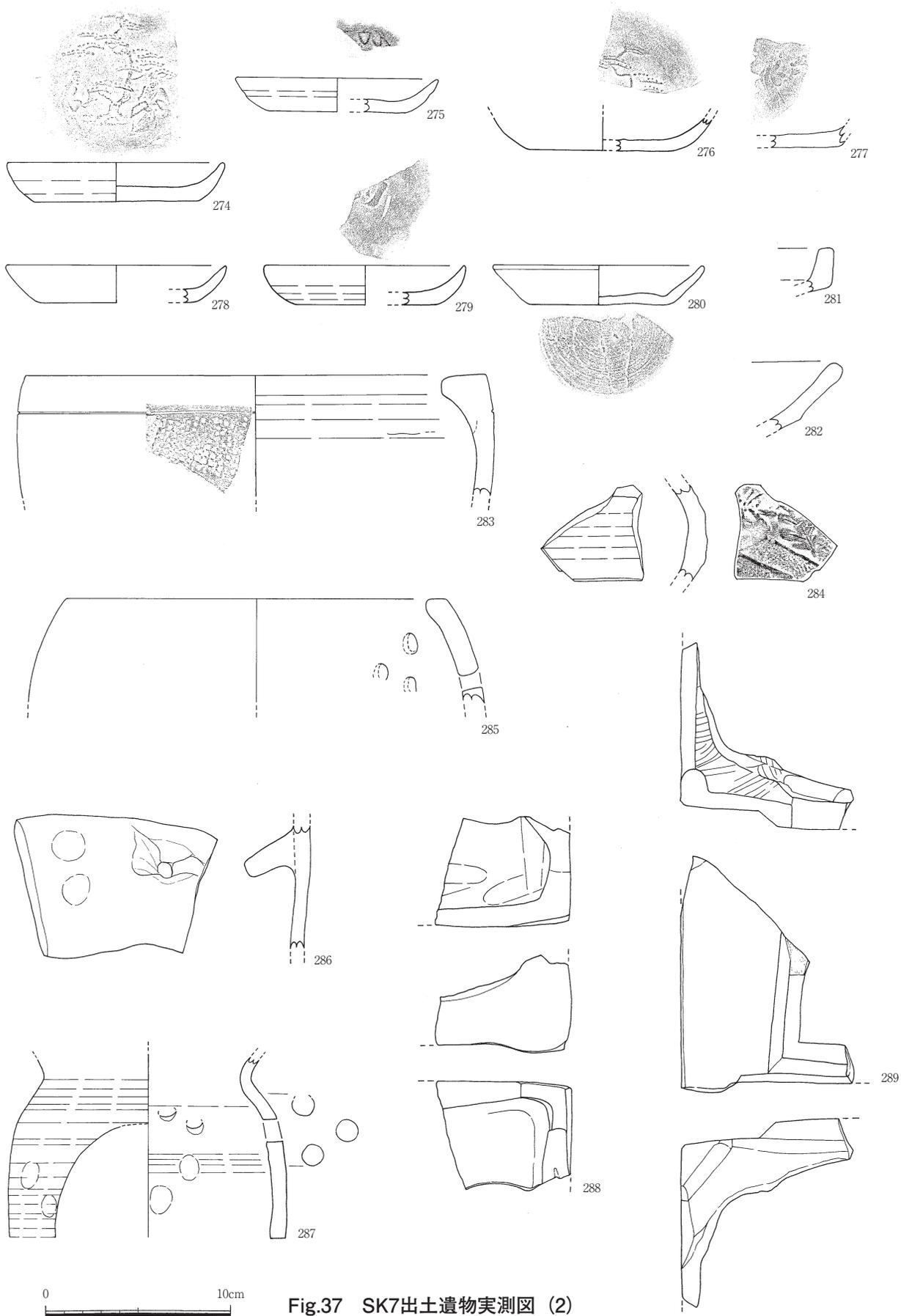


Fig.37 SK7出土遺物実測図 (2)

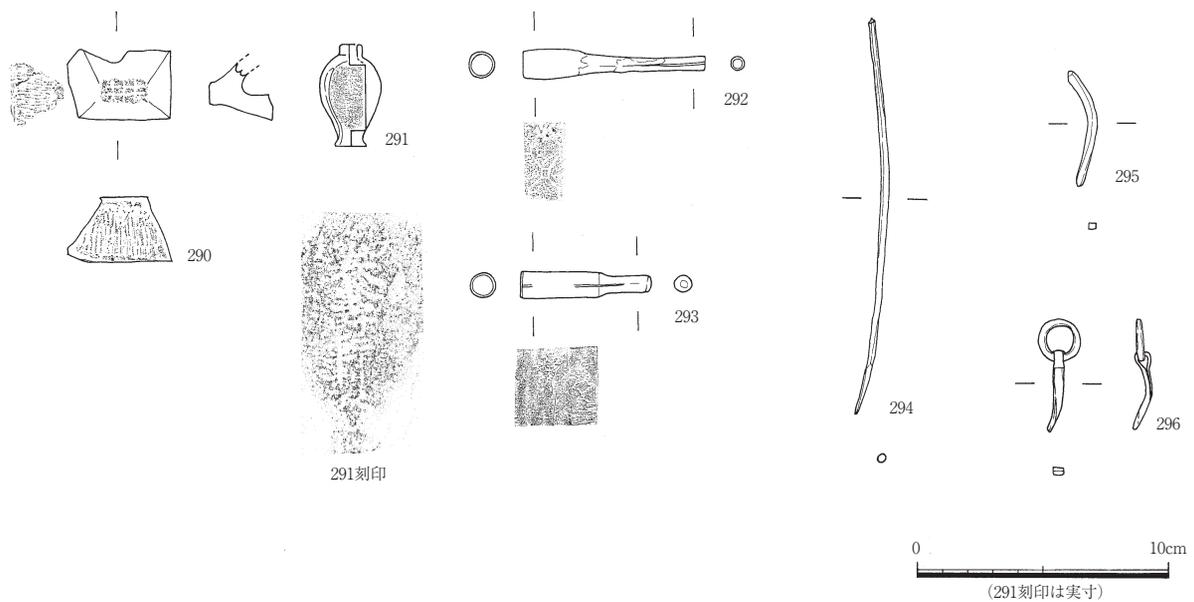


Fig.38 SK7出土遺物実測図 (3)

もつ。261～267は肥前産。261は広東形碗の蓋である。262は色絵染付の碗又は鉢で、赤・緑・金の上絵付で文様を描き、赤で地埋めをしている。263は人形又は水滴で、人物か。264は半筒形の蓋物で、窓内に草花文を描く。265・266は髪油壺で、266は赤、その他の上絵付で花卉・更紗文を描く。

268～273は陶器。268は瀬戸・美濃産の灰釉中皿。269は関西系の蓋物蓋。270は珉平焼の蓋物蓋で、光沢の強い黄色の釉を施す。271は土瓶又は急須の蓋で、尾戸窯産か。灰色の胎土に白化粧土と灰釉を施している。272は器種不明の底部片で、外底に小判枠内「安東」銘印をもつ。胎土は黄灰色を呈し、暗灰黄色の釉を施す。外底に渦状の匏痕が残る。273は火入れ。黄灰色の胎土に白化粧土を施し、呉須で山水文を描く。口縁部には緑釉を流し掛けしている。

274～283・285～289・291は土師質土器。284は瓦質土器、290は施釉土器である。274～279は尾戸窯産の白土器小皿で、275は文様不明、274・276・277は陽刻による高砂文、279は寿字文を施している。280は土師質土器小皿。281は関西系の焙烙。282は在地系の焙烙である。283は火鉢で、外面にヘラ彫りによる沈線と格子状の圧痕を施す。284は瓦質土器の火鉢で外面に印花文を施す。285は丸形の焜炉。286は筒型の焜炉で、内面に手捏ねによる突起を貼付している。287は京都系の焜炉で灰白色の胎土をもつ。内部施設の一部とみられ、外面を欠損する。前方にアーチ状の窓を認める。288・289は箱型の焜炉。289は外面に赤彩を施し、体部前方下位に方形の窓を認める。290は施釉土器のミニチュアで家形の箱庭道具か。型押し成形で、外面に橙色の低下度釉を施す。291はミニチュアの壺。型押し成形前後貼り合わせで、外面に陰刻による「養寿軒製」銘をもつ。

292～296は銅製品。292は・293は煙管吸口。294は簪の一部か。295・296は器種不明で、296は道具類の部材か。

SK7は19世紀中葉（幕末）に比定される。

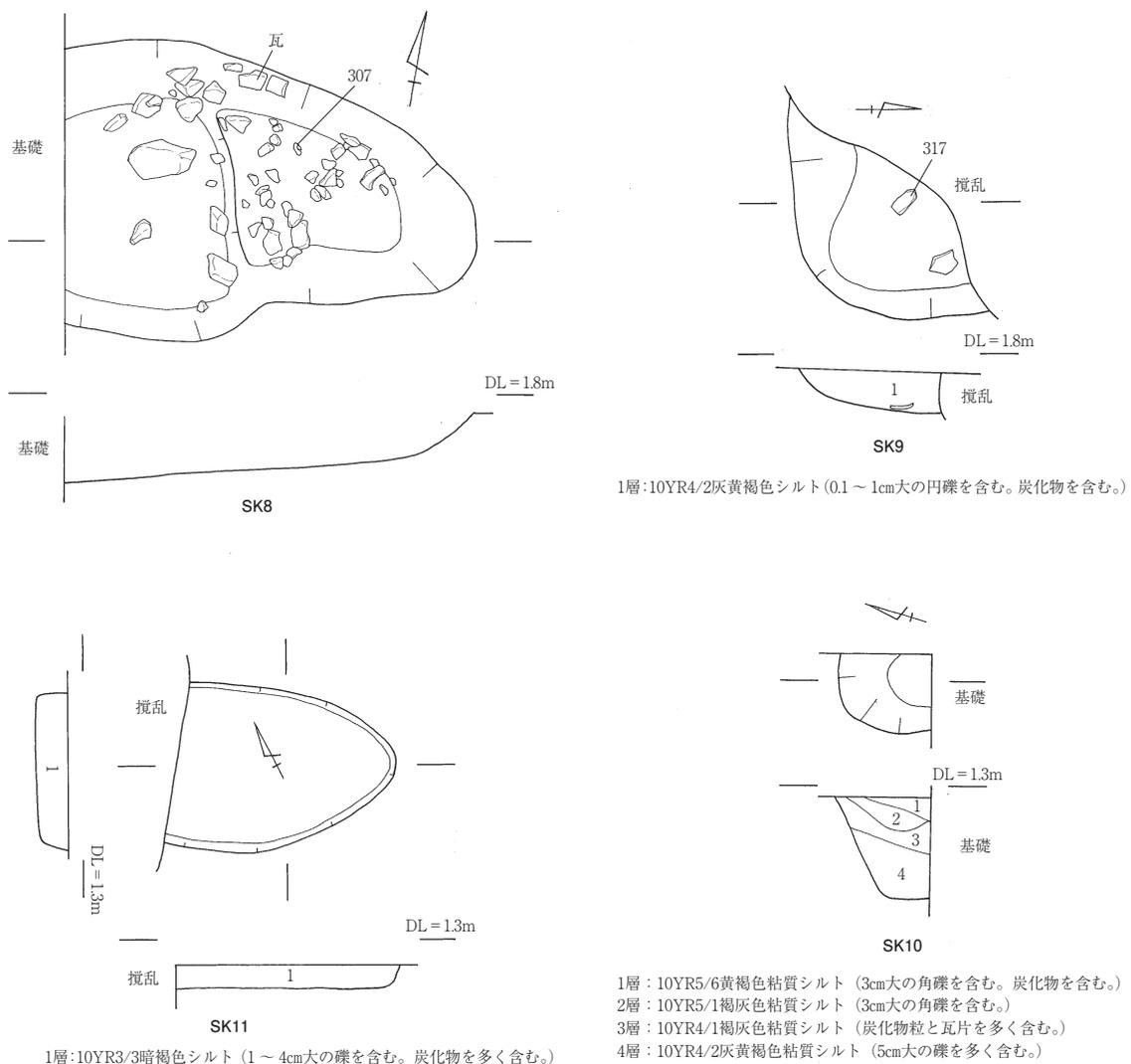


Fig.39 SK8～11平面図・セクション図・エレベーション図・遺物出土状況図 0 1m

SK8 (Fig.39・40)

調査区中央部に位置する。西側が攪乱を受けるため全体の規模は不明であるが、検出規模は長軸の残存長2.20m、短軸1.60m、深さ38cmを測る。断面形態は皿状である。埋土は灰黄褐色シルトで、炭化物を多く含んでいる。また下層から、10～30cm大の石灰岩とチャートの角礫が多く出土している。

出土遺物は、個体数にして磁器(中碗6・小碗2・小皿1・皿又は鉢3・猪口5・蓋物蓋1・仏飯器1・不明5)、青花(皿1)、陶器(中碗7・小皿3・中皿1・鉢1・播鉢1・壺1)、土器(小皿17)、銅製品(煙管1)である。また、この中には二次被熱を受ける資料4点が含まれている。

図示したものは、297～313である。297～299は肥前産の丸形小碗。298・299は外面にコンニャク印判による五弁花を施す。300は肥前産の青磁皿又は鉢。301は中国景德鎮窯系の青花皿である。302～304は尾戸窯の灰釉碗。305・306も灰釉碗で、尾戸窯か。307は唐津系灰釉陶器の小皿で、砂目を伴う。308は肥前産の刷毛目二彩手の皿。309は灰釉の火入れ又は香炉で、体部を部分的に窪ま

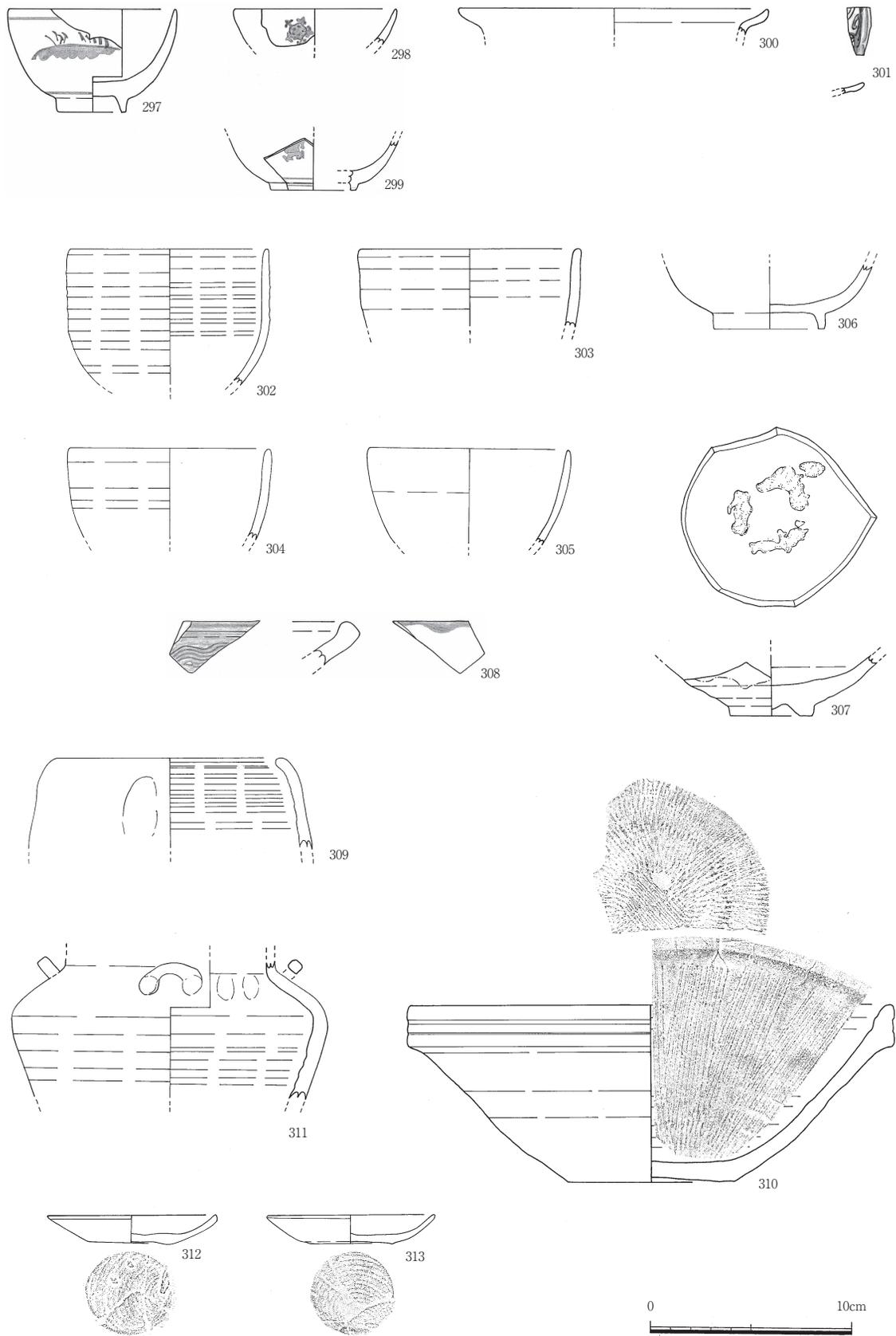


Fig.40 SK8出土遺物実測図

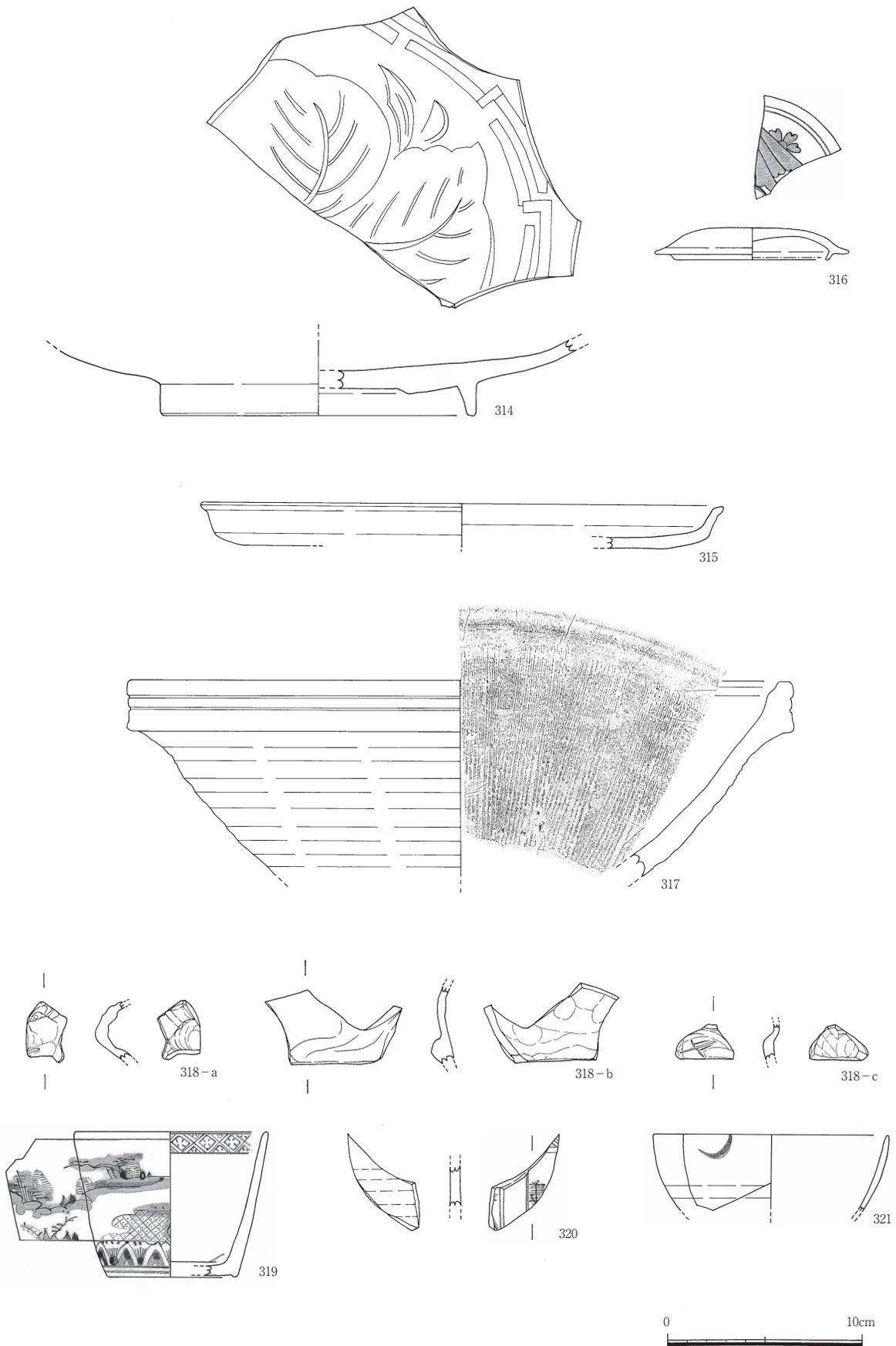


Fig.41 SK9・10出土遺物実測図

(SK9 : 314~318、SK10 : 319~321)

せる。310は備前焼の播鉢である。311は褐釉の壺で双耳を貼付する。312・313は土師質土器小皿である。図示したもの以外にも、肥前産の刷毛目碗、肥前産の高台施釉の灰釉丸碗、肥前内野山窯の銅緑釉小皿などが出土している。

SK8は18世紀前半に比定される。

SK9 (Fig.39・41)

調査区中央部に位置する。北部側の大部分が攪乱を受けるため、規模、形態とも不明であるが、東西の残存長1.16m、南北の残存長1.00m、深さ22cmを測る。断面形態は皿状とみられ、壁は斜め上方に立ち上がる。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は、個体数にして磁器（中碗2・小皿1・大皿1・蓋物蓋1・人形1・不明2）、陶器（中碗3・中皿1・播鉢1・不明1）、土器（火鉢1）である。

図示したものは、314～318である。314・316・318は磁器で、何れも肥前産。314は青磁大皿で内面に片切彫りによる植物文様を描く。316は染付蓋物蓋である。318は色絵の水滴又は人形。動物とみられ、部分的に赤の上絵具を施す。315・317は陶器。315は灰釉皿で灰白色を帯びる半透明の釉を施す。尾戸窯産の可能性をもつ。317は備前焼播鉢である。

SK9は18世紀前半に比定される。

SK10 (Fig.39・41)

調査区東部に位置する。南部と西部側が攪乱を受けるため規模、形態とも不明であるが、東西の残存長0.43m、南北の残存長0.50m、深さ54cmを測る。断面形態は逆台形とみられ、壁は斜め上方に立ち上がる。埋土は褐灰色粘質シルト他で、埋土中には打ち砕いた瓦片が多量に含まれている。

出土遺物は、個体数にして磁器（中碗2・小皿1・小杯1・鉢1・猪口1）、陶器（中碗3・播鉢1・行平1・土瓶1・灯明皿1）、土器（焙烙1・人形1）、及び瓦片40数点である。

図示したものは、319～321である。319は肥前産の色絵染付猪口で、呉須と赤・緑・黒の上絵付で山水文と蓮弁文を描く。320は初期伊万里の染付碗で、外面に面取りを施し寿字を描いている。321は尾戸窯産の灰釉丸形中碗で、鏝絵を描く。

SK10は19世紀前半に比定される。

SK11 (Fig.39・42)

調査区北東部に位置する。西部側が攪乱を受けるため全体の規模は不明であるが、長軸の残存長1.20m、短軸0.90m、深さ16cmを測る。床面は平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。埋土は暗褐色シルトであり、埋土中に炭化物を多く含んでいる。

出土遺物は、個体数にして磁器（中碗1・小皿3）、陶器（中碗6・小皿2・播鉢2・捏鉢1・壺又は甕1・不明1）、土師質土器（小皿2・白土器小皿1・人形1）である。

図示したものは、322～333である。322～324は磁器。322・323は初期伊万里の皿で、揃いのものとみられる。324は肥前産の青磁碗で、釉は明オリーブ灰色に発色する。325～331は陶器。325は尾戸窯産の灰釉碗で、高台内に渦状の鉋痕を装飾的に加えている。326は鉄釉中碗。薄手で、暗褐色の釉を施す。327は肥前産の鉄釉碗。328は肥前産の高台施釉の灰釉碗である。329は肥前内野山窯の緑釉小皿で、内面に緑釉、外面に灰釉を施す。330は肥前産の刷毛目大皿又は鉢である。331は

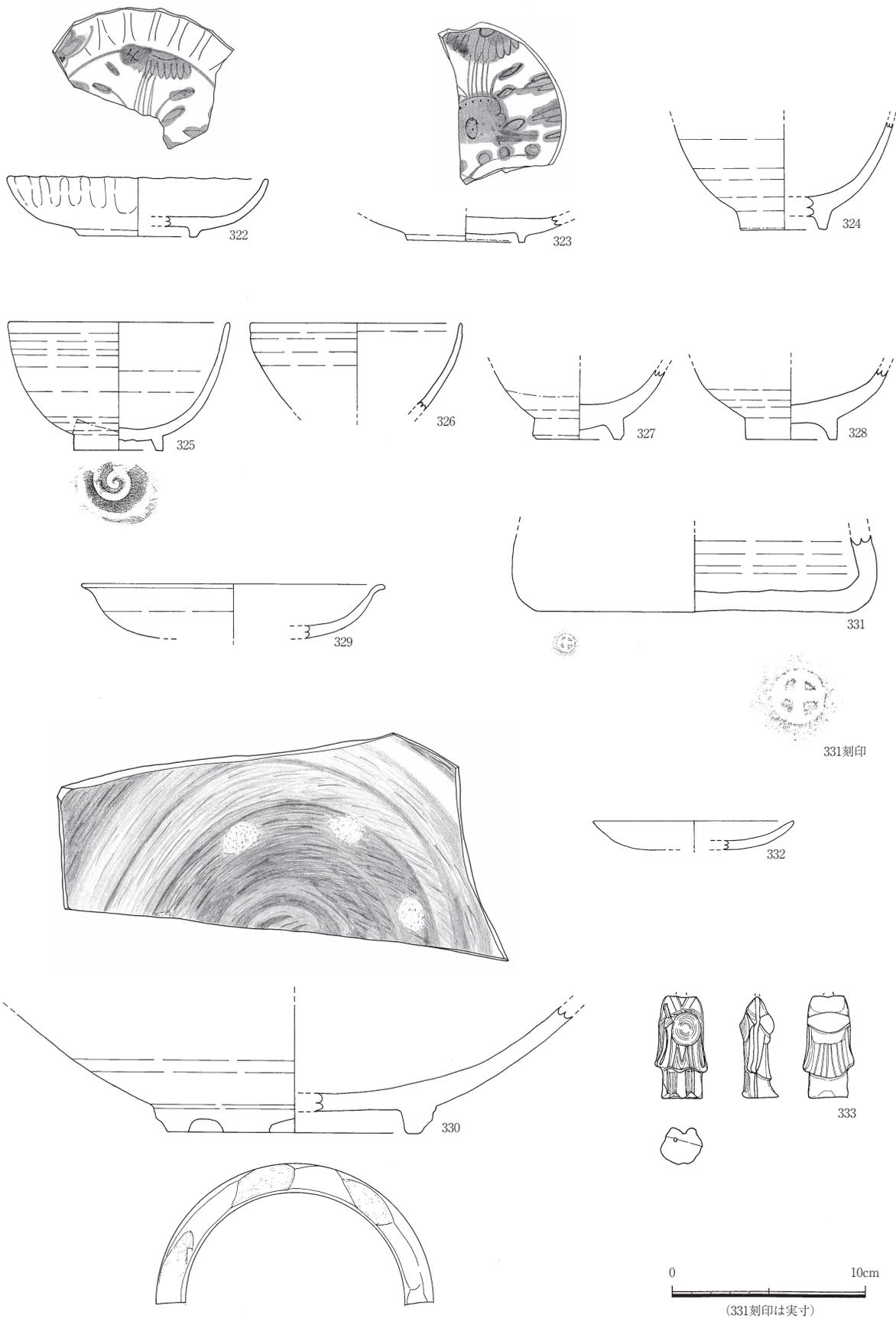


Fig.42 SK11出土遺物実測図

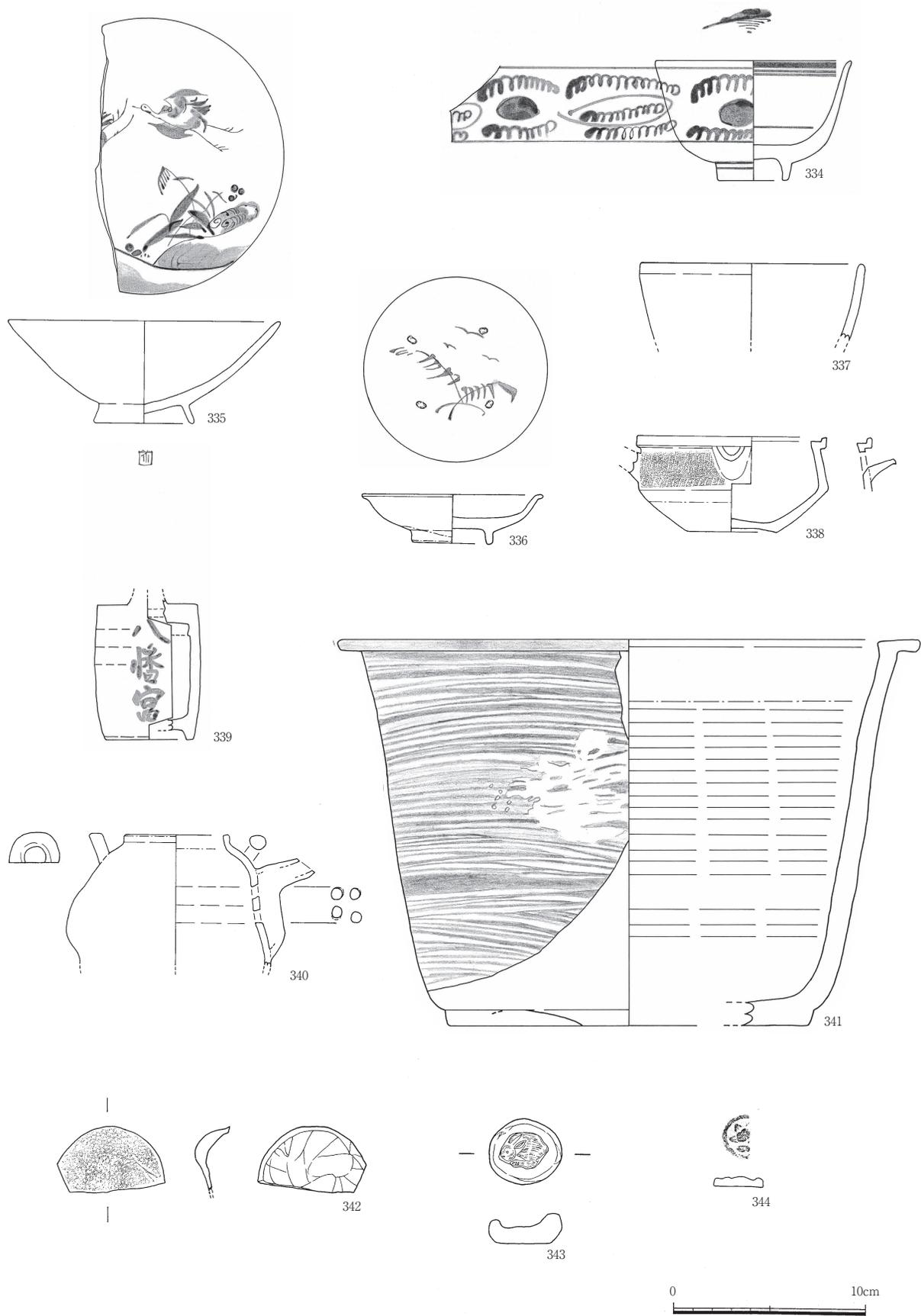


Fig.43 SK12出土遺物実測図 (1)

備前焼の船徳利で、外面に暗赤褐色の鉄釉を刷毛塗りする。外底に銘印をもつ。332・333は土師質土器。332は尾戸窯の土器小皿。白色系の胎土をもつもので、内外面にナデを施す。333は人形で西行か。型押し成形貼り合わせによるもので、中実。底部に貫通しない穿孔を認める。胎土はにぶい黄褐色を呈する。

図示したもの以外にも、肥前産の京焼風陶器碗、刷毛目捏鉢、備前焼播鉢、備前焼の壺又は甕、などが出土している。

SK11は18世紀前半に比定される。

SK12 (Fig.34・43・44)

調査区南部に位置する。平面形は楕円形で、検出規模は長軸1.52m、短軸1.00m、深さ37cmを測る。断面形態は不整形で、床面は段をなす。埋土は褐色砂礫である。西に接する大型の廃棄土坑SK7とは出土遺物の接合関係があり、同時期に機能したと考えられる。

出土遺物は、個体数にして磁器（中碗6・大碗1・小杯1・碗蓋1・小皿6・中皿1・猪口1）、陶器（中碗2・小碗1・小皿1・播鉢1・片口1・鍋3・鍋蓋2・土瓶4・土瓶蓋1・瓶2・甕4・灯明受皿3・不明1）、土器（小皿3・焙烙1・焜炉1・火鉢1・人形1・泥面子1・型1）、瓦20、銅製品（簪1）、鉄製品（不明1）、及び骨片で、19世紀中葉までの遺物が含まれる。

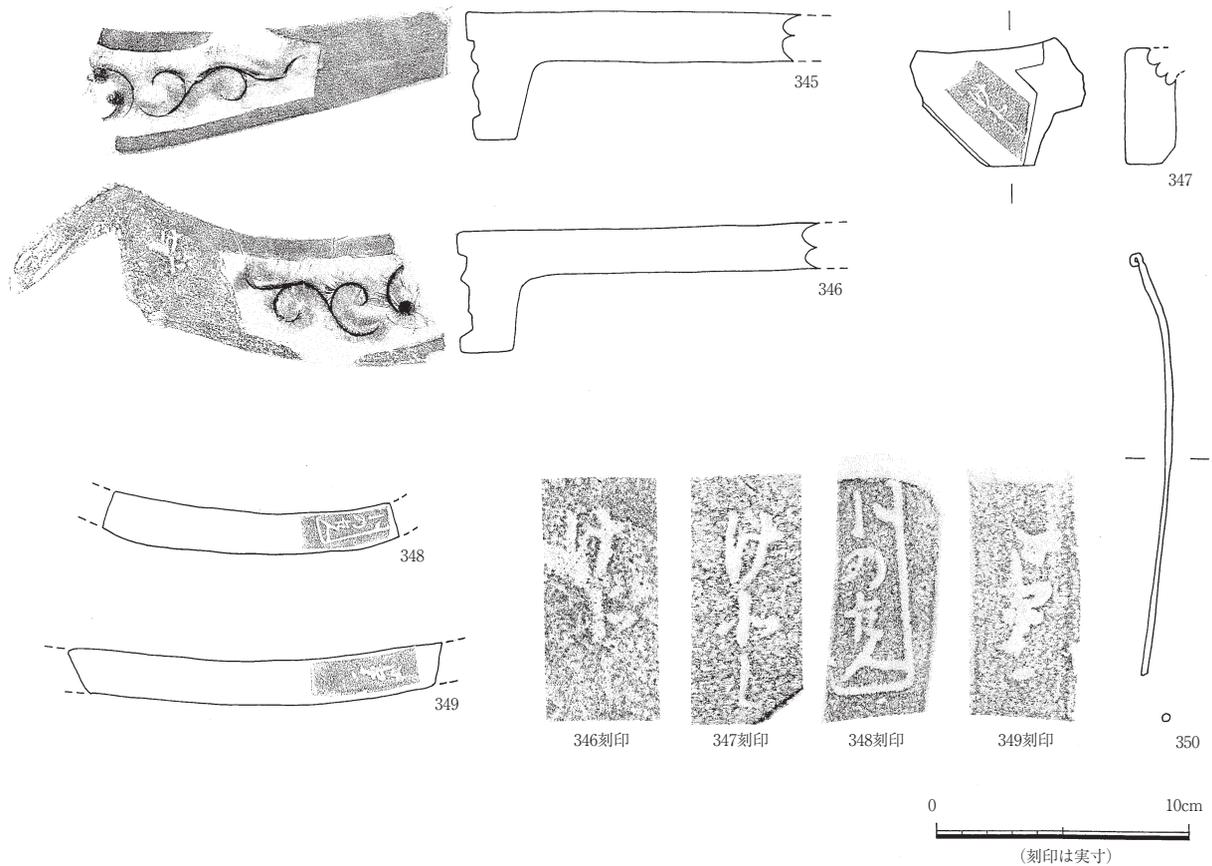


Fig.44 SK12出土遺物実測図 (2)

図示したものは334～350である。334・335は磁器。334は瀬戸・美濃産の端反形中碗。335は能茶山窯産の平形碗で、内面に鳥と葦を描く。高台内に角枠内「茶」銘をもつ。

336～341は陶器。336は尾戸窯の灰釉小皿か。内面に呉須で葦と雁を描くもので、内面には黒褐色の目痕が残る。337は尾戸窯の灰釉碗か。338は行平で、口径約10cmの小型のものである。外面上半に鉄釉を施した後、飛鉋を施す。能茶山窯の製品とみられる。339は尾戸窯の神酒徳利。灰白色を帯びる半透明の釉を施し、鉄錆で「八幡宮」の文字を描く。340は緑釉の土瓶で、緑釉はオリーブ灰色に発色する。341は手水鉢又は植木鉢で外面に白化粧土刷毛目と打ち刷毛目を施す。

342～344は土師質土器。342は人形、343は型、344は泥面子である。345～349は瓦。345～347は軒平瓦で346は瓦当に銘印をもつ。348・349は平瓦で、側面に銘印をもつ。350は銅製品で簪か。

図示したものの他にも、能茶山窯の鉄釉甕、関西系甕、備前焼播鉢、関西系の灯明受け皿、関西系焙烙、白色系の素地をもつ焜炉などが出土しているが、酸化コバルトによる染付磁器は確認できていない。

SK12は19世紀中葉（幕末）に比定される。

SK13 (Fig.45)

調査区北東部に位置する。平面形は楕円形で、検出規模は長軸1.47m、短軸1.21m、深さ20cmを測る。床面は平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。埋土は褐色砂礫である。出土遺物は、個体数にして磁器（碗1・小皿3）、陶器（中碗1・壺又は甕1）、土器（小皿3）である。

図示したものは肥前産の壺又は甕（351）である。粘土紐積み上げ成形によるもので、内面に同心円状の当て具痕が残る。外面に黒褐色の釉を施している。16世紀末～17世紀前半の製品である。

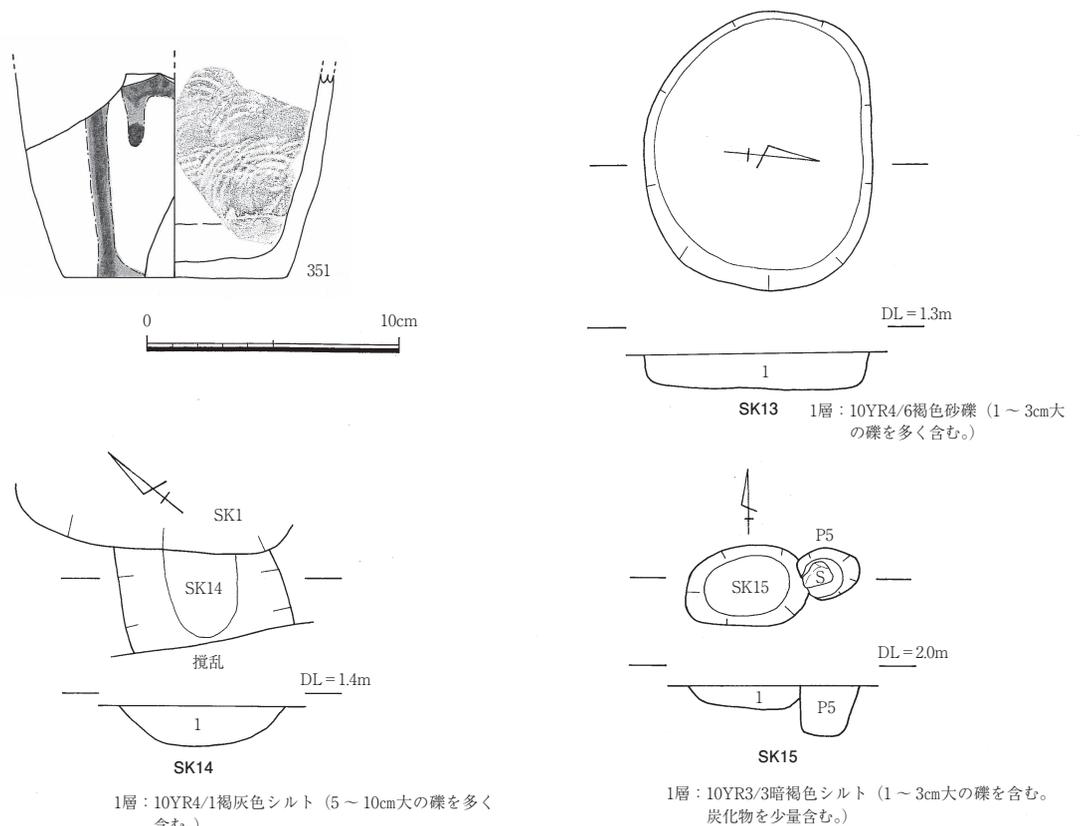


Fig.45 SK13～15平面図・セクション図・SK13出土遺物実測図

この他産地不明の灰釉碗等が出土するが、出土遺物が僅少であり、SK13の時期の詳細は不明である。

SK14 (Fig.45)

調査区北東部に位置する。南部と北部が攪乱を受けるため規模と形態は不明であるが、南北残存長0.52m、東西長0.88m、深さ22cmを測る。断面形態は皿状で、埋土は褐灰色シルトである。切り合い関係では、幕末から明治初頭の土坑SK1に切られている。

出土遺物は、確認できていない。

SK15 (Fig.45)

調査区の南部に位置する。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸残存長0.66m、短軸0.42m、深さ12cmを測る。断面形態は皿状で、壁は斜め上方に立ち上がる。埋土は暗褐色シルトである。切り合い関係では、P5と切り合うが前後関係は不明である。

出土遺物は、白磁又は染付の碗1点と器種不明の磁器細片1点である。

SK17 (Fig.46~50)

調査区東部に位置する。西部と南部側の一部を切られるため全体の規模は不明であるが、東西の残存長7.2m、南北の残存長6.5m、深さ40~80cmを測る大型の不整形土坑である。床面は北側が深く、南側部分についても緩やかに高低差がある。壁は斜め上方に立ち上がる。埋土は暗褐色シルト、にぶい黄褐色シルトを基調とし、埋土中に円礫を多量に含んでいる。また、最下層には炭化物が多く含まれており、特に南東部側の床面には強い炭化物の集中が広がる。また、炭化物集中と同じレベルではチャート、石灰岩、砂岩からなる径20~40cm大の角礫がまとまって出土している。切り合い関係では、17世紀前葉のSK122、18世紀前葉のSX4、18世紀末~19世紀前葉のSK83、19世紀中葉のSK39・SK84、及びSD2・P1・2・4・117~119・SX3に切られる。

出土遺物は、個体数にして青花(碗2・小皿2)、磁器(碗1・香炉1)、陶器(碗8・中皿4・小皿11・向付10・播鉢7・瓶1・不明1)、土器(小皿60)、銅製品(匙2)、瓦片15、鞆の羽口1、及び鉄滓約3200gであり、17世紀前葉までの遺物が含まれる。このうち鉄滓は、下層の1~4層内から出土したもので、特に南東部側床面の炭化物集中の付近に多く分布している。

図示したものは、352~409である。352~355は青花。352は古染付の碗。353は漳州窯系の青花碗で、乳濁した釉が施される。354は景德鎮窯系の青花皿で内外面に花唐草文を描く。高台内に放射状の鉋痕が残る。355は漳州窯系の青花皿である。356は白磁碗である。

357~396は陶器。357は絵唐津。358~361は唐津系灰釉陶器の碗である。362~365は初期京焼で、軟質施釉陶器の碗。366~369は唐津系灰釉陶器の小皿で、366は内底に砂目痕を認める。370・371は絵唐津の皿である。372は唐津系灰釉陶器の大皿で胎土目痕を伴う。373は瀬戸の灰釉皿、374は瀬戸のひだ皿で、ともに大窯期の製品である。375は瀬戸の製品とみられるが、器種不明。黒褐色の釉を施している。376~384は志野焼。385・386は青織部の向付。388は志野焼の香合の身である。387は蓋物か。口縁端部無釉で、内外面に黒褐色の釉を施している。389は中国産の青磁香炉で、13世紀~14世紀の製品である。390~393は備前焼の播鉢で、何れも斜方向の櫛目をもつ。394は備前焼の鉢である。395は備前の小瓶の底部。396は鉢の底部で、内底と外底に灰オリーブ色の釉が掛かる。肥前又は福岡の製品である。

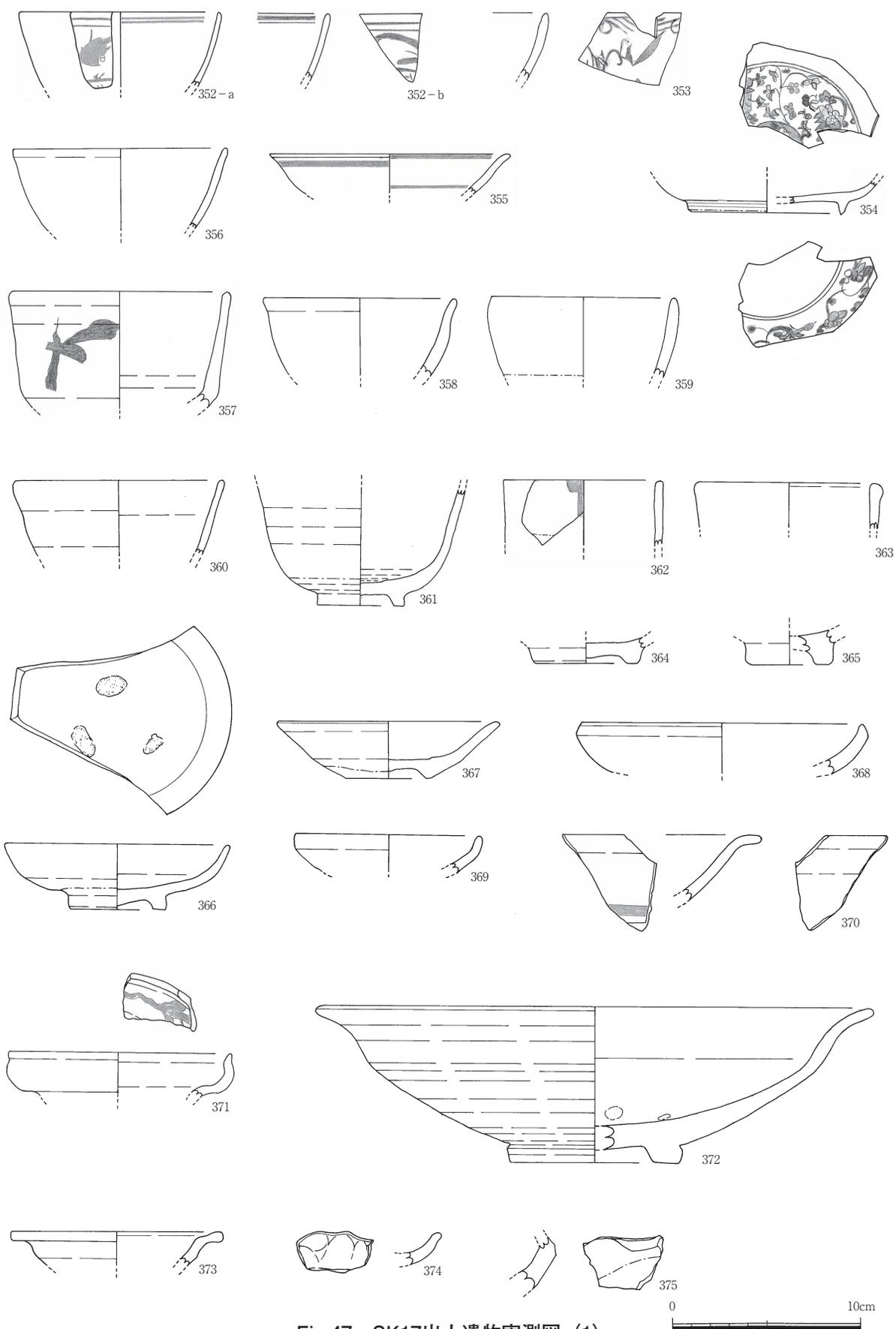


Fig.47 SK17出土遺物実測図 (1)

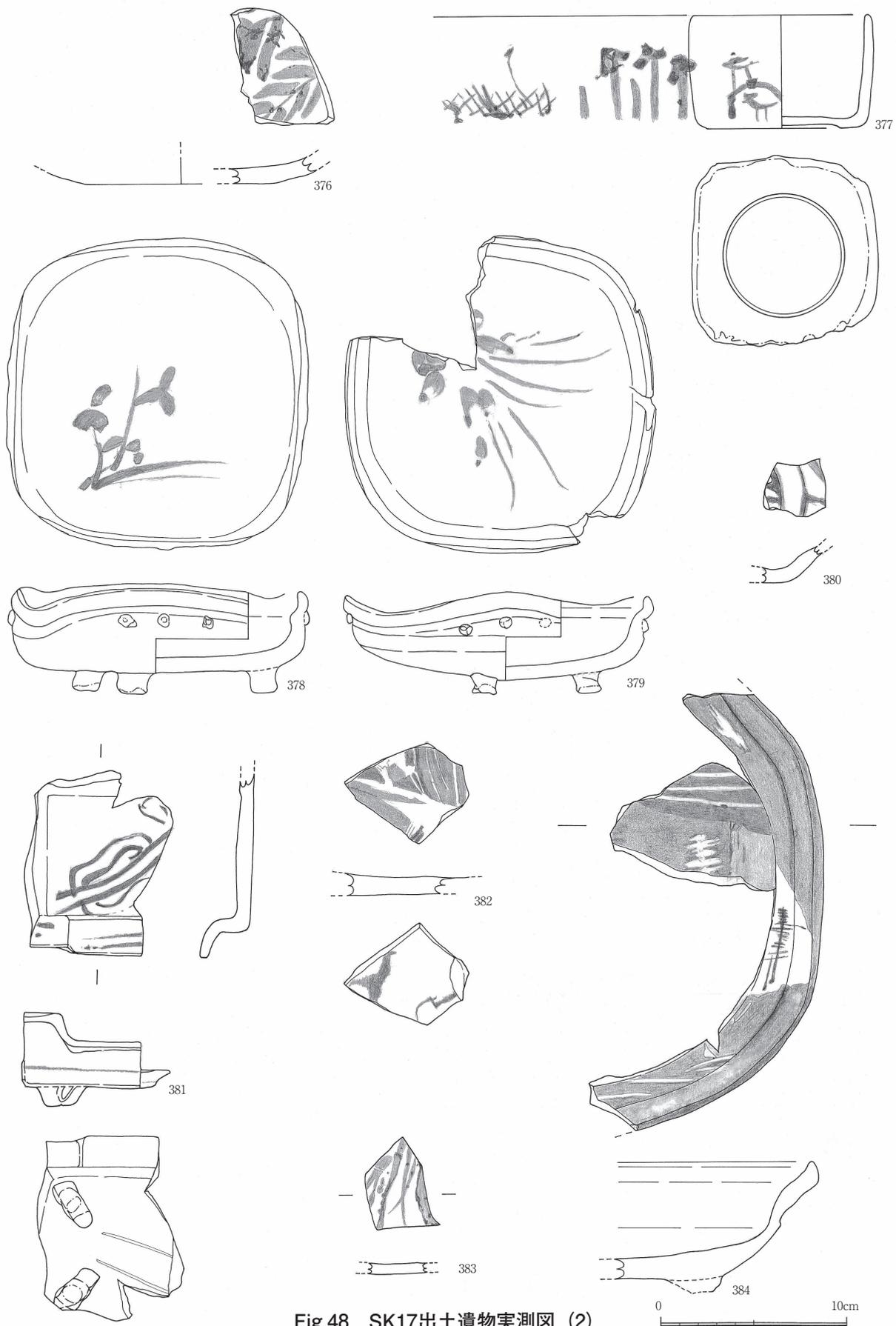


Fig.48 SK17出土遺物実測図 (2)

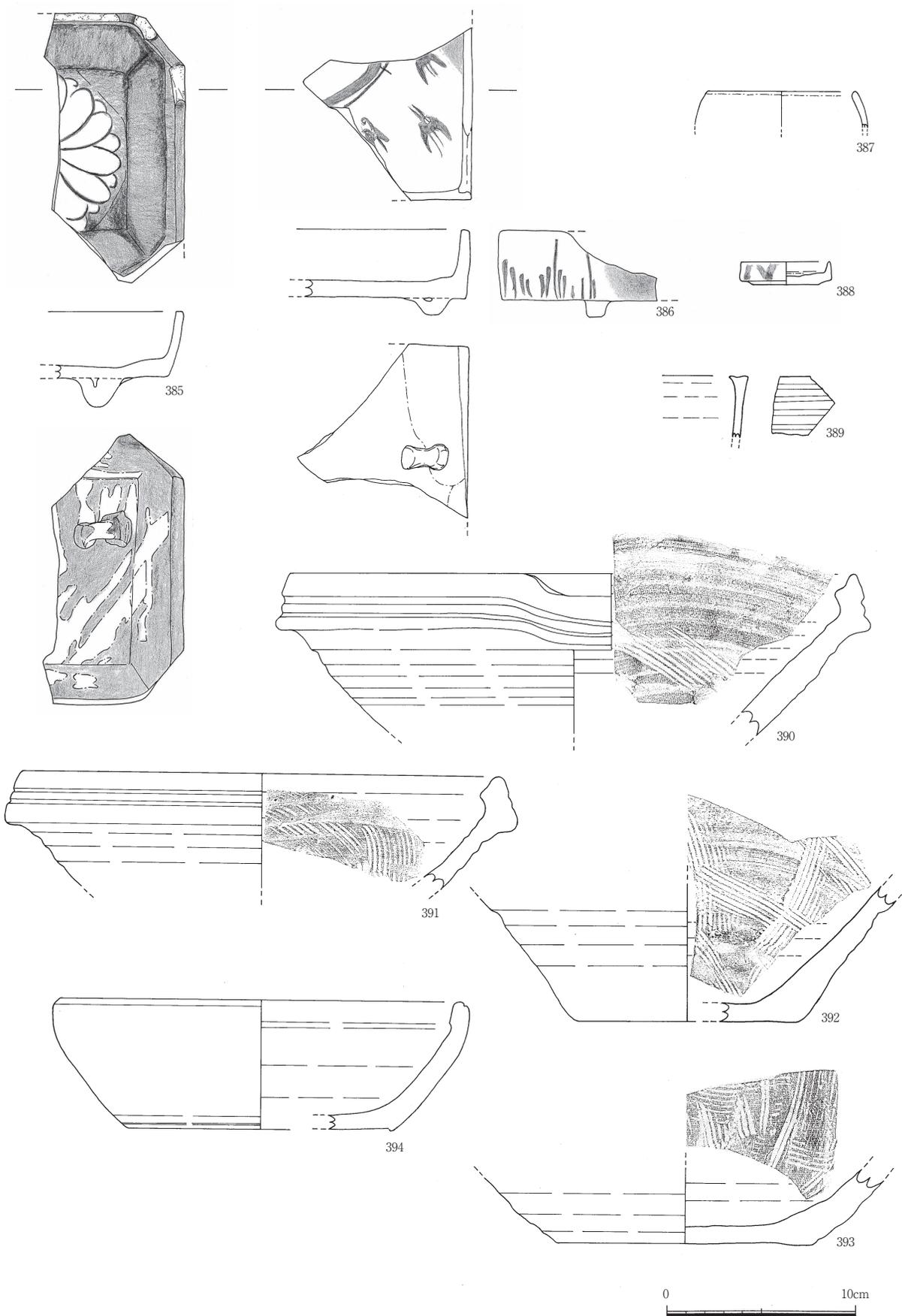


Fig.49 SK17出土遺物実測図 (3)

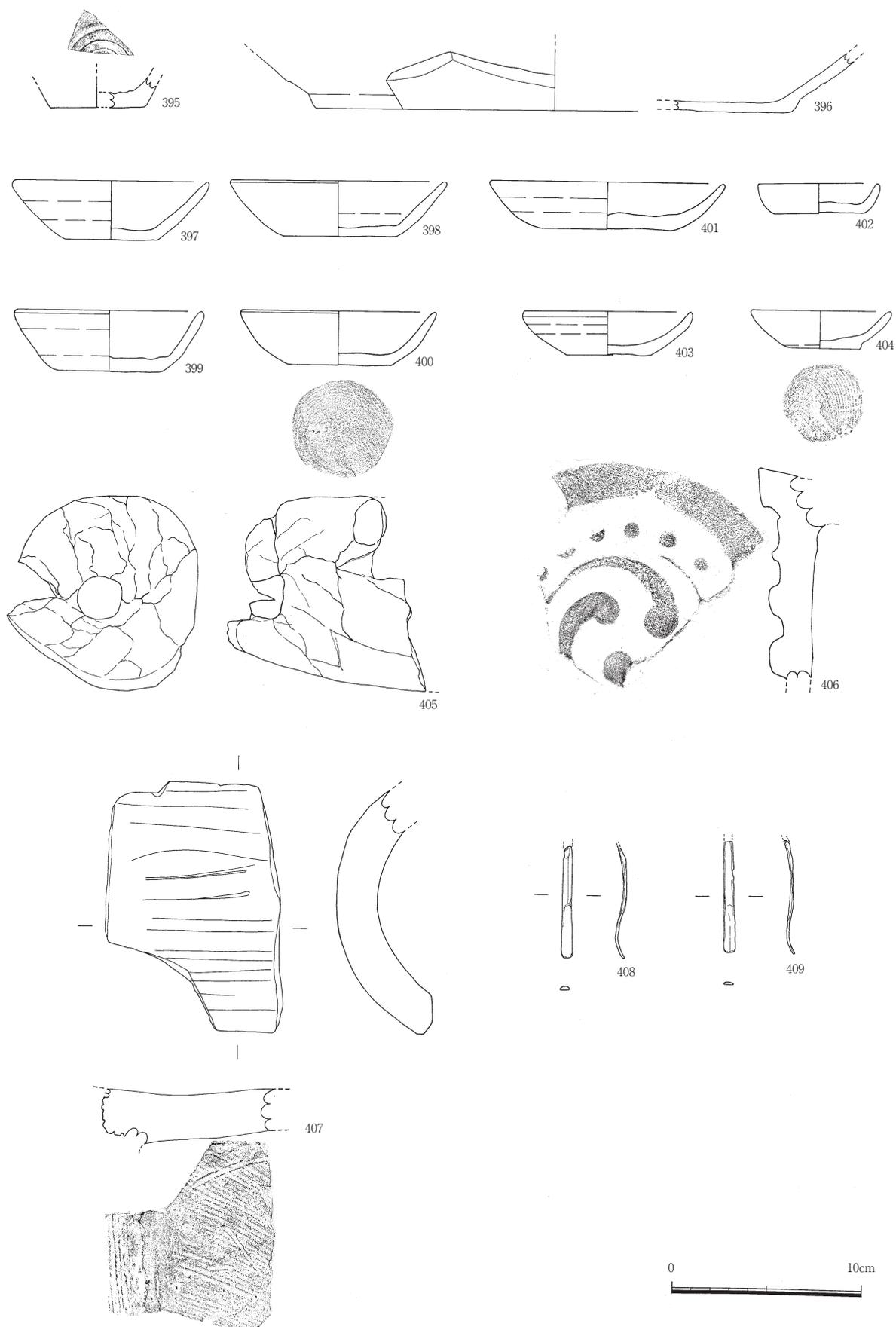


Fig.50 SK17出土遺物実測図 (4)

397～404は土師質土器。397～400は杯。397・398は口縁部に灯芯油痕を伴い、灯明皿として使用されている。401～404は小皿。402は手捏ね成形によるもので、内外面にナデを施す。

405は轆の羽口で穿孔部分は径2.5cmである。胎土はにぶい橙色を呈し、外面には自然釉が強く掛かる。406は軒丸瓦、407は丸瓦である。408・409は銅製の匙である。

SK17は17世紀前葉に比定される。

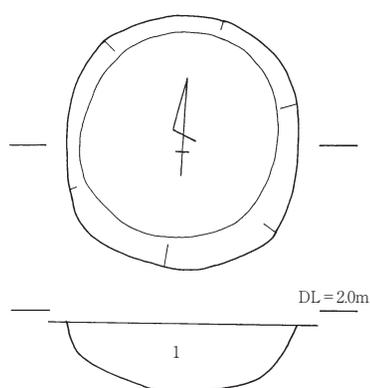
SK18 (Fig.51)

調査区南部に位置する。平面形は円形で、検出規模は長軸1.33m、短軸1.24m、深さ34cmを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトである。出土遺物は確認できていない。

SK19 (Fig.52～74)

調査区南部に位置し、南部側と北部側の一部が攪乱を受けている。平面形は不整形を呈し、検出規模は東西長5.90m、南北残存長3.70m、深さ122cmを測る。床面は中央に向かって緩やかに落ち込み、部分的にテラス状の高まりをもつ。壁は斜め上方に立ち上がる。埋土は灰黄褐色シルト、にぶい黄褐色シルト他からなり、炭化物を多く含んでいる。

出土遺物は、個体数にして磁器（中碗143・小碗32・小杯70・小皿五寸皿105・中皿5・大皿5・鉢27・猪口26・碗蓋58・瓶21・蓋物35・合子5・段重2・鬢油壺1・うがい茶碗1・紅皿95・水滴5・水滴又は人形1・仏飯器2・火入れ2・ミニチュア2・不明12）、陶器（中碗99・小碗30・小杯19・小皿32・中皿9・大皿2・鉢3・碗蓋2・挿鉢38・捏鉢6・片口8・鍋26・行平6・鍋蓋9・土瓶20・急須4・土瓶急須蓋22・爛德利4・水注1・瓶13・壺3・甕11・壺又は甕4・蓋2・蓋物7・合子1・柄杓3・水指1・香炉1・火入れ2・灰吹き3・灯明受皿32・火鉢2・水鉢2・植木鉢6・餌鉢8・鳥の水入れ1・ミニチュア2・不明11）、土器（杯1・小皿107・白土器小皿21・壺1・蓋2・鍋1・羽釜2・焙烙17・胡麻煎り5・火消壺4・焜炉16・火鉢1・竈1・火入れ1・人形4・ミニチュア1・不明1）、窯道具（ハマ6）、銅製品（煙管吸口2・煙管雁首1・匙2・簪3・不明1）、鉄製品（包丁1・釘3・不明1）、古銭（寛永通宝2）、石製品（砥石2）、ガラス製品（棒状製品3）である。



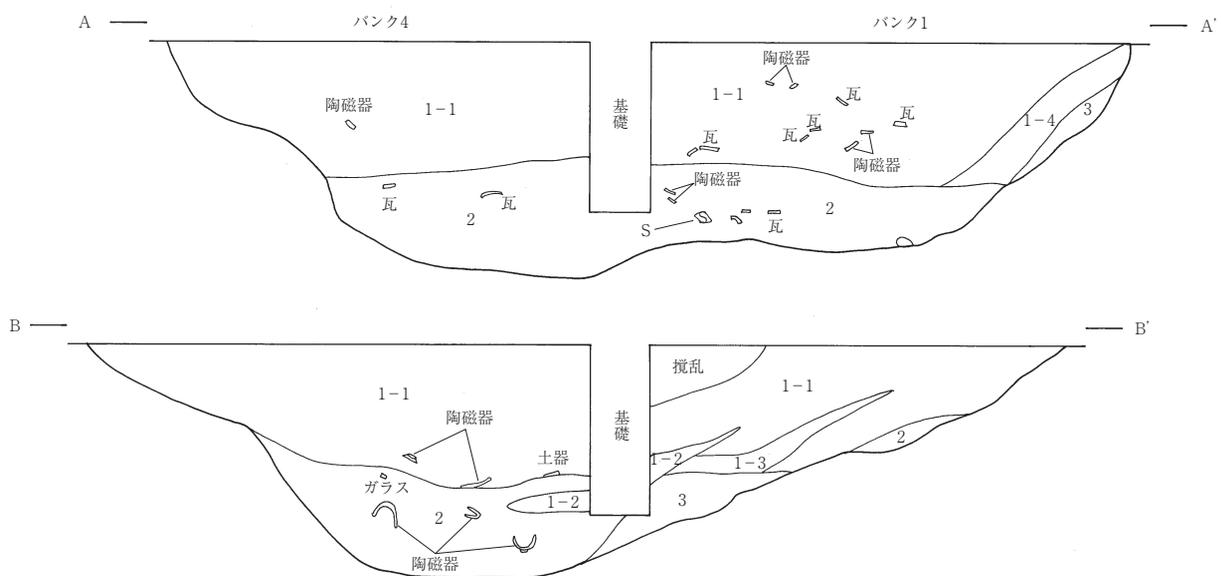
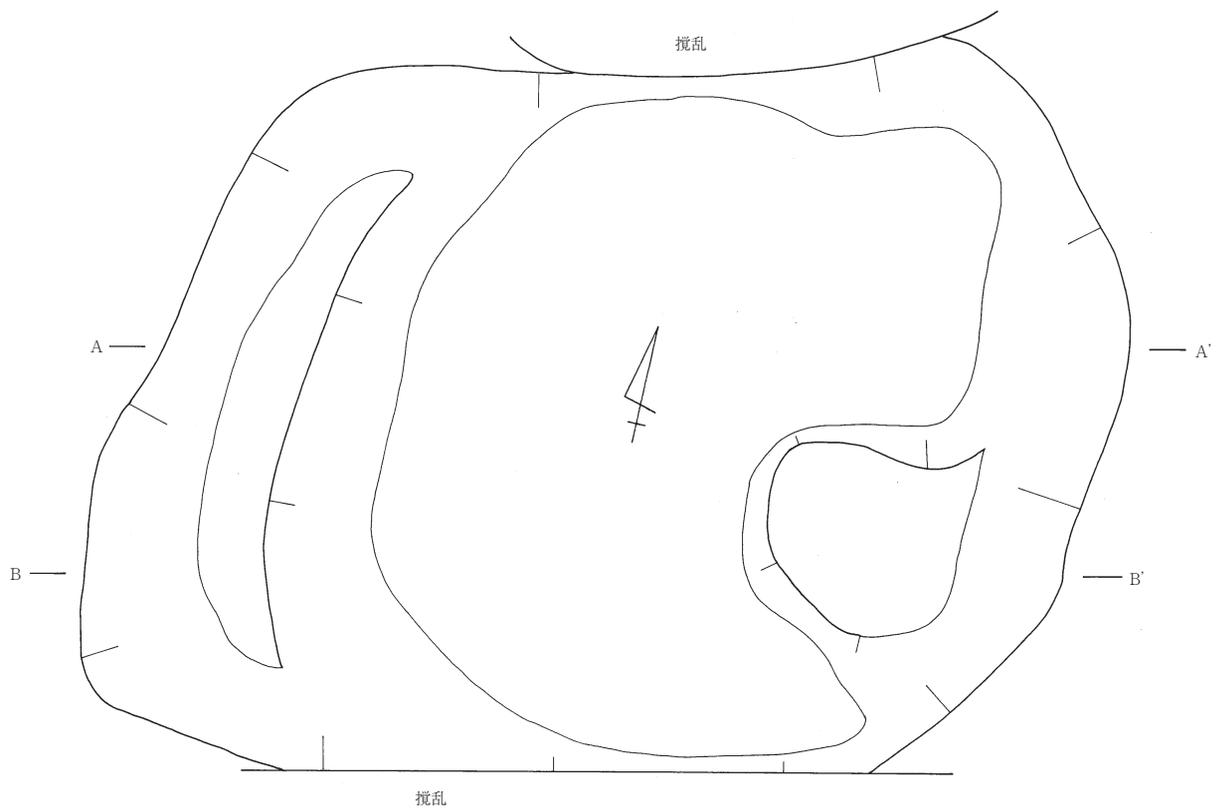
1層：10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト（0.5～2cm大の円礫を多く含む。炭化物を含む。橙色土をブロック状に含む。）

Fig.51 SK18平面図・セクション図

図示したものは、410～718である。410～506は磁器。416は能茶山窯又は肥前系、414・418・427～429・445は瀬戸・美濃産、その他は肥前産又は肥前系である。

410～420は中碗。410・411は望料碗で、撥状に開く高台をもつ。412は青磁染付の丸形碗で高台内に渦「福」を描く。413は肥前産の広東形碗。414は瀬戸・美濃産の広東形碗。415は丸形碗。

416は能茶山窯又は肥前系の広東形碗で、若松文を描く。透明釉は貫入が入る。421～430は小碗。427～429は瀬戸・美濃産の端反形小碗。430は肥前産の色絵小碗である。431～438は小



- 1-1層：10YR4/2灰黄褐色シルト（0.5～3cm大の円礫を多く含む。炭化物を含む。）
- 1-2層：10YR5/4にぶい黄褐色シルト（灰黄褐色土をブロック状に含む。炭化物を多く含む。）
- 1-3層：10YR4/2灰黄褐色シルト（橙色土をブロック状に多く含む。炭化物を多く含む。）
- 1-4層：10YR4/2灰黄褐色シルト（0.5～5cm大の円礫を多く含む。）
- 2層：10YR5/3にぶい黄褐色シルト（0.5～1cm大の円礫を含む。）
- 3層：10YR3/1黒褐色粘質シルト（0.5～3cm大の円礫を多く含む。炭化物を多く含む。）



Fig.52 SK19平面図・セクション図

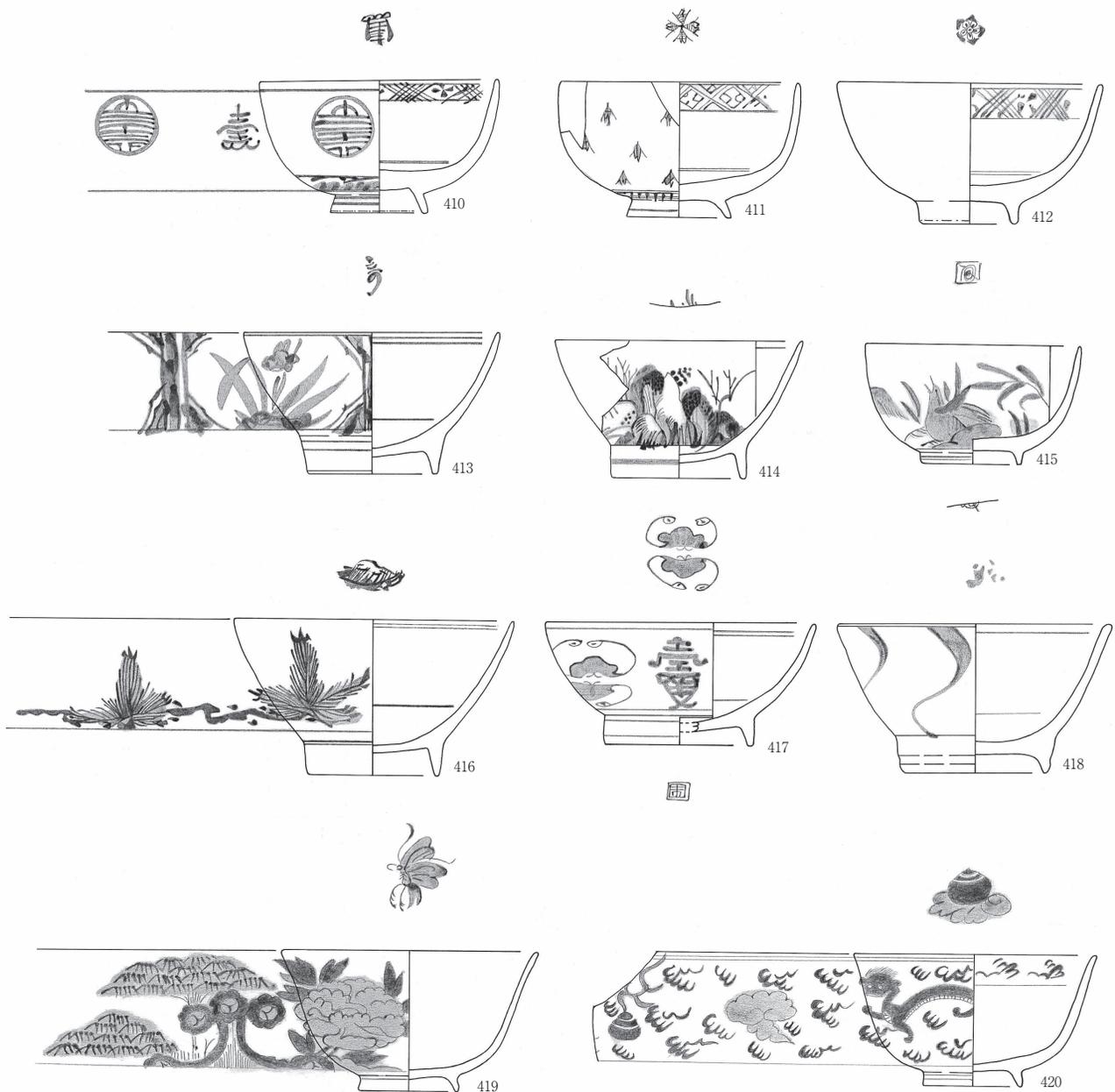


Fig.53 SK19出土遺物実測図 (1)

杯。436は色絵の丸形小杯で、赤の上絵付で海老文を描く。437・438は白磁小杯である。439～447は碗蓋。439・440は望料碗の蓋、441～444は広東形碗の蓋、445・446は端反形碗の蓋である。447は色絵碗の蓋で、赤・緑・金の上絵付で紗綾文と花卉を描いている。

448～458は皿。染付皿448・450・451は蛇の目凹形高台をもつ。453は瑠璃釉の菊花形皿で、瑠璃釉の地に白抜きの文様を配している。17世紀中葉に生産された上手の製品で伝世品とみられる。454は白磁の菊花形小皿で、蛇の目凹形高台をもつ。455は色絵染付の小皿で、呉須と赤・緑の上絵付による文様を描く。457は蛇の目凹形高台の青磁皿で、内面に菊弁と花卉の陽刻文様を施す。458は内面に墨弾きによる文様と松竹梅円形文を描く。

459は大鉢で、高台内に変形字銘をもつ。また、高台内にはハリ支え痕が残る。461は色絵の皿又

は鉢で、黒・黄・その他の上絵付で松文を描いている。462・463は猪口である。464～470は鉢である。

471～480・482は蓋物と蓋物蓋。481は色絵染付の段重で、呉須で丸内に山水文、赤・緑・金の上絵付で花卉を描く。483～486は合子の身と蓋である。487・488は髪油壺で、梅文を描く。489～491は辣蕪形の小瓶。493は型押し成形によるもので瓶類か。外面に型による花卉・檜垣・四方禳他の陰刻文様、側面に鉄釉を施す。

494～497は水滴。494は象形の白磁水滴で、型押し成形左右貼り合わせ。背と鼻先の部分に円孔を穿つ。17世紀後半の有田の製品で、上手のものである。495・496は箱形的水滴で、型による陽刻

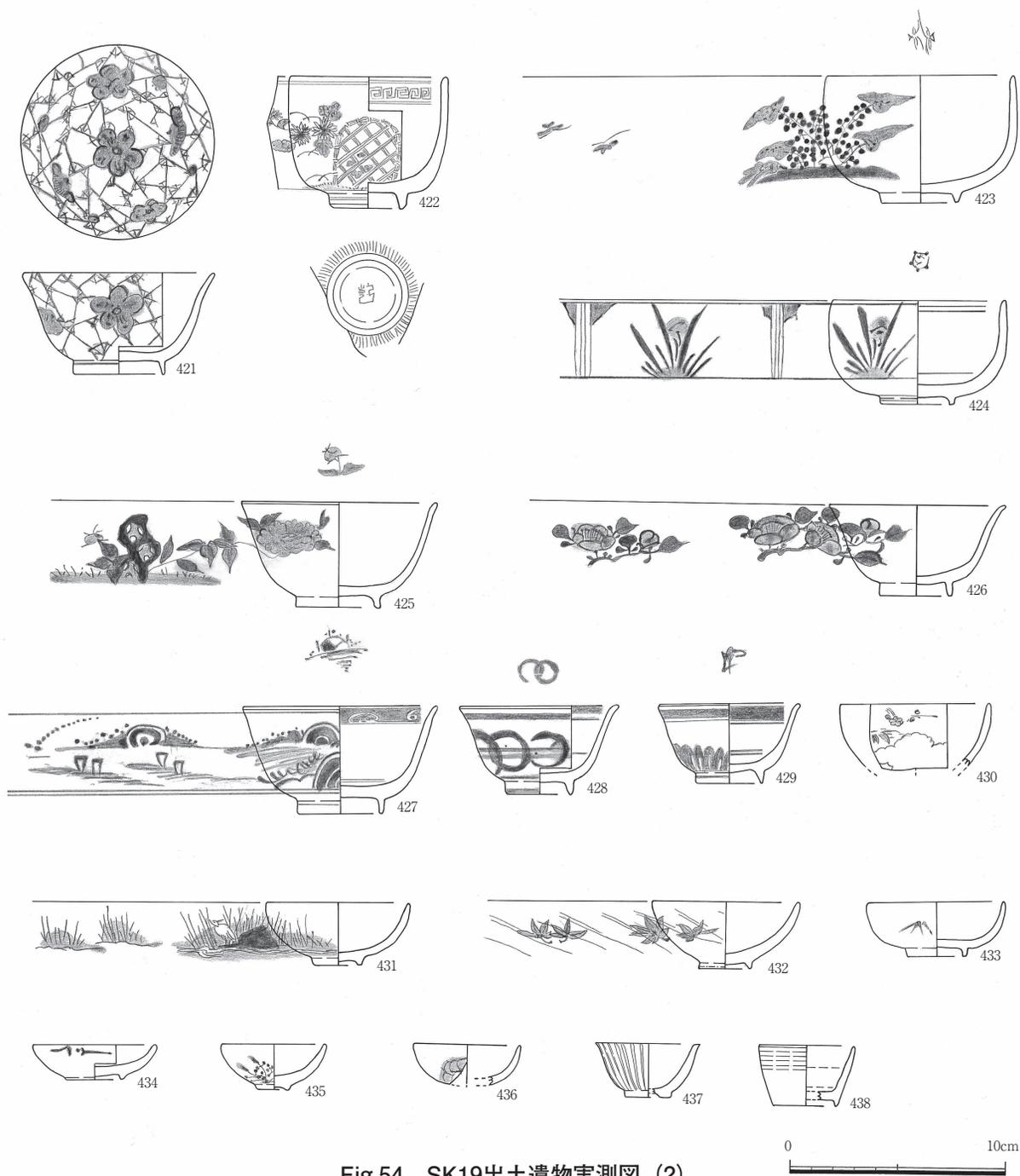


Fig.54 SK19出土遺物実測図 (2)

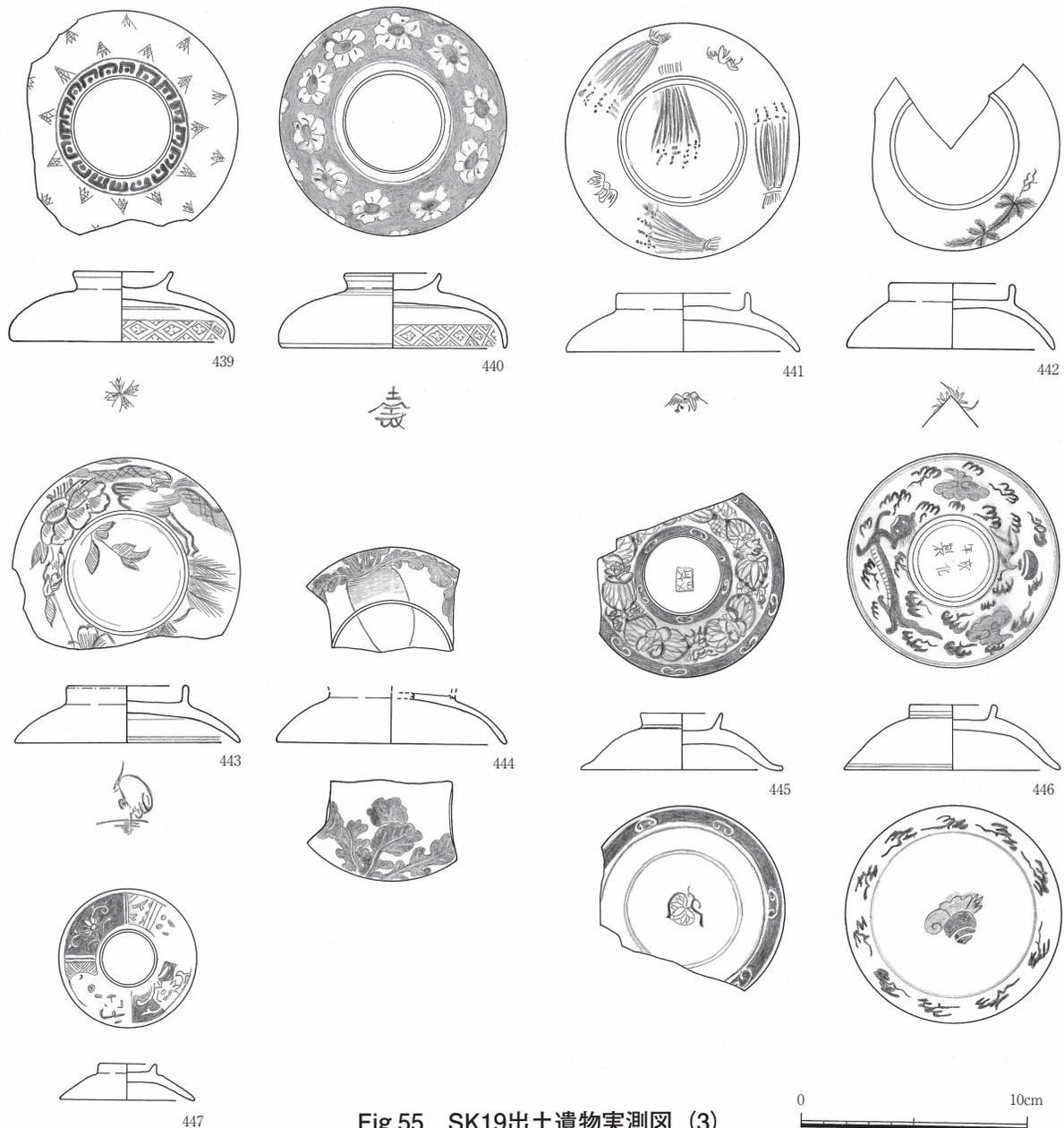


Fig.55 SK19出土遺物実測図 (3)

文様をもつ。495は上面に型押しによる陽刻文様を施し、呉須と錆釉で塗り分けている。497も水滴とみられるが、形態は不明である。上面に呉須で縞状の文様を描く。499は青磁の火入れ又は香炉。500は仏飯器である。501は白磁の水滴又は人形で、外面に籠状の陽刻文様をもつ。502は器種不明で、把手の部分か。外面に墨弾きによる檜垣文を描く。503は白磁又は染付のうがい茶碗である。504は菊花形の白磁紅皿。505・506はミニチュアの白磁紅皿である。

507～625は陶器。507～512・514～526は中碗。507～518は尾戸窯の灰釉碗。517は灰釉の広東形碗で、鉄錆と白土で梅文を描く。508は鉄錆の象嵌を施すもので、桐文は印刻による。510は鉄錆で注連縄文を描いている。511も錆絵を描くものである。519は肥前系の灰釉碗で高台施釉。520～525は京都・信楽系の灰釉碗である。520～522・524は鉄錆で注連縄文、523は笹文、525は帯線を描くものである。526は内面と外面上半に灰オリーブ色の灰釉を施し、外面下半は無釉で飛鉋を施す。

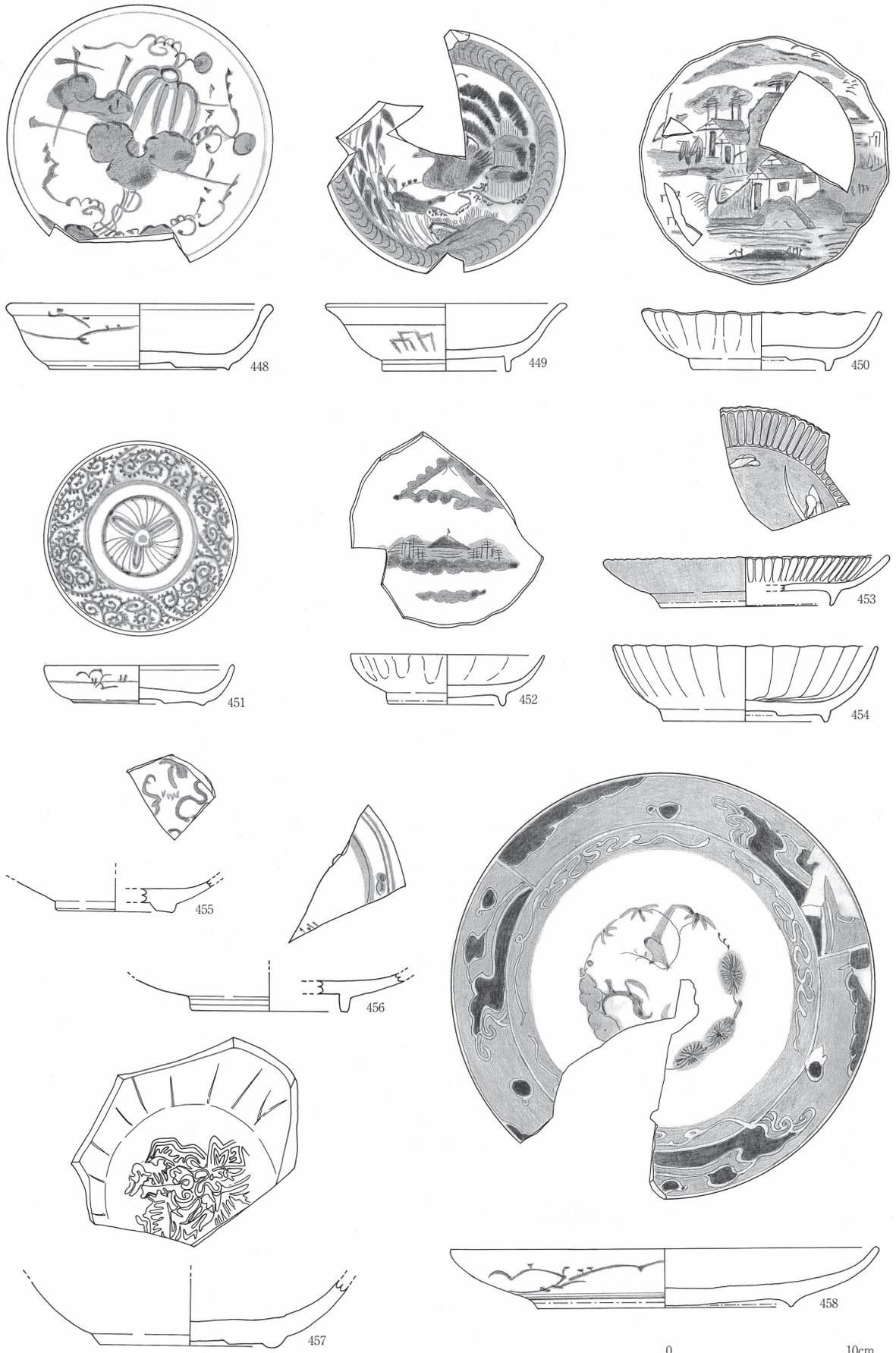


Fig.56 SK19出土遺物実測図 (4)

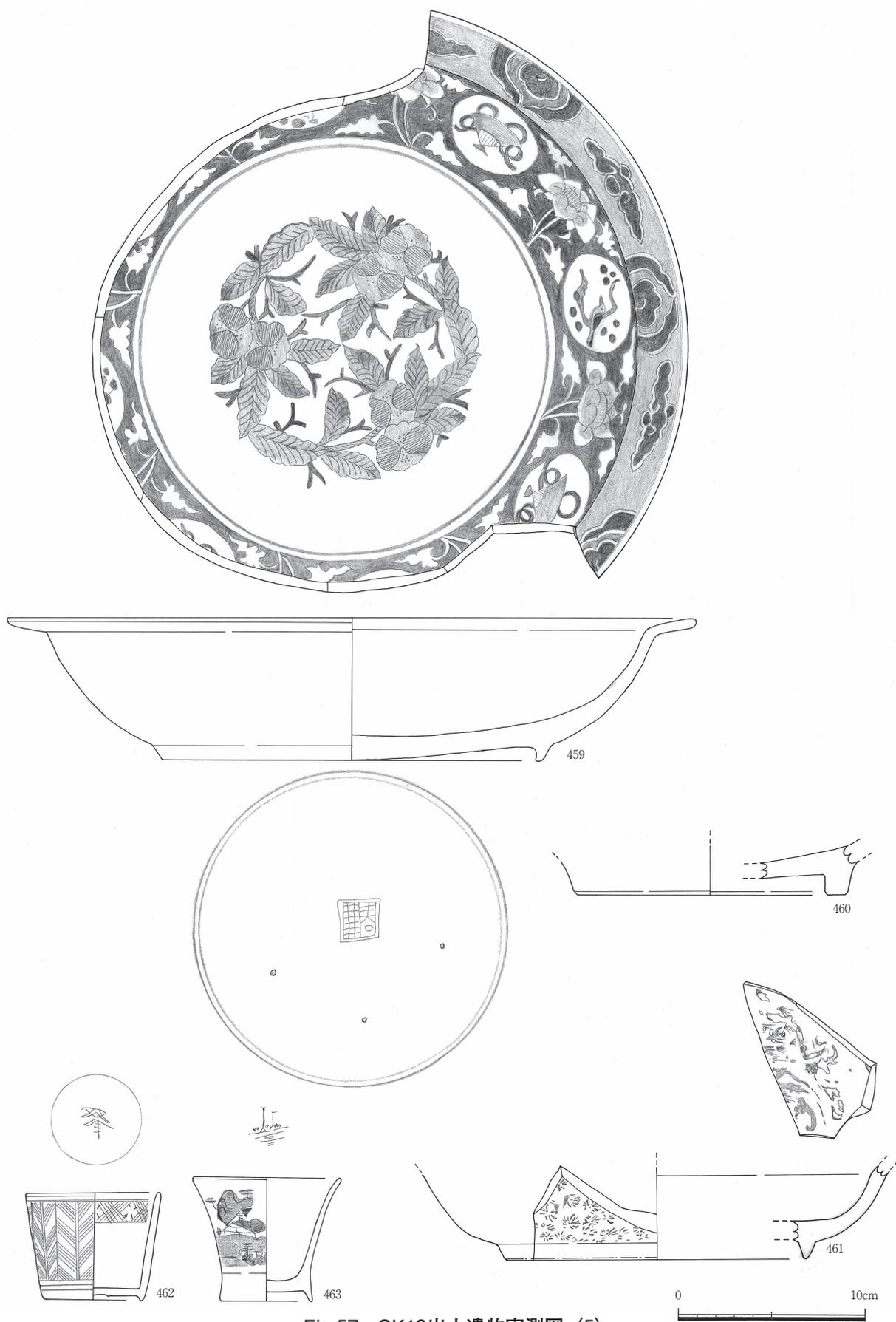


Fig.57 SK19出土遺物実測図 (5)

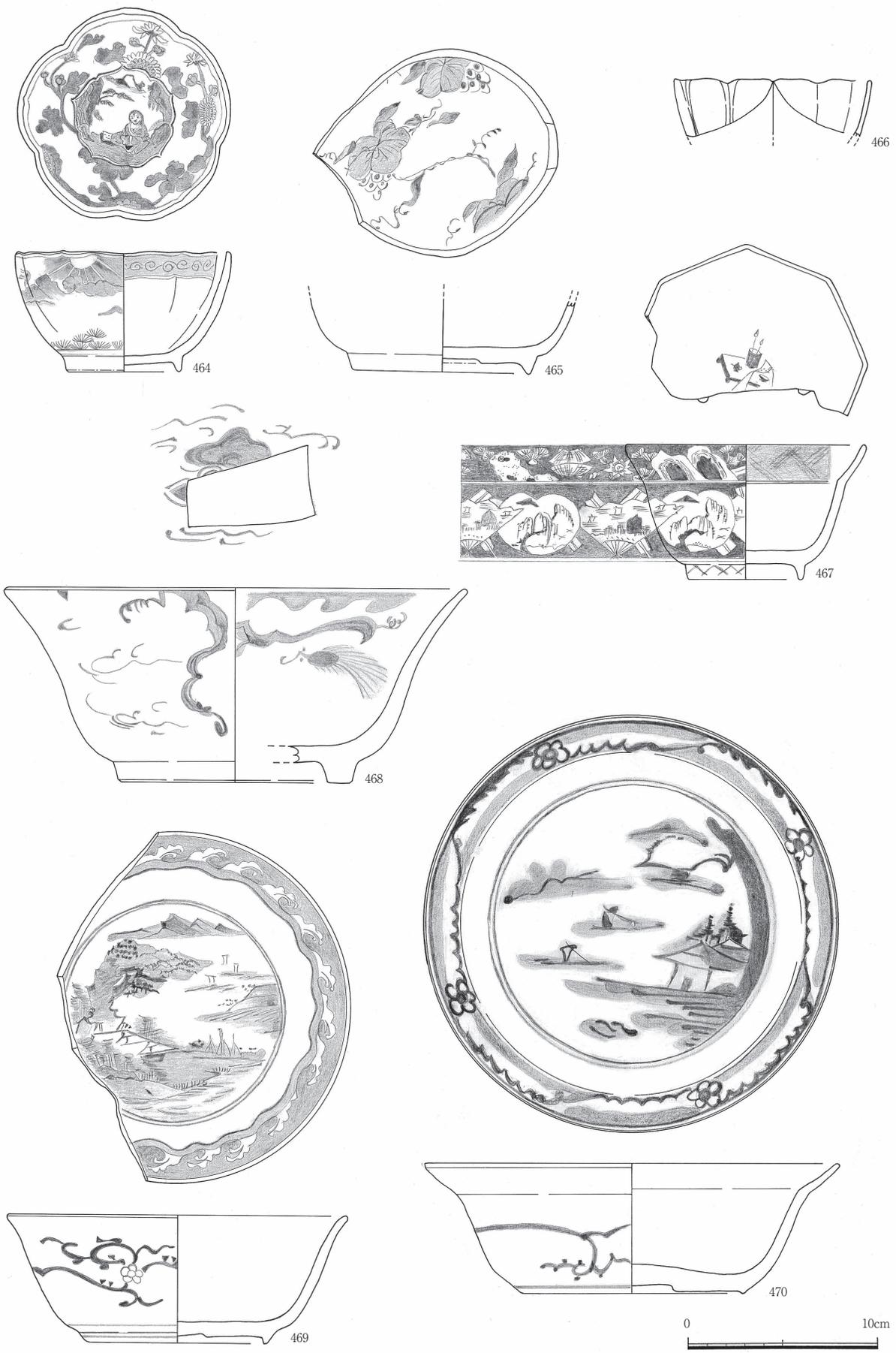


Fig.58 SK19出土遺物実測図 (6)

527は京都系の色絵碗で赤の上絵付を施している。

528～534は小碗。528は京都系の色絵半球形碗で、赤・薄緑・その他の上絵付で笹文と花文を描く。529は京都系の灰釉半球形碗。530は京都系の小杉碗である。531は京都系の端反形小碗で、鉄錆と呉須で草文を描くものである。532は信楽産の端反形小碗で、口縁部に緑釉を流し掛けする。533は鉄錆で海老文を描くもので、白土を外面の双方と内面全体に施し、灰オリーブ色の釉を重ねている。534は灰釉端反形小碗で、白土イッチン描きで花文を施すものである。535～537は灰釉の丸形小杯。538は肥前産の碗蓋で、白化粧土刷毛目と白土による花文を施している。539は瀬戸・美濃産の碗蓋で、鉄錆で松葉文を描き、緑釉を掛け分けている。

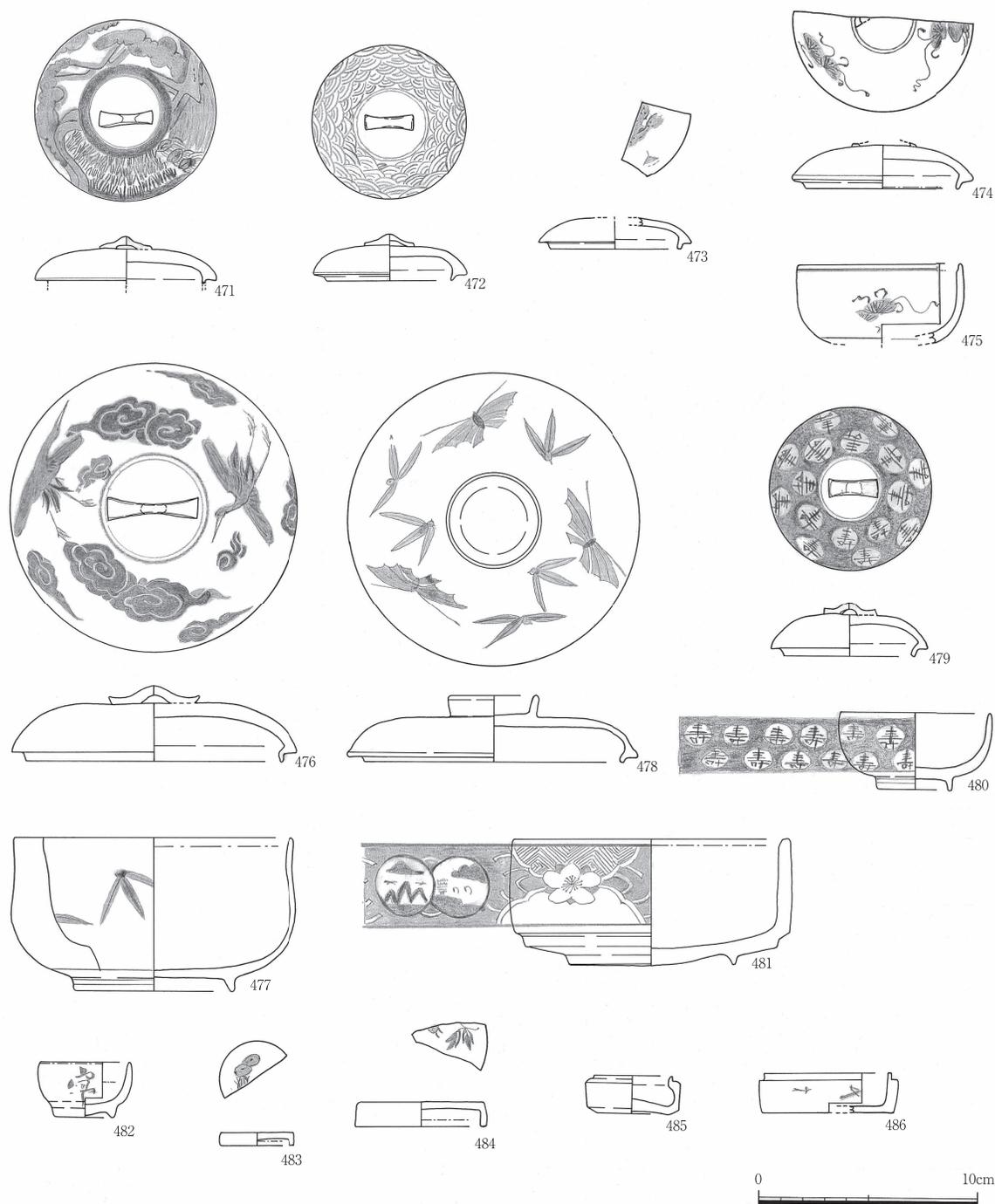


Fig.59 SK19出土遺物実測図 (7)

540～546は皿。540は尾戸窯の灰釉手塩皿で、型で花形に作り出している。541は瀬戸・美濃産の極小皿である。542～544は鉄釉小皿。542は灰白色の胎土をもち尾戸窯産の可能性をもつ。544は能茶山窯の蛇の目釉剥ぎ小皿である。545は灰釉中皿で、内面に鉄錆で文字を描く。546は瀬戸・美濃産の馬の目皿である。

547～551は鉢。547は尾戸窯の灰釉鉢で、口縁部の6箇所を内側に折り込み輪花形に形作っている。口縁部には暗オリーブ色の釉を掛け分けている。548は軟質施釉陶器。二次被熱により釉は変質している。549は菊花形の鉢とみられ、外面に錆絵を描く。碁笥底で底部脇には布目痕が残る。551は尾戸窯の灰釉端反形鉢で、内面に鉄錆で山水文を描いている。

552～554は片口。552は肥前産で、内外面に白化粧土刷毛目を施す。554は尾戸窯産の灰釉片口である。555は瀬戸・美濃産の灰釉捏鉢である。556～559は播鉢。556・557は堺・明石系の播鉢。558・559は備前焼播鉢で、559は高台を貼付する。

560～564は鍋。560～562は尾戸窯又は能茶山窯産の鉄釉鍋。563は能茶山窯産の行平か。外面に錆釉を刷毛塗りの後、飛鉋を施す。566は鍋の蓋で、563と同一個体とみられる。565は後手形の水注又は急須。焼締めで把手部分は欠損する。568・569・571～575は土瓶、567・570は急須である。567は灰釉の急須で、白土と緑釉で草花文を描く。568は丸形の灰釉土瓶で、鉄錆と白土で梅花文を描くものである。569は丸形の鉄釉土瓶。注口部が僅かに湾曲し、三足を持たない。体部両側の白抜き部分に灰釉を施す。570は灰釉の急須で、輪花形の口縁部をもつ。571は鉄釉土瓶で、丸彫りによる文様を施す。572～575は灰釉土瓶である。576は雲助形の水注又は土瓶。薄手で、白土イッチン描きと呉須・緑釉で花文を描いている。577～584は土瓶と急須の蓋である。

585は肩衝形の茶入。外底回転糸切りで、黒色の釉を施す。586は瀬戸・美濃産の胴丸形の灰釉壺。587は灰釉の大瓶で、尾戸窯産か。鉄錆で鳥と草を描く。588は丹波産の甕である。589は尾戸窯又は能茶山窯の鉄釉瓶。590は瀬戸・美濃産の灰釉徳利。591は鉄釉瓶。592～594は灰釉の爛徳利である。595は鉄釉の水注。596は鉄釉の小瓶底部で外底回転糸切り。鉄釉はにぶい赤褐色に発色する。

597・598は蓋。599・600は合子である。599は京焼の合子蓋で、薄緑の上絵具による文様を上面に施している。601・602は灰釉蓋物。603・604は京都系の灰釉柄杓で、内面中位に鉄錆による圏線を巡らす。605は備前焼の焼締めの水指。体部中位の一箇所を押圧し変形させ、ヘラ彫りを施す。606は茄子形の鉄釉陶器で、尾戸窯産か。607は太鼓を形作ったもので、体部の前方に窓をもつ。尾戸窯産か。608は船形の水滴。上面に陽刻の宝文を配し、鉄釉と緑釉で彩色する。609～611は京都系の灰釉灯明皿。612は灰吹きで、白化粧土施釉の後灰釉を施し口縁部に緑釉を流し掛けする。外底に墨書を認める。613は軟質施釉陶器の火入れ。胎土は軟質で、橙色の低下度釉を施す。615は瀬戸・美濃産の水鉢。616・617は備前焼の鉢で、底部に穿孔を穿ち植木鉢に転用している。618は火鉢又は水鉢で、オリーブ黒色の釉を施している。620は尾戸窯の鳥の水入れ。621・622は餌猪口である。623・624はミニチュアの鍋とみられる。625は窯道具で、尾戸窯跡に関連するものか。

626～698は土器。626～639は尾戸窯の白土器小皿で、626～629は陽刻による寿字文、630～632・634～636は高砂文、633・637・638は松竹梅鶴亀文をもつ。ともに胎土は灰白色を呈する。640・641も尾戸窯産とみられるが無文で、胎土はにぶい黄橙色である。642～644・646～660は土

師質土器小皿で、642～644は口径10～11cm前後のもの、646～660は口径6～7cm前後の小型のものである。このうち、649～655は完形の土器小皿が7枚重ね、656～659は4枚重ねで出土したものである。また、660は底部中央に円孔を穿つ。645は土師質土器杯である。

661～664は胡麻煎り。665は羽釜、666は鍋で、ともに灰白色の胎土をもつ。667～671・674は関西産又は関西系の焙烙。672は讃岐岡本系の焙烙、673は土佐在地系の焙烙である。675は竈である。676～683は焜炉。676は京都系の筒型焜炉で、灰白色の胎土をもつ。体部前方に楕円形の窓をもち、窓の上面に文字を印刻する。677は筒型焜炉の内部施設とみられ、前方に窓をもつ。胎土は灰白色を呈する。679も白色系の焜炉で、五角形又は六角形の体部をもつ。前方に窓をもち、窓の上面に文字を印刻する。680も白色系の焜炉で外面に文字を印刻する。681は施釉土器の焜炉で、竹形に形作り緑色の低下度釉を施す。682も施釉土器の焜炉であるが、焼成不良で釉は白濁する。683は筒形の焜炉で、内部施設をもたない。678は丸形の焜炉で、口縁部内面に手捏ねによる突起を貼付する。684は瓦質土器の火鉢。685～687は火消壺、688は火消壺の蓋である。

689は器種不明の施釉土器。外面に型押しによる稲穂の陽刻文様を施し、薄緑色の低下度釉を部分的に施す。690は土師質土器の蓋。691は施釉土器の蓋で、緑色の低下度釉を施す。

692～695は人形。692はきつねか。型押し成形左右貼り合わせで、中実。外底に円孔を穿つ。胎土は浅黄橙色を呈する。693は亀。型押し成形で中空。胎土は灰白色である。694は笠で、人物の一部か。型押し成形で中実。胎土は灰白色である。695は猫か。型押し成形で中空。胎土はにぶい橙色を呈する。696・697は飯事道具。696はミニチュアの土瓶で灰白色の胎土をもつ。697は焜炉である。698は箱庭道具で、ミニチュアの灯籠。型押し成形貼り合わせで、中実。外底に灰白色の胎土をもち、透明と薄緑の釉を施す。

699～704は瓦。699・700は巴文軒丸瓦。701は軒平瓦。「とく」銘印をもち、徳王子産（高知県香南市徳王子）とみられる。702～704は平瓦。702は「御瓦師」、703は「アキ□」銘印をもち、ともに安芸産（高知県安芸市）とみられる。704は「王子」銘印をもち、徳王子産（高知県香南市徳王子）である。

705～712は銅製品。705・706はお玉。705は木製の柄が残存しており、鉄釘で固定している。707は煙管の吸口である。708は用途不明の銅製品である。緩やかに湾曲しており、断面は楕円形を呈する。709は錠か。木製品の一部が残存しており、取り付けられている。710～712は簪である。

713～715は棒状製品で、簪か。713はガラス製の棒状製品。外面が螺子状に加工されており、無色透明である。714は象牙製で、先端部が尖る。715は鼈甲の棒状製品で、断面は長方形である。716～717は石製品。716は粘板岩製の硯を砥石に転用している。717は砥石で、使用によって中央部が窪む。718は寛永通宝である。

SK19は19世紀前葉に比定される。

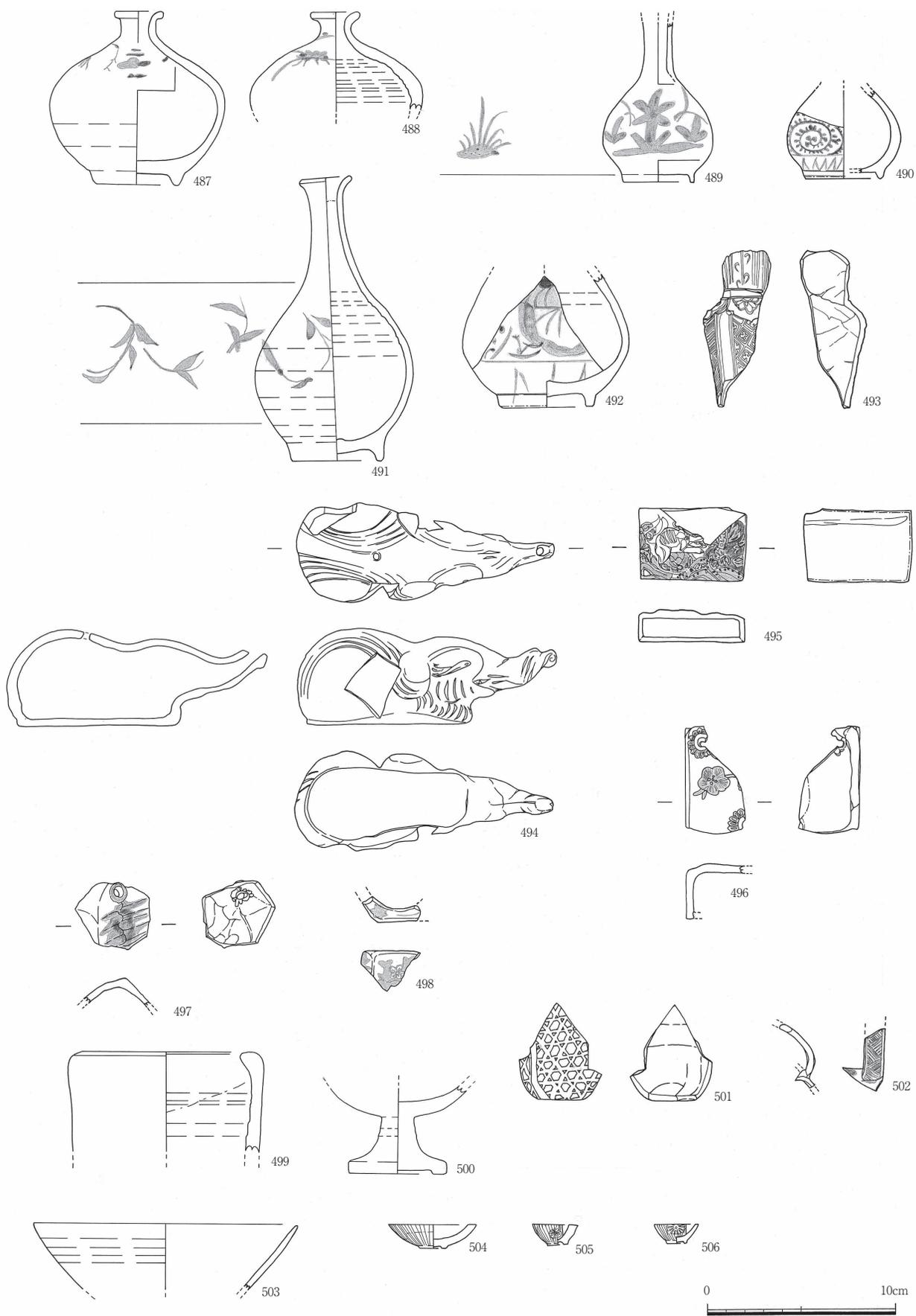


Fig.60 SK19出土遺物実測図 (8)

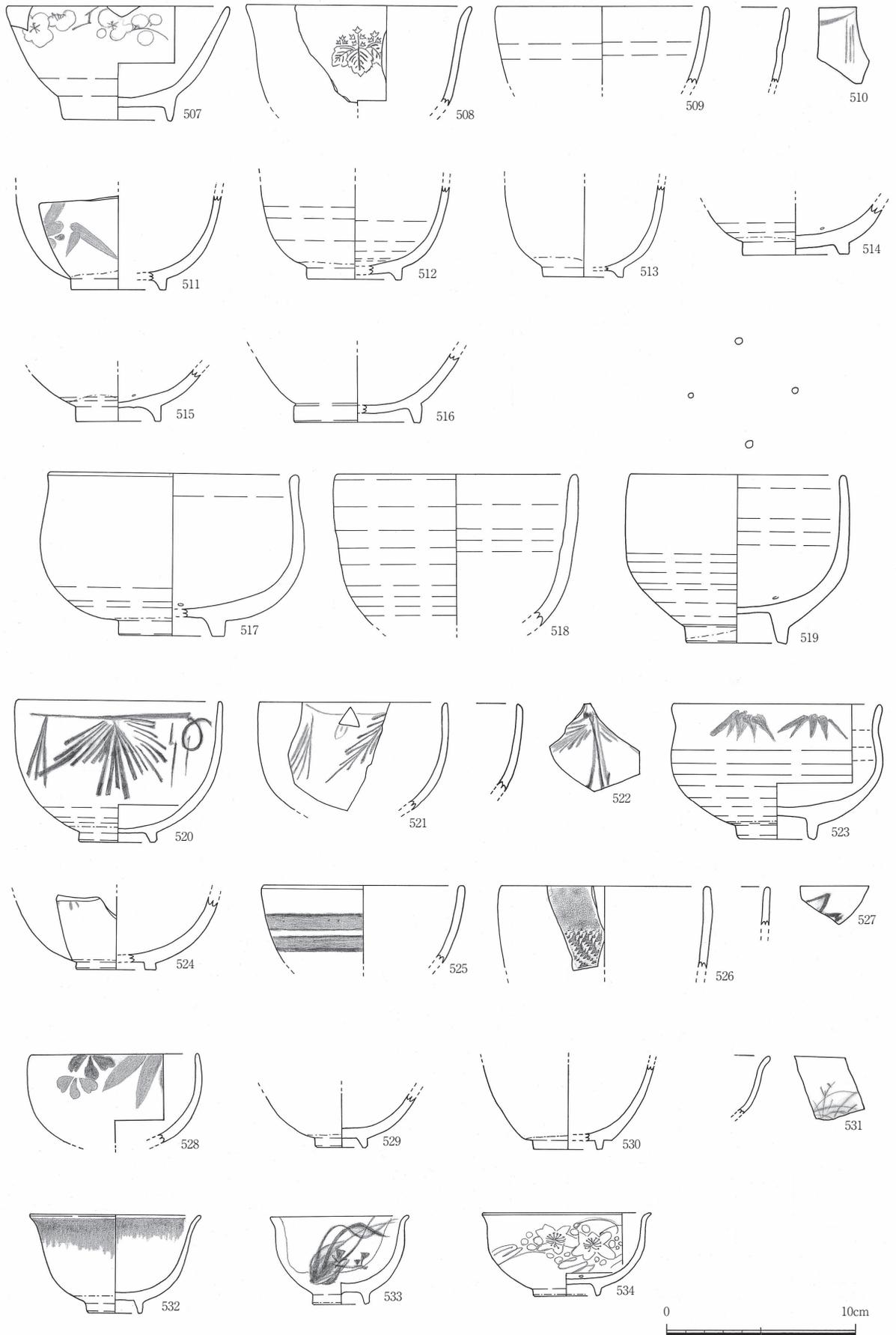


Fig.61 SK19出土遺物実測図 (9)

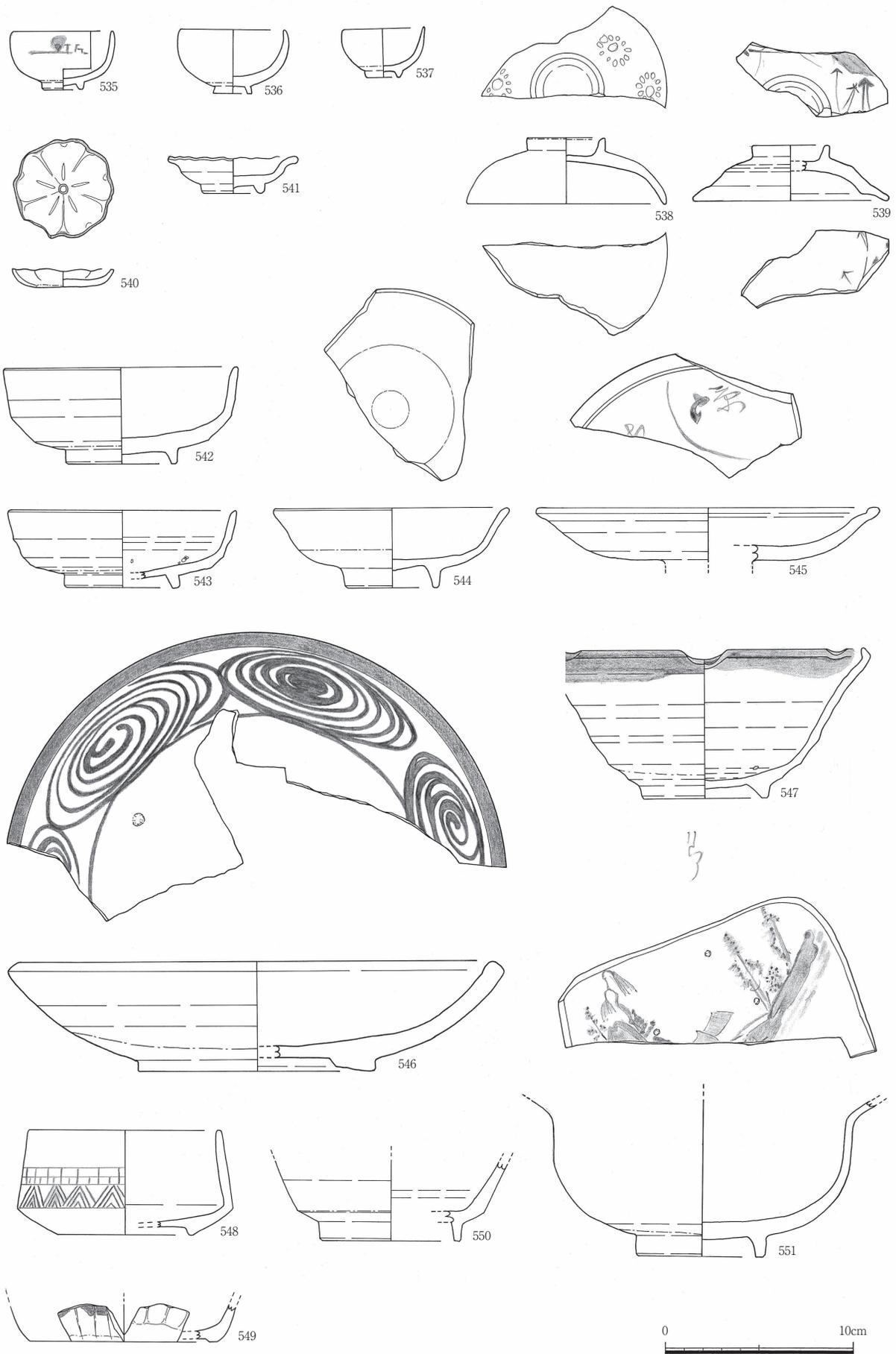


Fig.62 SK19出土遺物実測図 (10)

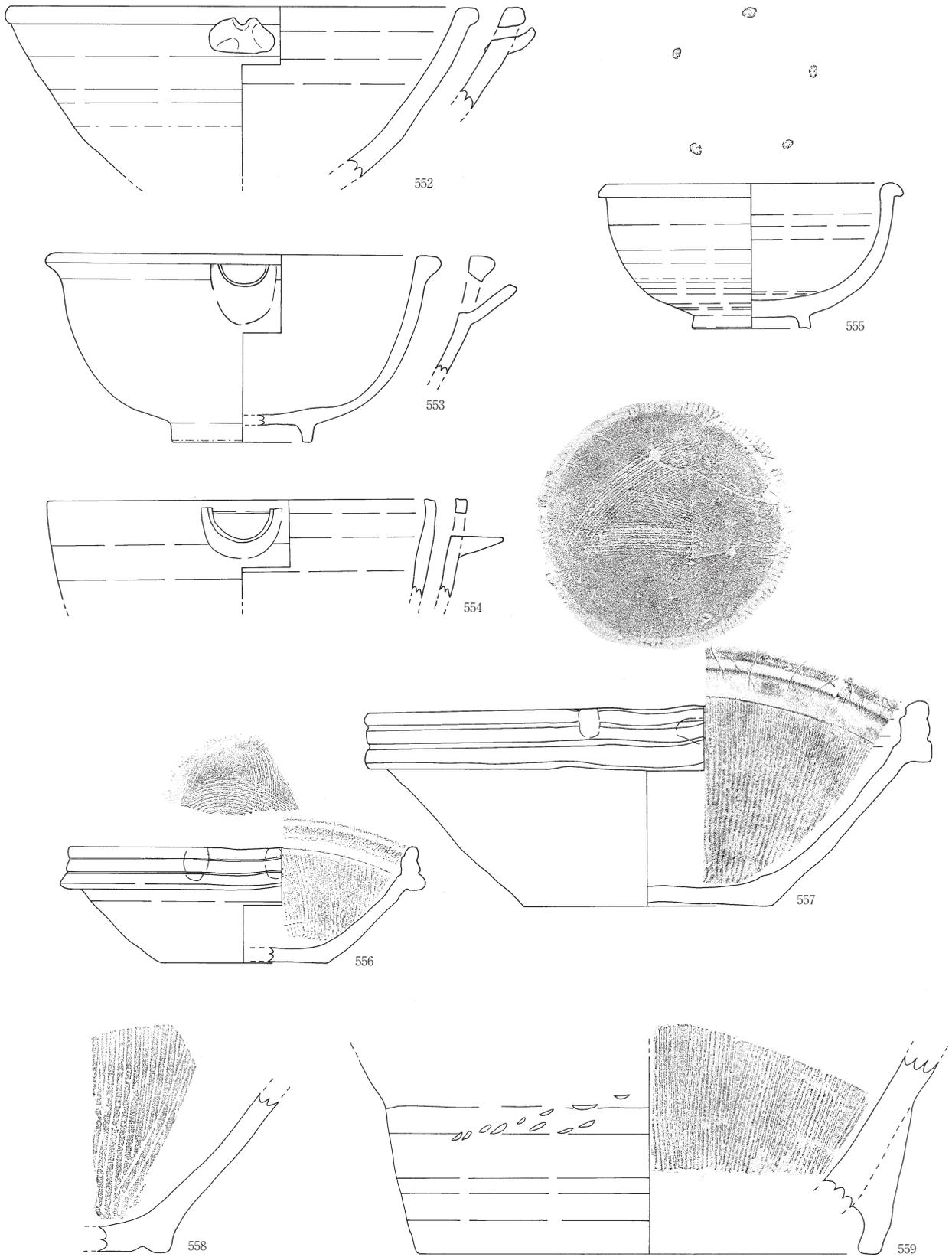


Fig.63 SK19出土遺物実測図 (11)

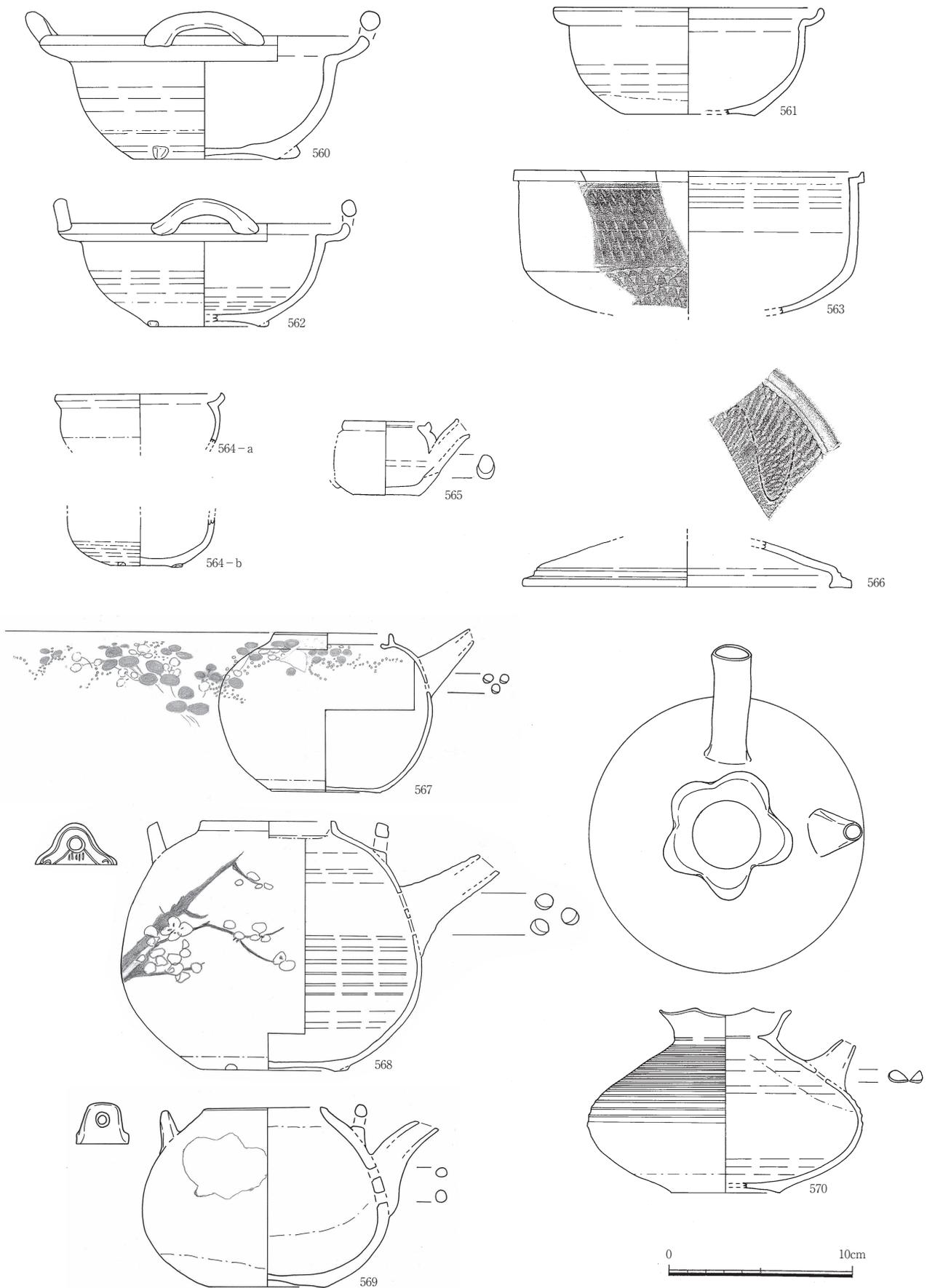


Fig.64 SK19出土遺物実測図 (12)

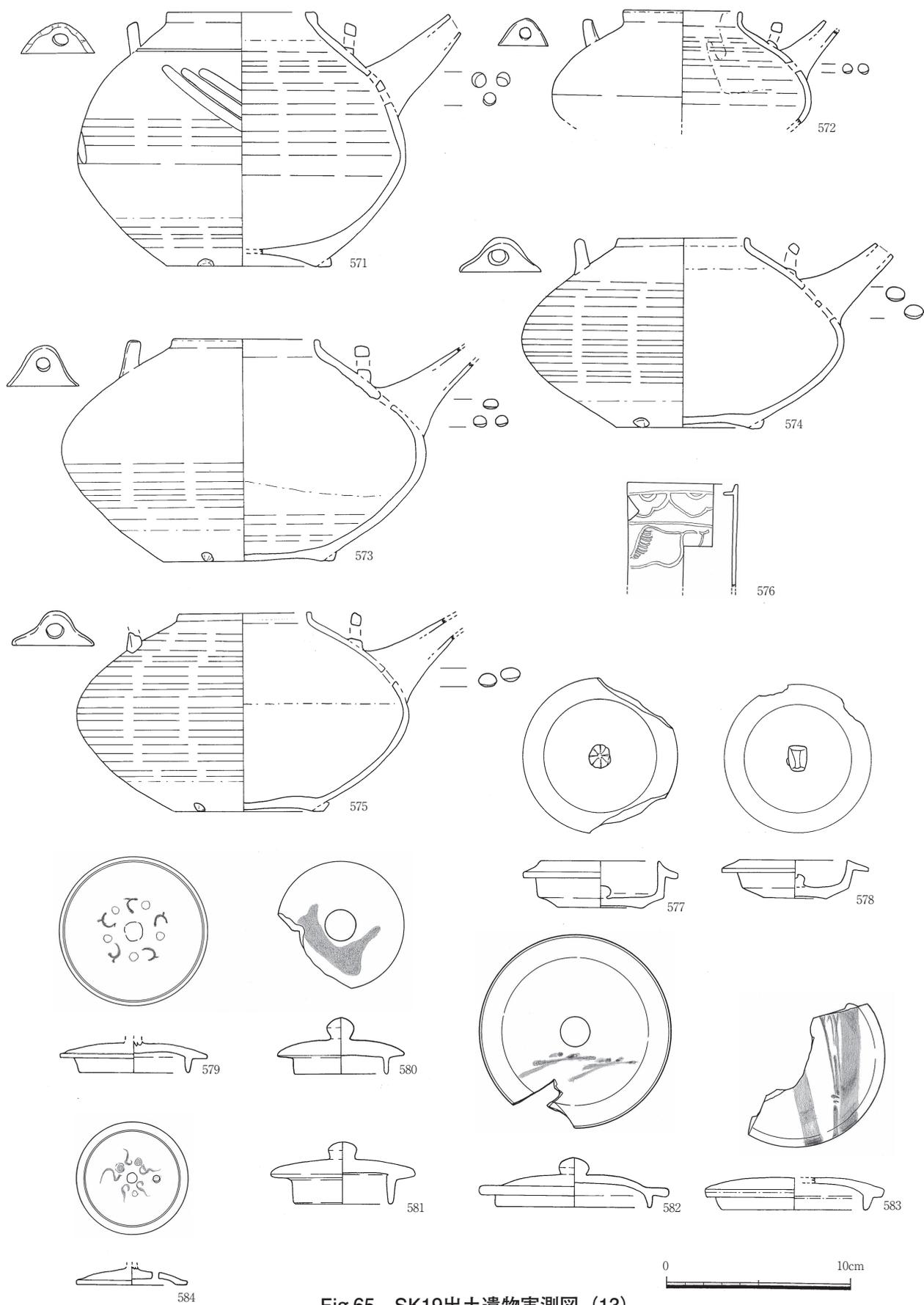


Fig.65 SK19出土遺物実測図 (13)

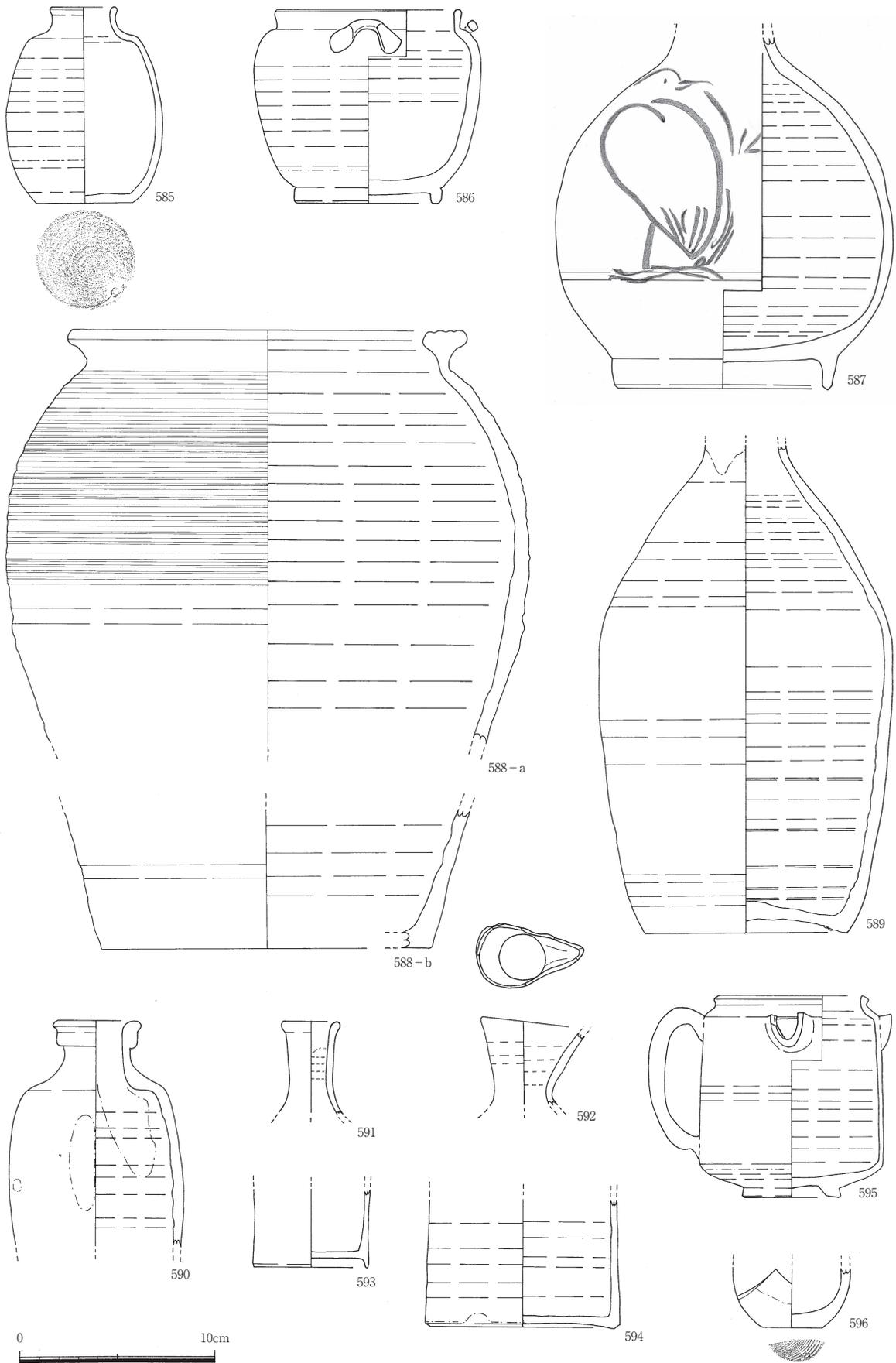


Fig.66 SK19出土遺物実測図 (14)

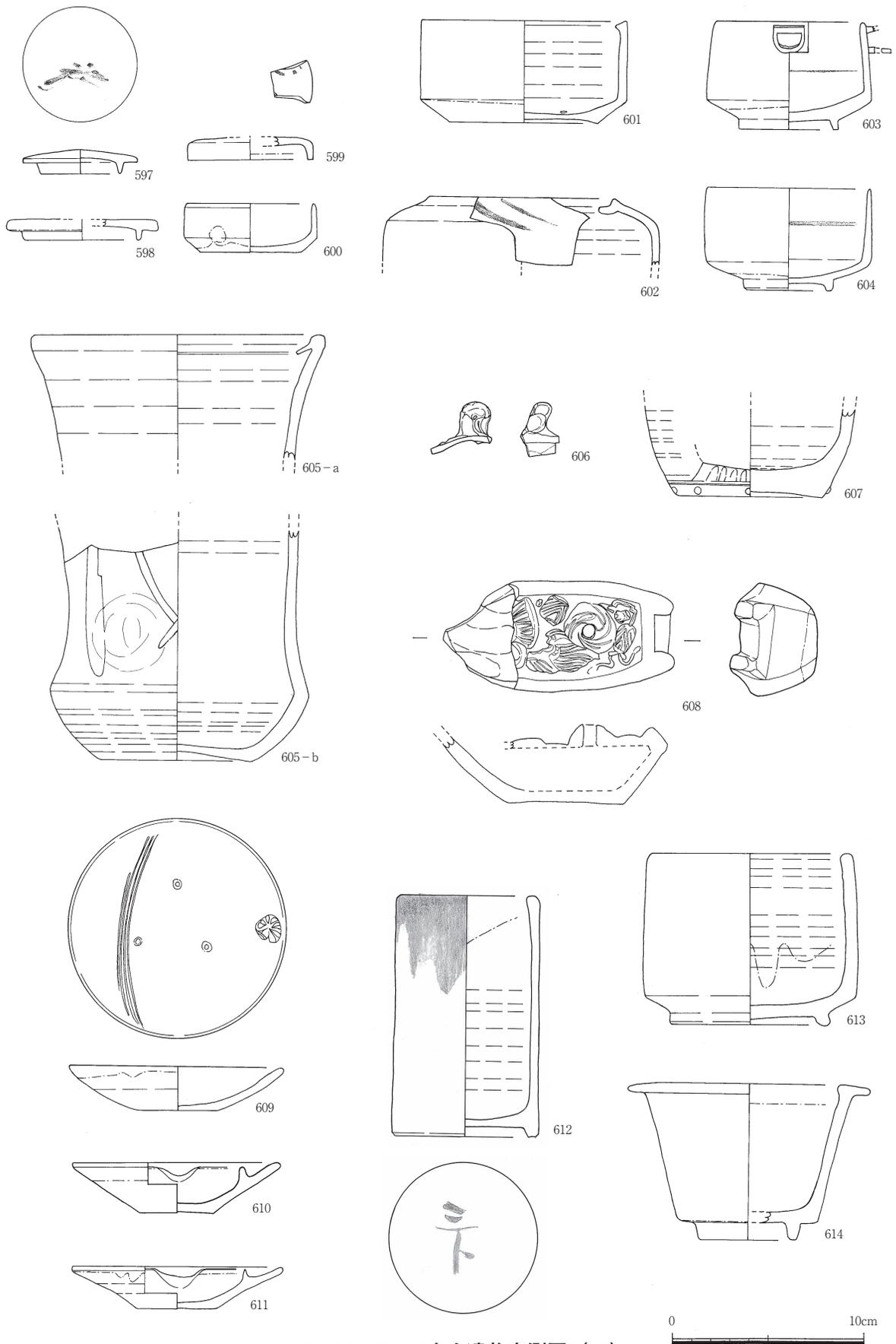


Fig.67 SK19出土遺物実測図 (15)

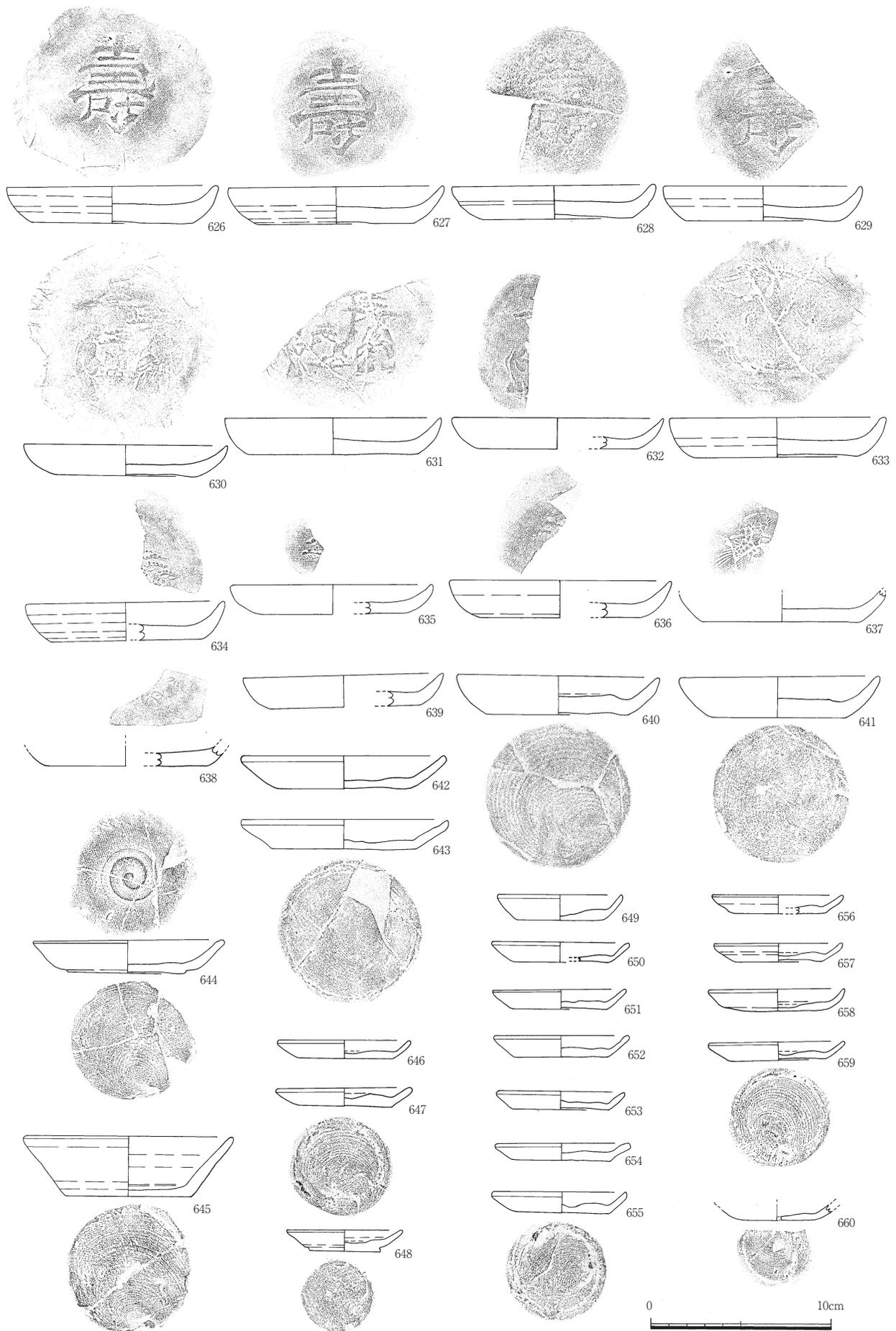


Fig.69 SK19出土遺物実測図 (17)

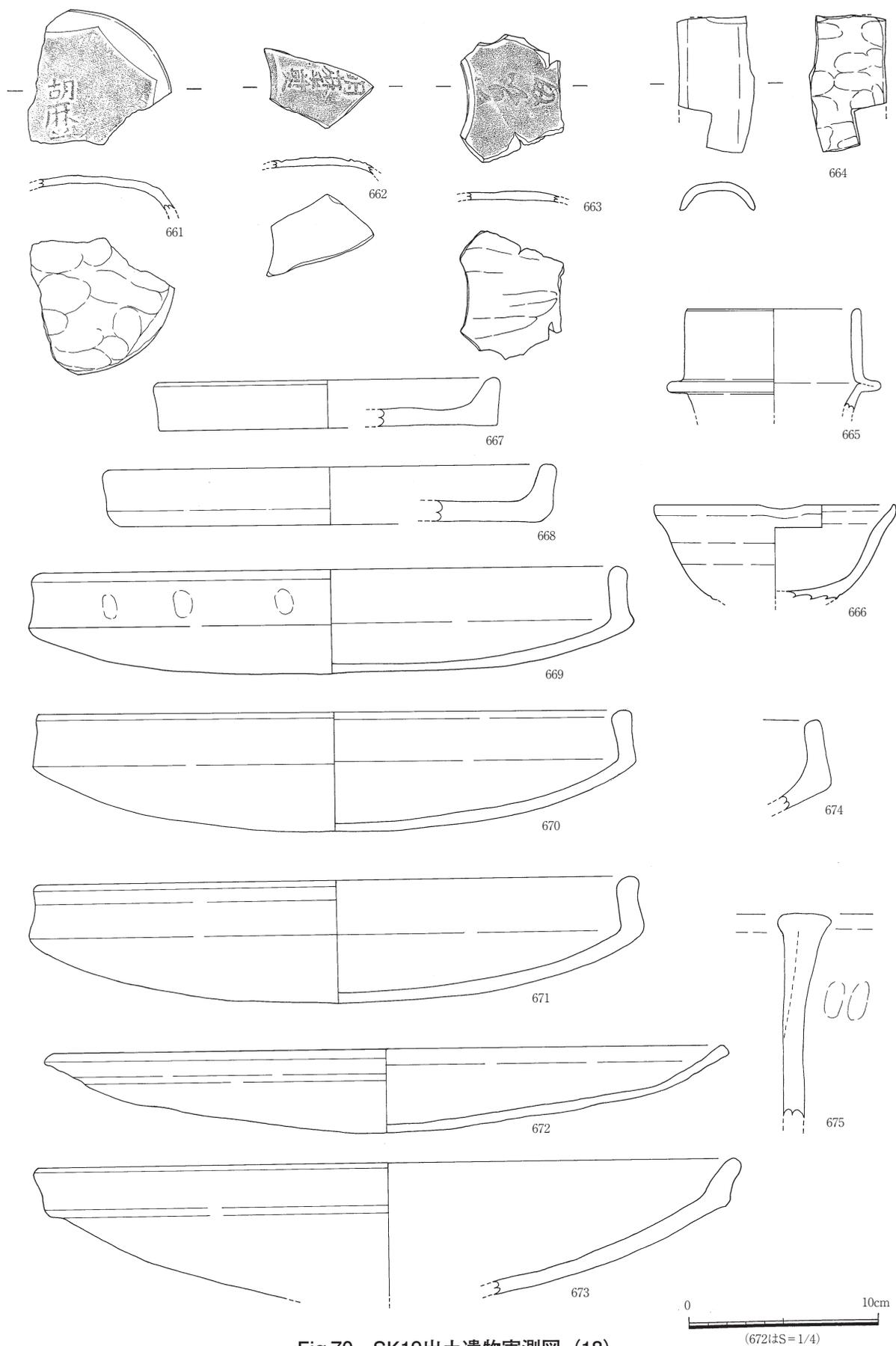


Fig.70 SK19出土遺物実測図 (18)

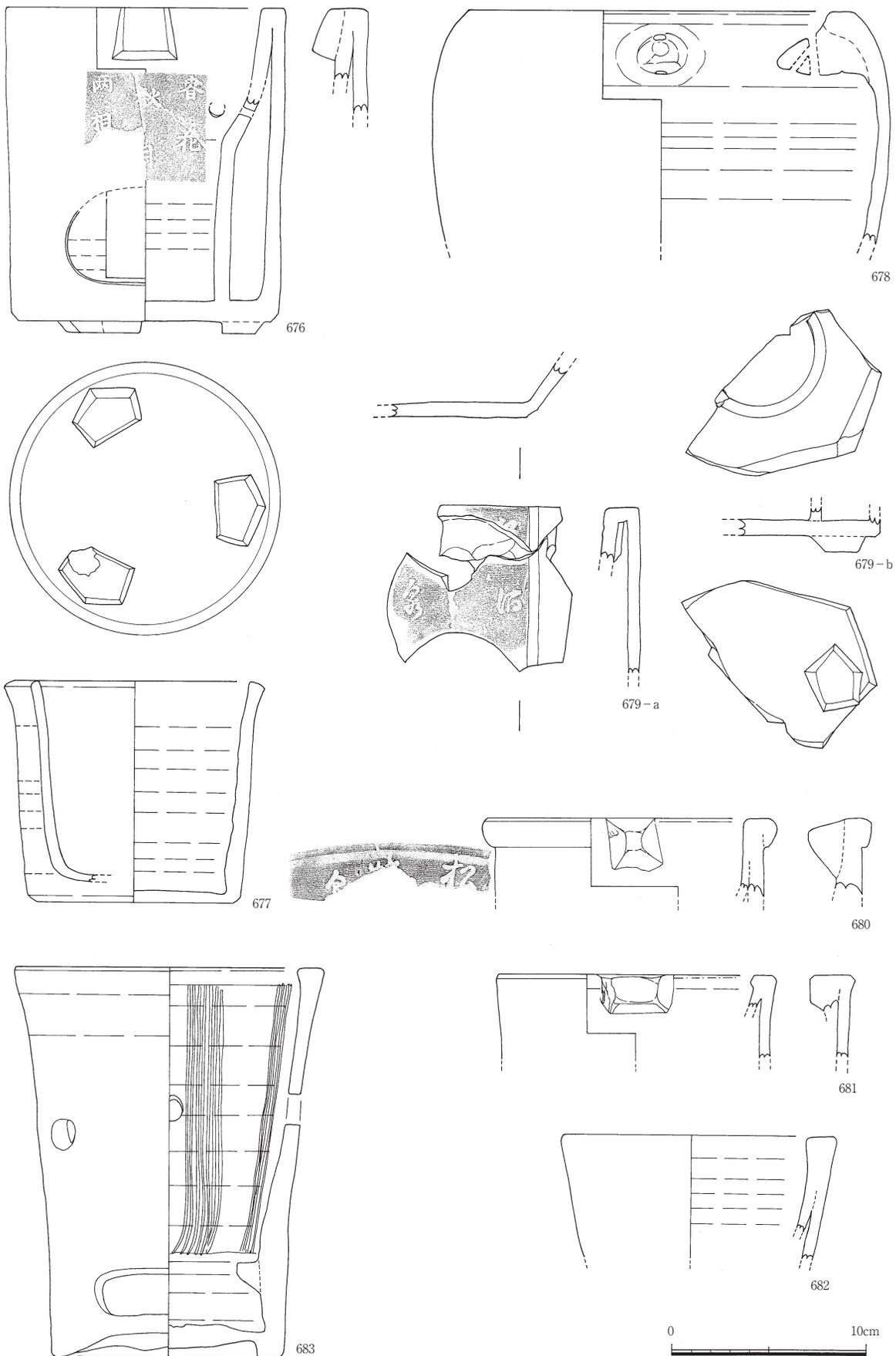


Fig.71 SK19出土遺物実測図 (19)

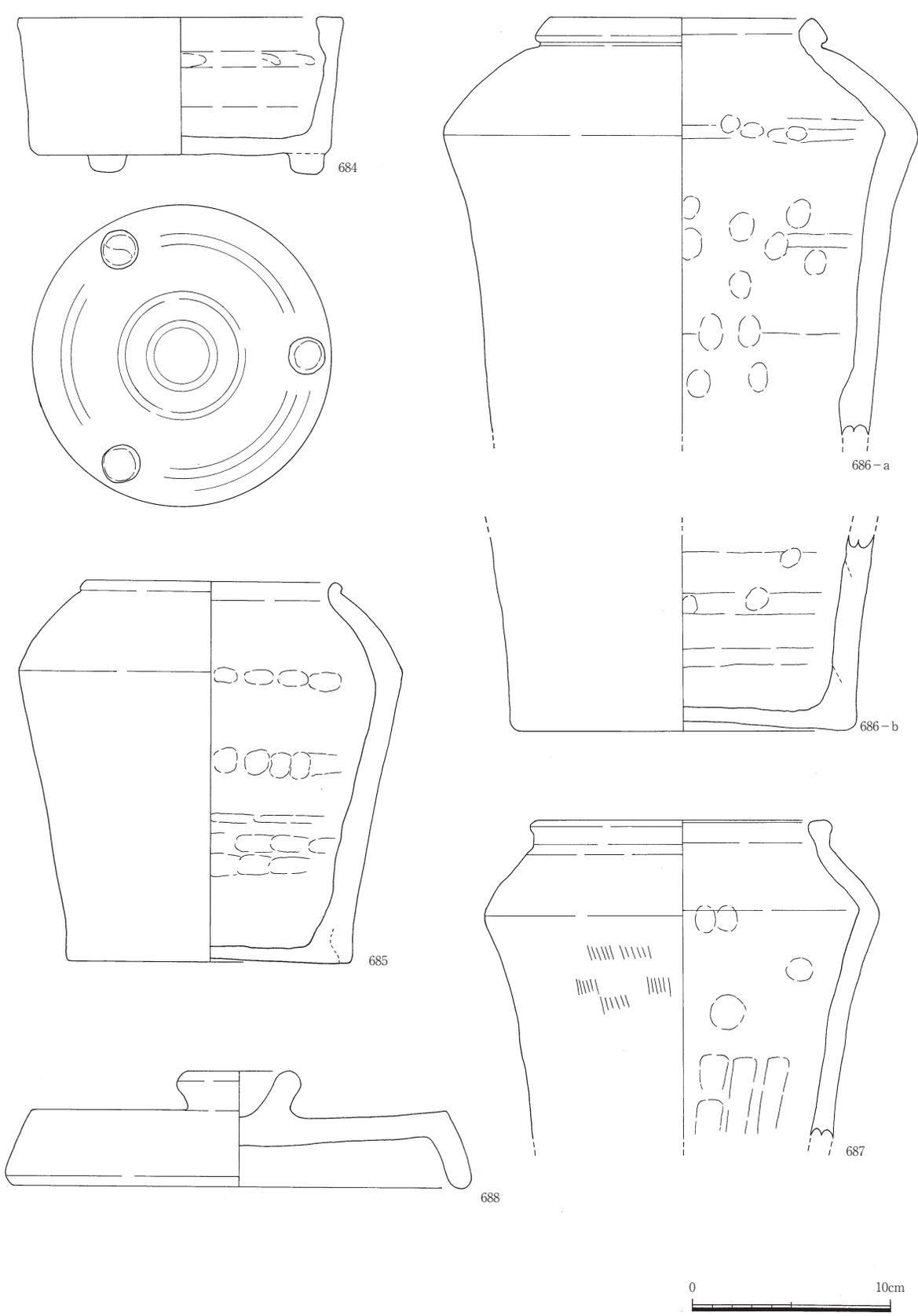


Fig.72 SK19出土遺物実測図 (20)

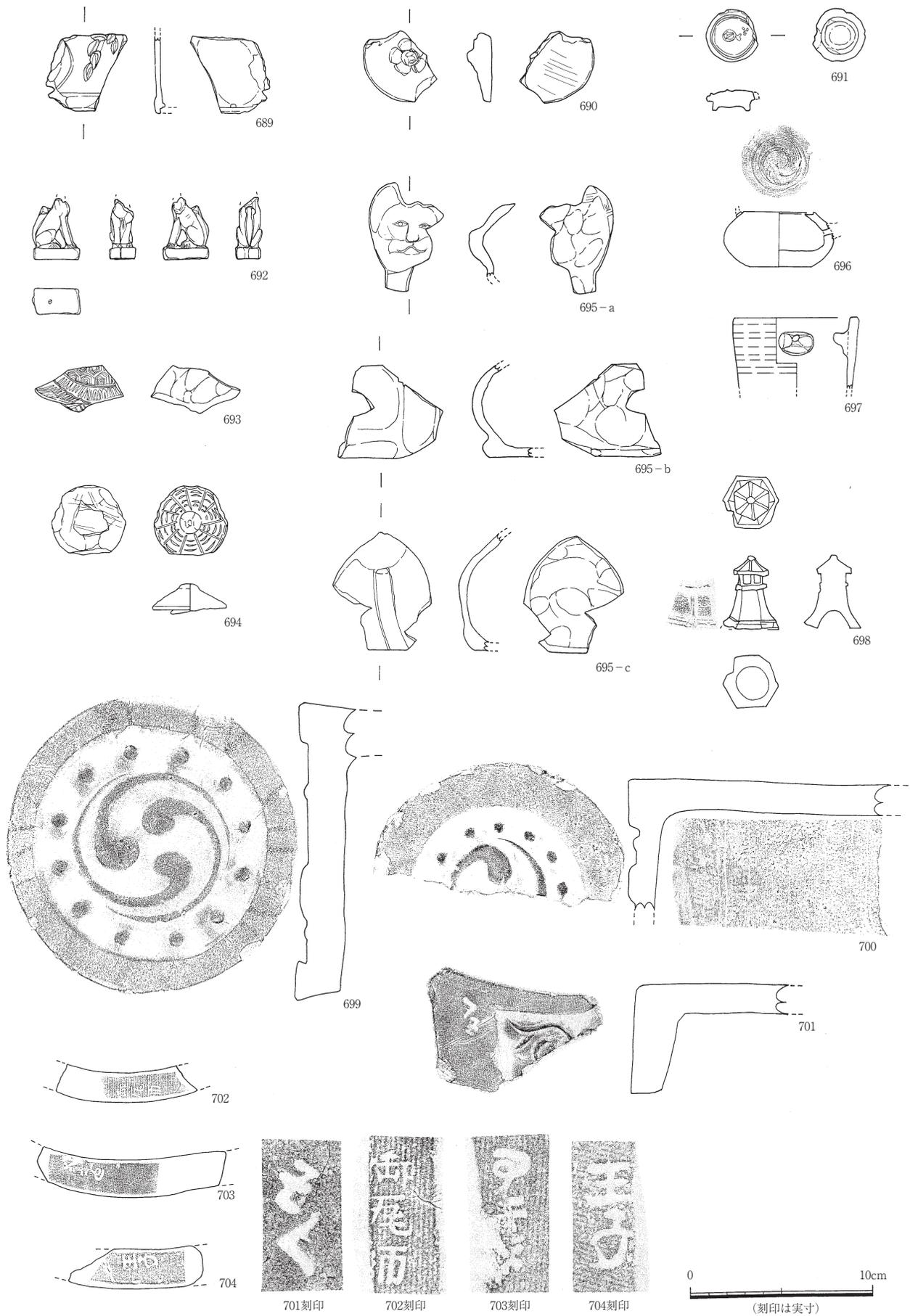


Fig.73 SK19出土遺物実測図 (21)

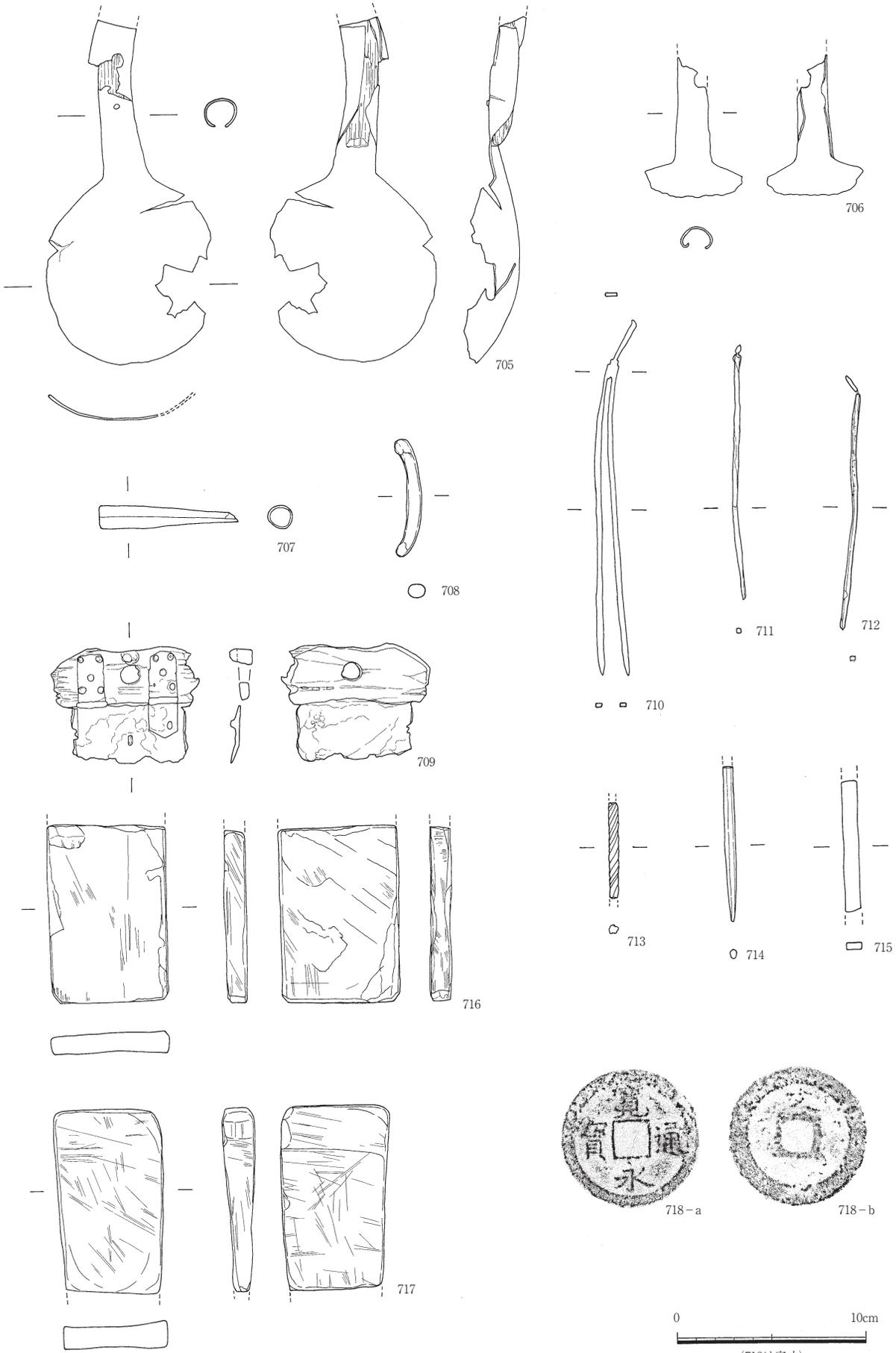


Fig.74 SK19出土遺物実測図 (22)

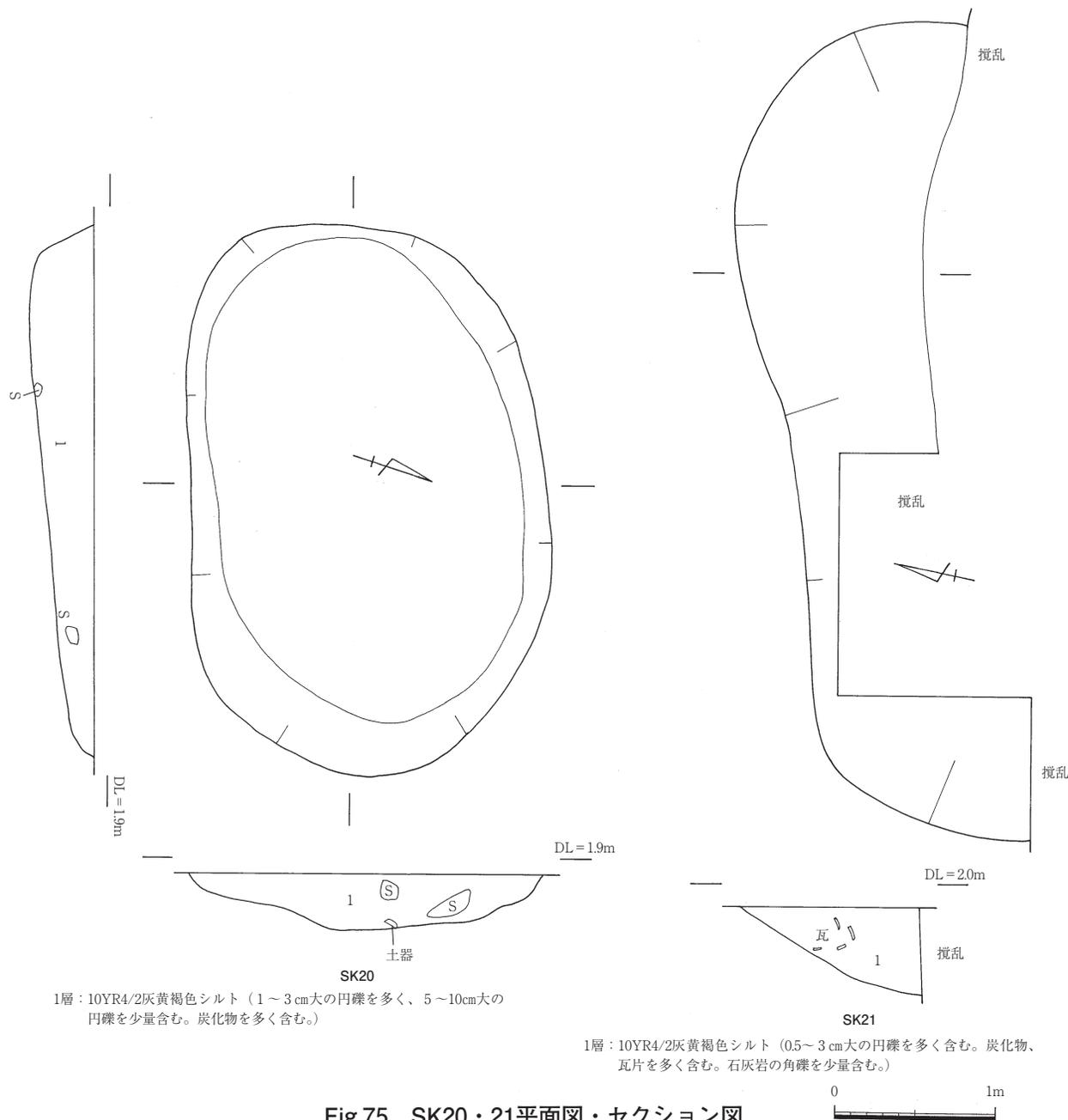


Fig.75 SK20・21平面図・セクション図

SK20 (Fig.75～77)

調査区南部に位置する。平面形は楕円形で、検出規模は長軸3.42m、短軸2.20m、深さ40cmを測る。断面形態は不整形である。埋土は灰黄褐色シルトであり、炭化物を多く含んでいる。

出土遺物は、個体数にして磁器（中碗10・小碗4・小杯3・猪口2・小皿五寸皿11・中皿2・蓋物3・瓶1・香炉1・不明4）、陶器（中碗7・小皿2・中皿1・香炉2・瓶1・甕1・不明1）、軟質施釉陶器（鬘水入れ1）、土器（小皿10・火鉢又は焜炉1）、銅製品（煙管雁首1）、鉄製品（釘4・不明1）、石製品（砥石1）である。またこの中には被熱した磁器片4点が含まれる。

図示したものは、719～743である。719～726は磁器で何れも肥前産である。719は中碗で、高台内に「大明年製」銘をもつ。721は草花文の丸形小碗。722は白磁の端反形小杯。723は糸切り細工による変形形の皿。内面に鶴、外面に草文を描く。有田で生産された上手の製品である。724は

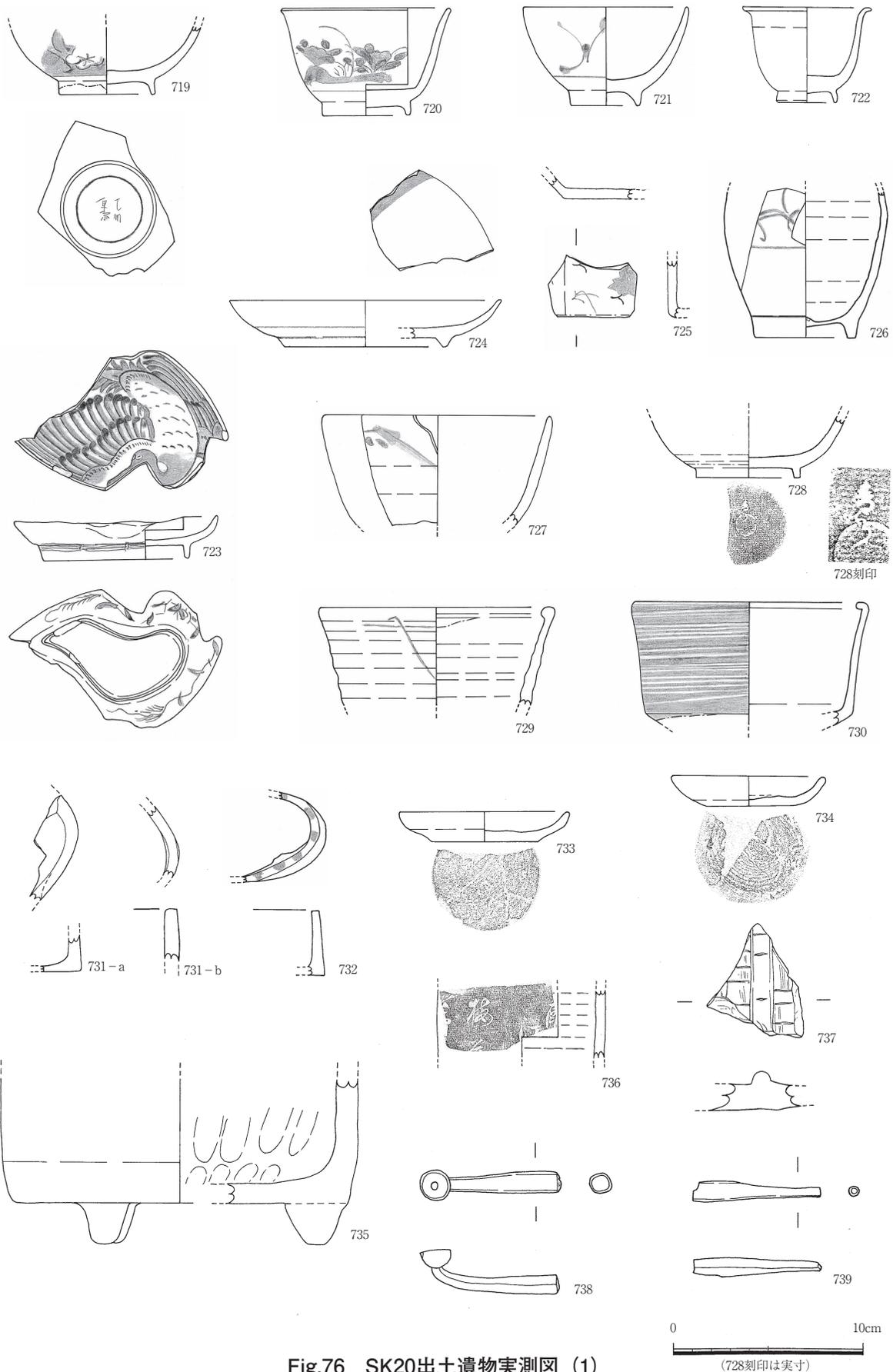


Fig.76 SK20出土遺物実測図 (1)

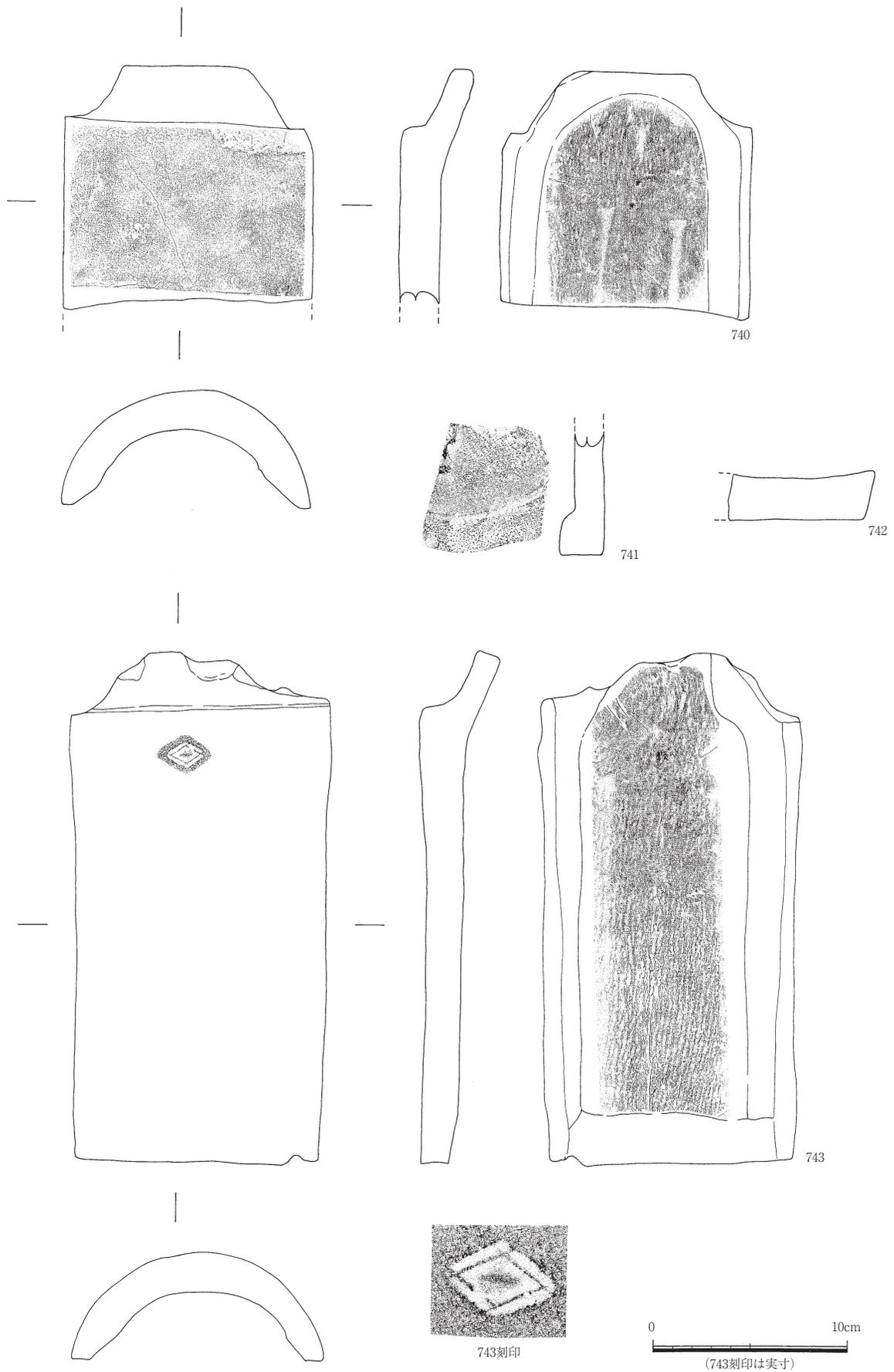


Fig.77 SK20出土遺物実測図 (2)

丸形の五寸皿。二次被熱を受け釉は変質している。725は器種不明。多角形で、外面に松葉文とコンニャク印判による花文を配する。726は染付の瓶で、呉須は青灰色に発色する。

727～730・736は陶器。727・728は肥前産の京焼風陶器碗で、728は高台内に「清水」銘印をもつ。729は香炉又は火入れ。灰釉を施し呉須絵を描く。730は肥前産の火入れ又は香炉で、白化粧土刷毛目を施す。736は器種不明の焼締めの陶器で、外面にヘラ彫りで文字を施す。

731～735・737は土器。731・732は施釉土器で、鬢水入れか。731は楕円形で、明黄褐色の低下度釉を施す。732は明黄褐色の低下度釉を施し、口縁端部に緑色の釉を列点状に施している。733・734は土師質土器小皿で、733は口縁部に灯芯油痕を認める。735は土師質土器の焜炉である。737は瓦質土器で、外面に板ナデとヘラ彫りで文様を描いている。

738・739は銅製品。738は煙管の雁首、739は吸口である。

740～743は瓦。741は三ツ葉柏文軒丸瓦。740・743は丸瓦で、740は花形、743は菱形の刻印をもつ。742は平瓦で、厚手である。

SK20は18世紀前半に比定される。

SK21 (Fig.75・78～80)

調査区南部に位置する。南部側が攪乱を受けるため全体の形状は不明であるが、検出規模は東西長5.02m、南北の残存長1.84m、深さ53cmを測る。壁は斜め上方に立ち上がる。埋土は灰黄褐色シルトで、埋土中には炭化物と瓦片を多量に含んでいる。

出土遺物は、個体数にして磁器（中碗38・小碗3・小杯9・薄手酒杯5・小皿五寸皿12・鉢6・猪口4・碗蓋8・蓋物4・蓋物蓋3・蓋2・段重1・合子1・うがい茶碗1・紅皿5・瓶3・仏花瓶1・火入れ1・水滴又は人形1・戸車1・不明1）、陶器（中碗12・小皿12・中皿3・捏鉢1・鍋14・行平8・鍋蓋13・土瓶急須16・土瓶蓋5・爛徳利1・瓶3・甕2・蓋物5・蓋1・柄杓1・火鉢2・灯明皿7・水滴又は人形1・不明2）、土器（小皿4・白土器小皿1・中皿1・焙烙2・羽釜1・焜炉13・土人形1・泥面子1・不明2）、及び多量の瓦片である。

図示したものは、744～773である。744～751は磁器。744・745は能茶山窯産、746～750は肥前産、751は産不明である。744・745は中碗。745は能茶山窯産の広東形碗で、高台内に「サ」銘をもつ。744も能茶山窯産の可能性をもつものである。746は口縁部輪花形の皿で高台内に銘をもつ。747はうがい茶碗で、外面に花文を描く。748は色絵の小瓶で、赤の上絵付を施す。749は白磁の水滴又は人形で、籠形。750は人形又は水滴で、人物。型押し成形前後貼り合わせで、人物の衣服の部分は呉須と鉄釉で彩色している。751は白磁の戸車である。

752～756は陶器。752は鉄釉の蛇の目釉剥ぎ小皿で、能茶山窯産。暗褐色の釉を施し、内面の釉剥ぎ部分に白土を刷毛塗りする。753は灰釉の折縁形中皿で、見込みを蛇の目釉剥ぎし白土を刷毛塗りする。754は尾戸窯の灰釉碗又は鉢の底部である。755は土瓶で、橙色の低下度釉を施し、上位に白土イッチン描きによる文様を施す。756は能茶山窯産の鉄釉甕である。

757～761・763～767は土師質土器。762は瓦質土器である。757は中皿。内外面回転ナデで、外面下位には回転ケズリを施している。758は関西系の焙烙である。759～763は焜炉。759は丸形の焜炉で、内面上位に型作りによる突起を貼付する。760は焜炉のさなで、白色系の胎土をもつ。761



Fig.78 SK21出土遺物実測図 (1)

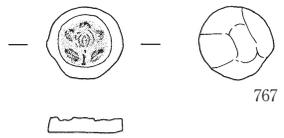
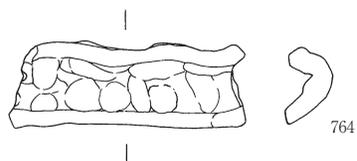
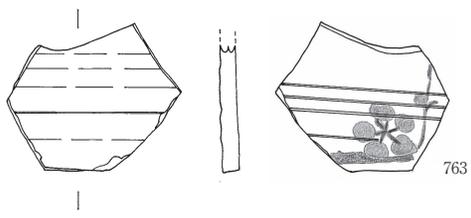
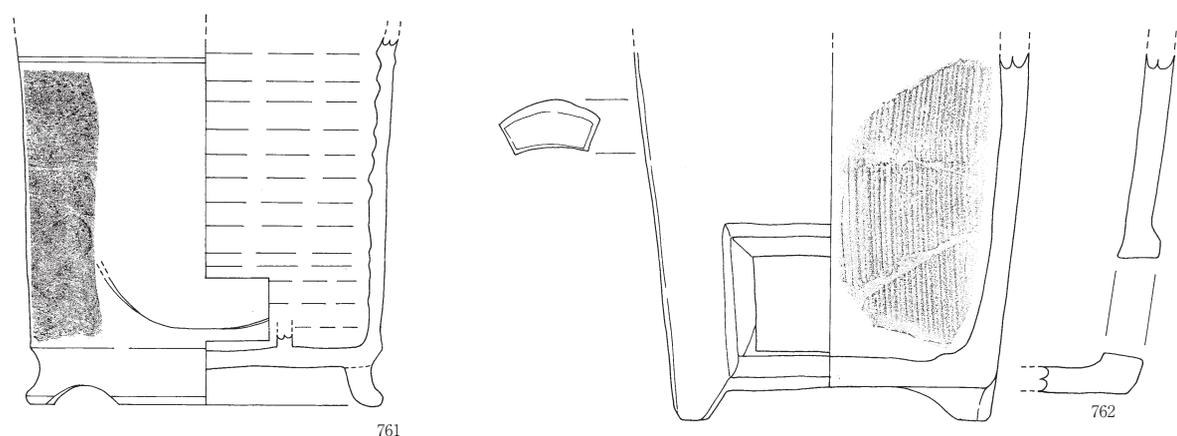
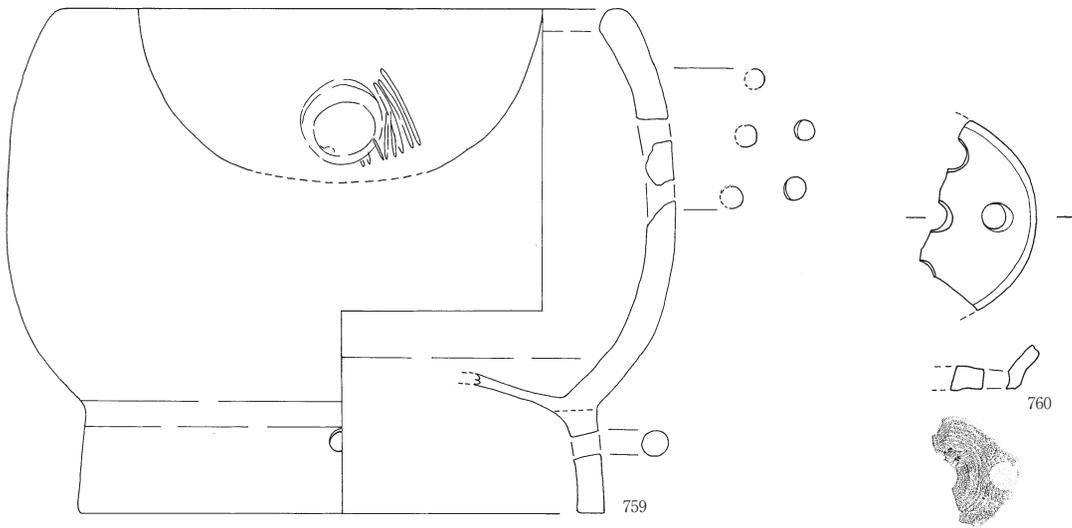
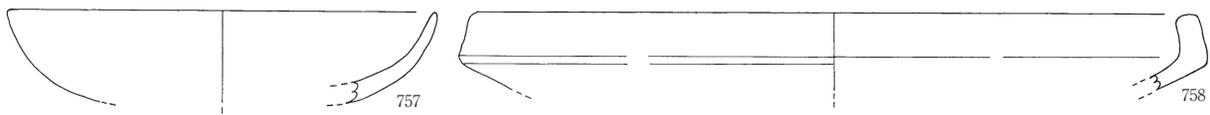


Fig.79 SK21出土遺物実測図 (2)

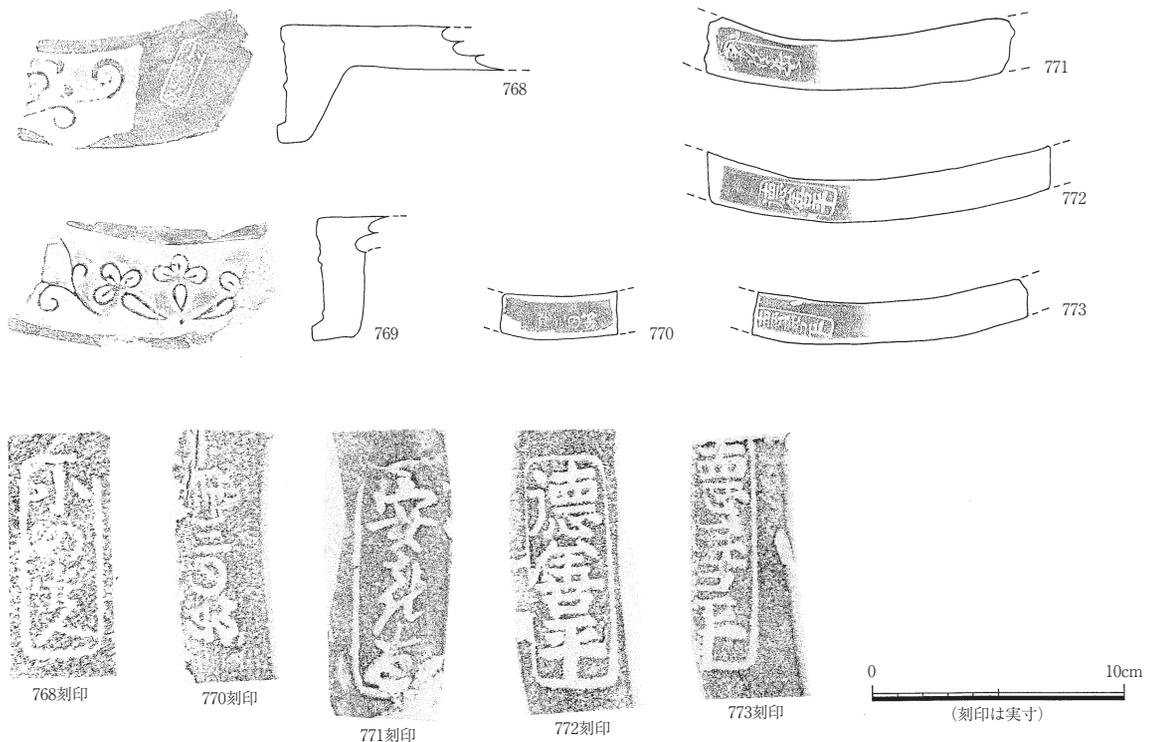


Fig.80 SK21出土遺物実測図 (3)

は筒形の焜炉で、体部前方の下位に楕円形の窓をもつ。胎土は灰白色を呈し、外面に陽刻文様を施す。762は箱形の焜炉で、前方下位に方形の窓をもち、両側面に扇形の把手を貼付する。763は灰白色の胎土をもつもので、窓部分の上面に鉄錆と赤絵具で梅文を描いている。764は手捏ね成形による用途不明の土器製品である。767は泥面子、765・766は人形又は泥面子である。

768～773は瓦。768・769は軒平瓦。768は瓦当に角枠内「小の□」の銘印をもつ。770～773は平瓦。770は銘印をもつ。771は角枠内「安芸友」銘印をもち、安芸（高知県安芸市）の製品である。772・773は角枠内「徳善平」銘印をもち、徳王子（高知県香南市徳王子）の製品である。

SK21は19世紀中葉（幕末）に比定され、建物の取り壊し等に伴う廃棄土坑と考えられる。

SK22 (Fig.81)

調査区の南部で検出された土坑で、北部側が攪乱を受け、南部はP17によって切られている。検出規模は東西長1.12m、南北残存長0.60m、深さ66cmを測る。断面形態は逆台形で、壁は斜め上方に立ち上がる。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は染付中碗1点、小皿1点、陶器土瓶蓋1点、土師質土器小皿1点である。

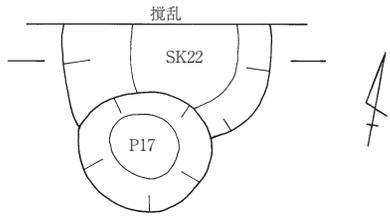
SK22は18世紀後半～19世紀に比定される。

SK23 (Fig.81)

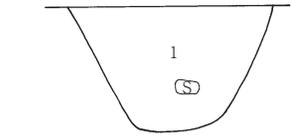
調査区中央部に位置する。平面形は円形で、検出規模は長軸0.62m、短軸0.58m、深さ36cmを測る。断面形態は逆台形で、壁は斜め上方に立ち上がる。埋土は褐色シルトである。

出土遺物は、個体数にして磁器（中碗3・小皿3・香炉1）、陶器（中碗2・小皿2・瓶1）、土器（白土器小皿1・細片）、及び少量の瓦片である。

SK23は18世紀に比定される。

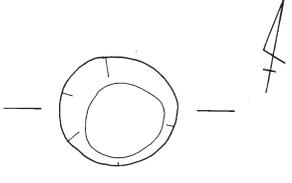


DL=2.0m



SK22

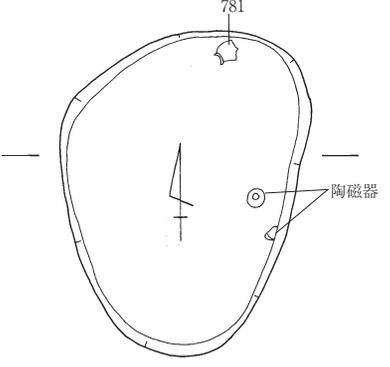
1層：10YR4/2灰黄褐色シルト（0.5～1cm大の円礫を含む。炭化物を含む。）



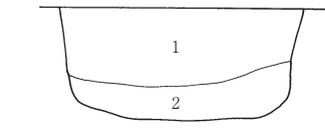
DL=2.1m



SK23

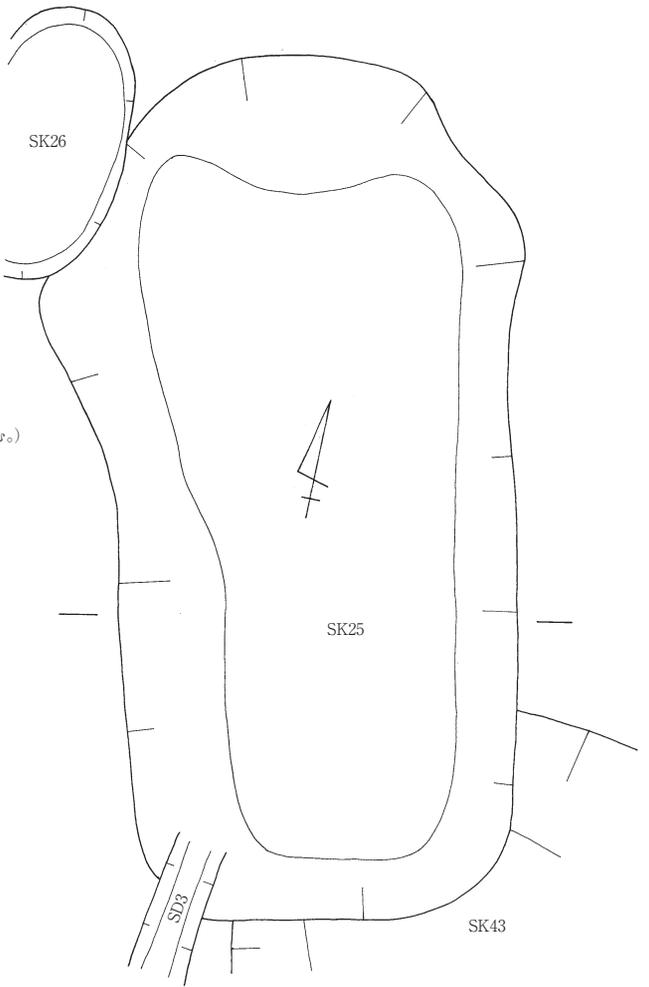


DL=2.0m

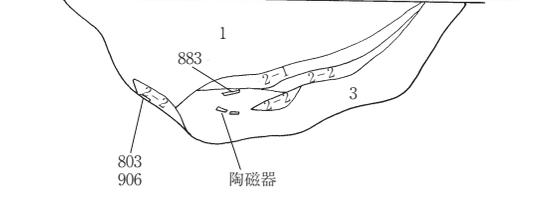


SK24

1層：10YR4/3にぶい黄褐色シルト（0.5～1cm大の円礫を多く、2～4cm大の円礫を少量含む。炭化物を少量含む。）
 2層：10YR4/1褐灰色シルト（0.5～1cm大の円礫を含む。炭化物を多く含む。）



DL=2.1m



SK25

1層：10YR4/2灰黄褐色シルト（0.5～4cm大の円礫を含む。炭化物と橙色土粒を含む。）
 2-1層：7.5YR5/6明褐色シルト（褐色シルトに橙色シルトブロックを多量に含む。）
 2-2層：10YR3/2黒褐色シルト（炭化物を多量に含む。）
 3層：10YR4/2灰黄褐色シルト（0.5～4cm大の円礫を含む。炭化物と橙色土粒を含む。）



Fig.81 SK22～25平面図・セクション図・エレベーション図・遺物出土状況図

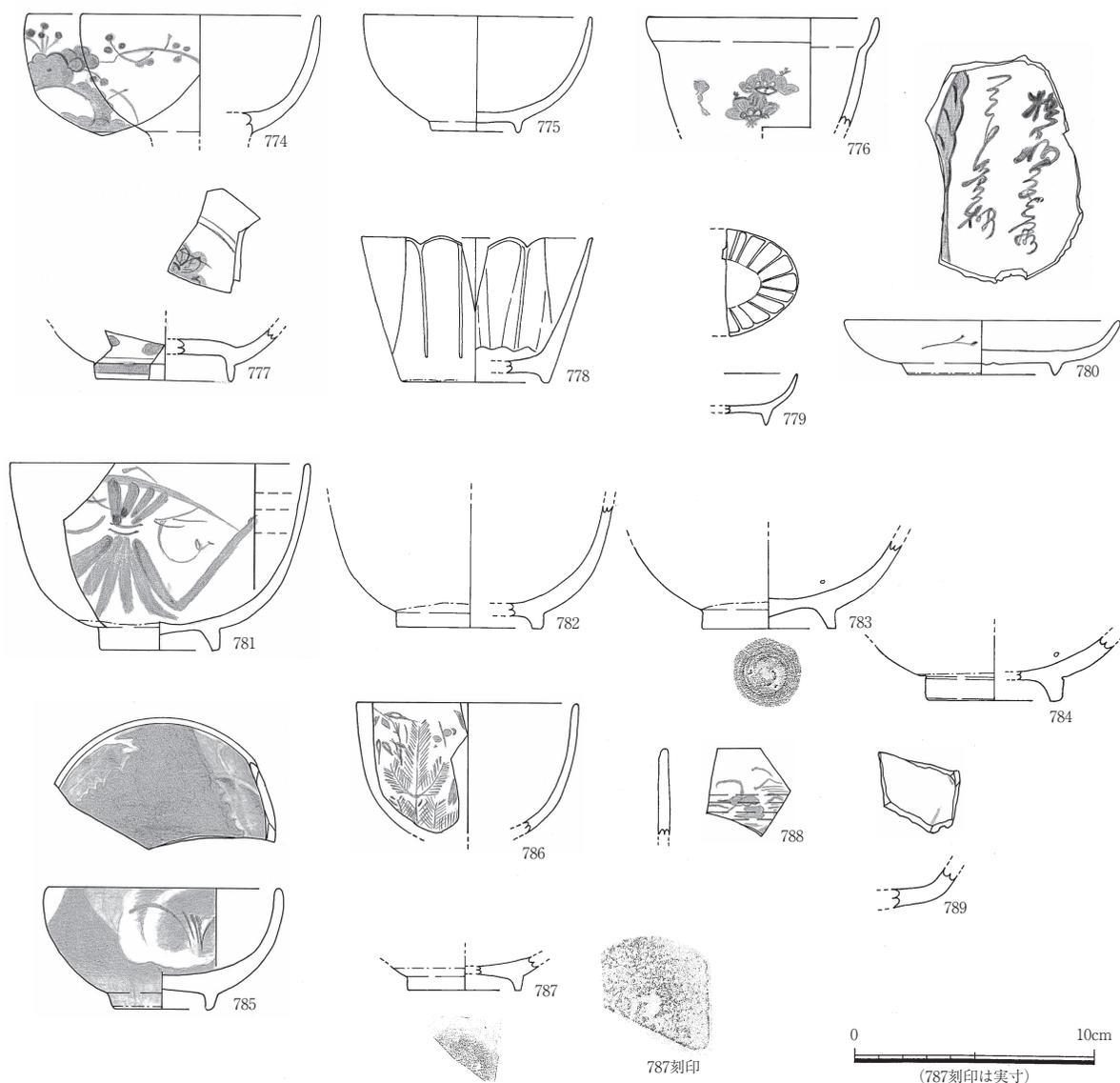


Fig.82 SK24出土遺物実測図 (1)

SK24 (Fig.81~83)

調査区南東部に位置する。平面形は楕円形で、検出規模は長軸1.72m、短軸1.26m、深さ58cmを測る。断面形態は箱形で、平坦な床から壁が直立気味に立ち上がる。埋土はにぶい黄褐色シルトと褐灰色シルトで、下層には炭化物が多く含まれる。

出土遺物は、個体数にして磁器（中碗10・小碗2・小杯4・小皿五寸皿7・猪口3・鉢1・紅皿1）、陶器（中碗19・小碗1・小皿3・捏鉢2・播鉢2・瓶1・壺2・灯明皿1・火入れ1）、土器（小皿12・焜炉1）、及び少量の瓦片である。このうち瓦には二次被熱により変色したものが含まれる。

図示したものは774~794である。774~780は磁器。774~776・778~780は肥前産、777は中国産である。774は肥前波佐見の雪輪草花文丸碗である。775は白磁丸碗。776は猪口か。外面にコンニャク印判による松文を描く。777は中国景德鎮窯系の万頭心碗である。778は白磁の猪口で、型打ち成形で輪花形に作り出す。779は白磁紅皿。糸切り細工で、高台は貼付による。780は丸形小皿で、内面に芭蕉葉と文字を描く。

781～793は陶器。781は尾戸窯の灰釉中碗で、鉄錆と呉須で稲束と笠を描く。782～784も尾戸窯の灰釉中碗である。785は肥前産の丸形中碗で、内外面に白化粧土打ち刷毛目、外面に錆絵の草文を施す。786は京焼の色絵碗で、薄緑と青の上絵付で若松と竹を描く。787は京焼の灰釉碗。高台内に「清□」銘印をもつ。788は京都系の灰釉碗で、鉄錆で山水文を描く。789は志野焼の体部片で、皿か。長石釉を施し、外面に錆絵がみえる。790は備前焼の播鉢。791は肩衝形の壺で、双耳を貼付する。釉は焼成不良気味で灰オリーブ色に発色している。792は備前の灯明受皿で、錆釉を施す。793は水指か。灰白色を帯びる半透明の釉を施し、尾戸窯産とみられる。

794は土師質土器の焜炉。筒形で、体部の前方下位に窓をもち、体部後方に円孔を穿つ。

SK24は18世紀後半に比定される。

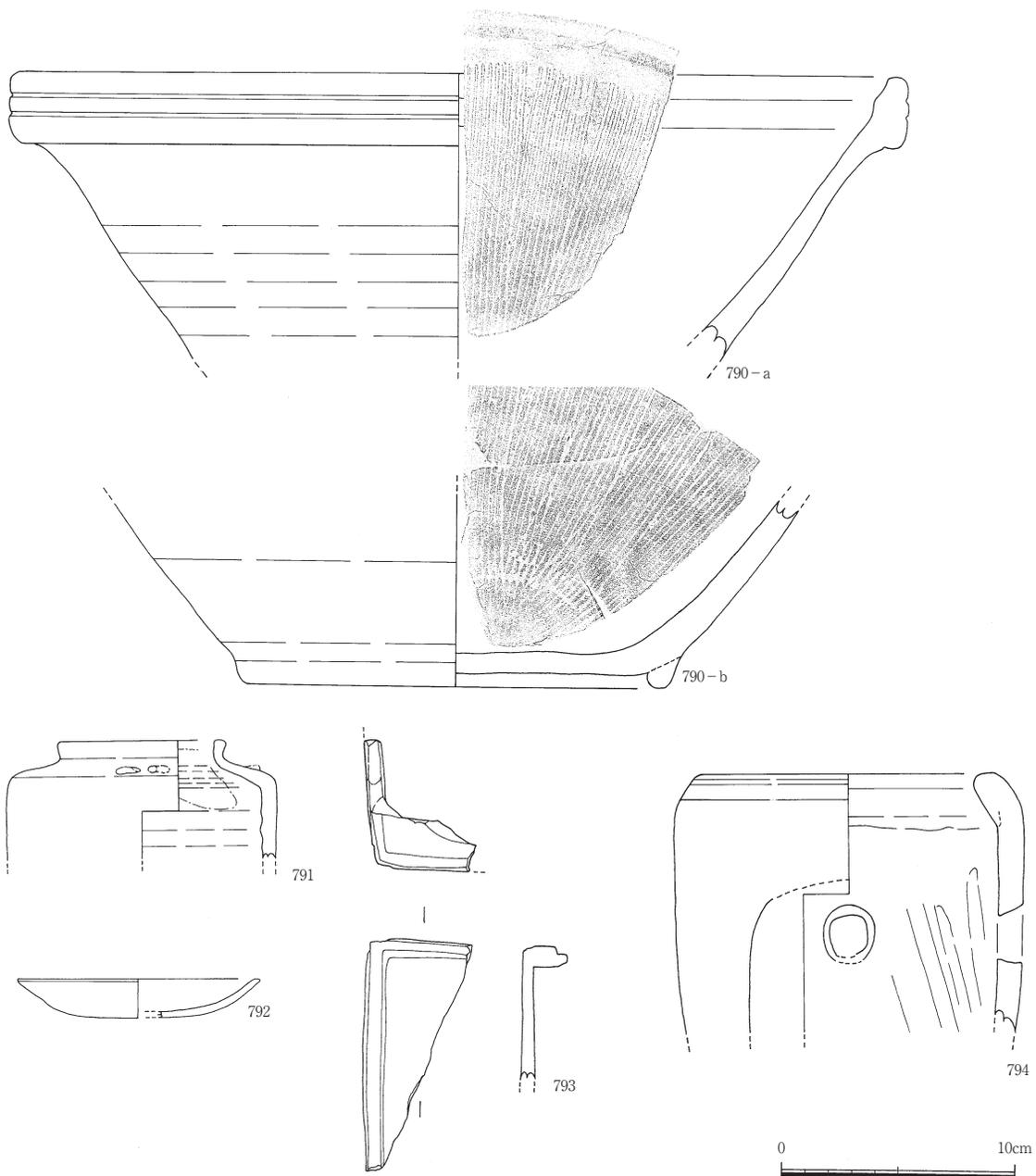


Fig.83 SK24出土遺物実測図 (2)

SK25 (Fig.81・84～92)

調査区東部に位置する。平面形は不整形で、検出規模は長軸4.60m、短軸2.14m、深さ76cmを測る。断面形態は不整形で、床面は中央に向かって緩やかに落ち込む。埋土は灰黄褐色シルト他であり、炭化物を多く含んでいる。切り合い関係では、18世紀末～19世紀初頭のSK43とP88を切っており、19世紀のSK26とSD3に切られている。

出土遺物は、個体数にして磁器（大碗1・中碗44・小碗17・小杯7・小皿五寸皿22・中皿3・鉢3・猪口12・碗蓋14・蓋物8・蓋物蓋2・段重3・瓶2・髪油壺1・神酒徳利2・紅皿16・香炉又は火入れ6・人形又は水滴1・不明11）、五彩（皿1）、陶器（中碗30・小碗27・小皿5・中皿3・鉢2・摺鉢2・摺鉢7・鍋4・土瓶2・土瓶蓋4・瓶4・壺2・甕8・水注1・蓋物3・蓋物蓋1・蓋1・香炉1・灯明皿4・香炉又は火入れ2・水鉢1・植木鉢2・餌鉢1・人形又は水滴3・ミニチュア1・不明2）、土器（杯27・皿16・小皿65・白土器小皿9・杯又は皿7・匙1・焙烙6・焜炉10・さな1・火消壺蓋1・人形3）、銅製品（煙管1・不明1）、銅銭（寛永通宝1）、鉄銭1、鉄製品（釘1）、瓦片である。

図示したものは、795～922である。795～831は磁器。何れも肥前産である。795は丸形の大碗で、外面に松と竹を描く。796～803は中碗。796～798は望料碗で、撥状に開く高台をもつ。799～801は広東形碗。802は丸形中碗で桐文を描く。803は青磁染付の丸形中碗で、見込みに手描きによる五弁花文、高台内に渦「福」を描く。804～808・811は小碗。804は丸形小碗で、内外面に龍を描く。805・806は半筒形小碗。805は外面に四方襷と半菊文を描き、見込みに手描きによる五弁花文を描く。811は青磁染付の筒丸形小碗で、外面に呉須で花文を描き青磁釉を施す。809は桶形の白磁小杯である。810は碗又は猪口で、外面に蕨文を描く。

812～817は碗の蓋。812は大碗の蓋で、外面に龍と鶴、内面に松竹梅円形文と四方襷、摘み内には渦「福」を描く。813・817は広東形碗の蓋、814・815は望料碗の蓋である。

818・819は白磁の菊花形皿。820は染付小皿。821は色絵の皿で、赤の上絵付で文様を描く。822は色絵の猪口で、赤、黄、黒の上絵付で水仙を描いている。823は白磁の菊花形紅皿で、外面の一箇所に陽刻による菊花が施される。824・825は蓋物で、824は牡丹、825は宝文を描く。826・827は唐草文の段重である。828は合子の蓋である。829は髪油壺。830は辣蕪形の瓶で、梅花と笹文を描く。831は色絵の水滴又は人形で、赤の上絵具で部分的に彩色している。

832～886は陶器。832～853は碗である。832～838・840・841は尾戸窯の灰釉碗で、832～834・838は高台内に渦状の匏痕を認める。836は鉄錆で草文を描くものである。840はロクロ成形の後、口縁部を輪花形に変形させている。841は梅文の小碗で、花を白土、枝を鉄錆で描き分けている。842～850は京焼及び京都系の碗。842・843は京都系の灰釉小碗で、高台内中央に円圈状の段をもつ。釉は光沢が強く透明で、部分的に白色から薄紫色に発色している。844・845は京焼の色絵丸形小碗で、赤、薄緑の上絵付で兎と草花、月を描く。846も京焼の色絵丸形小碗で、赤、薄緑の上絵付で文様を描くものである。847は京都・信楽系の色絵半球形小碗で、赤、薄緑の上絵付による笹文である。848は鉄錆で略化した文様、849は草花文を描く。850は京都・信楽系の小杉碗である。851は瀬戸の拳骨碗。黒褐色の釉を施し、部分的に白土を掛ける。畳付に「○」印を認める。852は産不明で、練り込み手の碗である。853は肥前産の京焼風陶器碗で、高台内に「清水」銘印を認める。

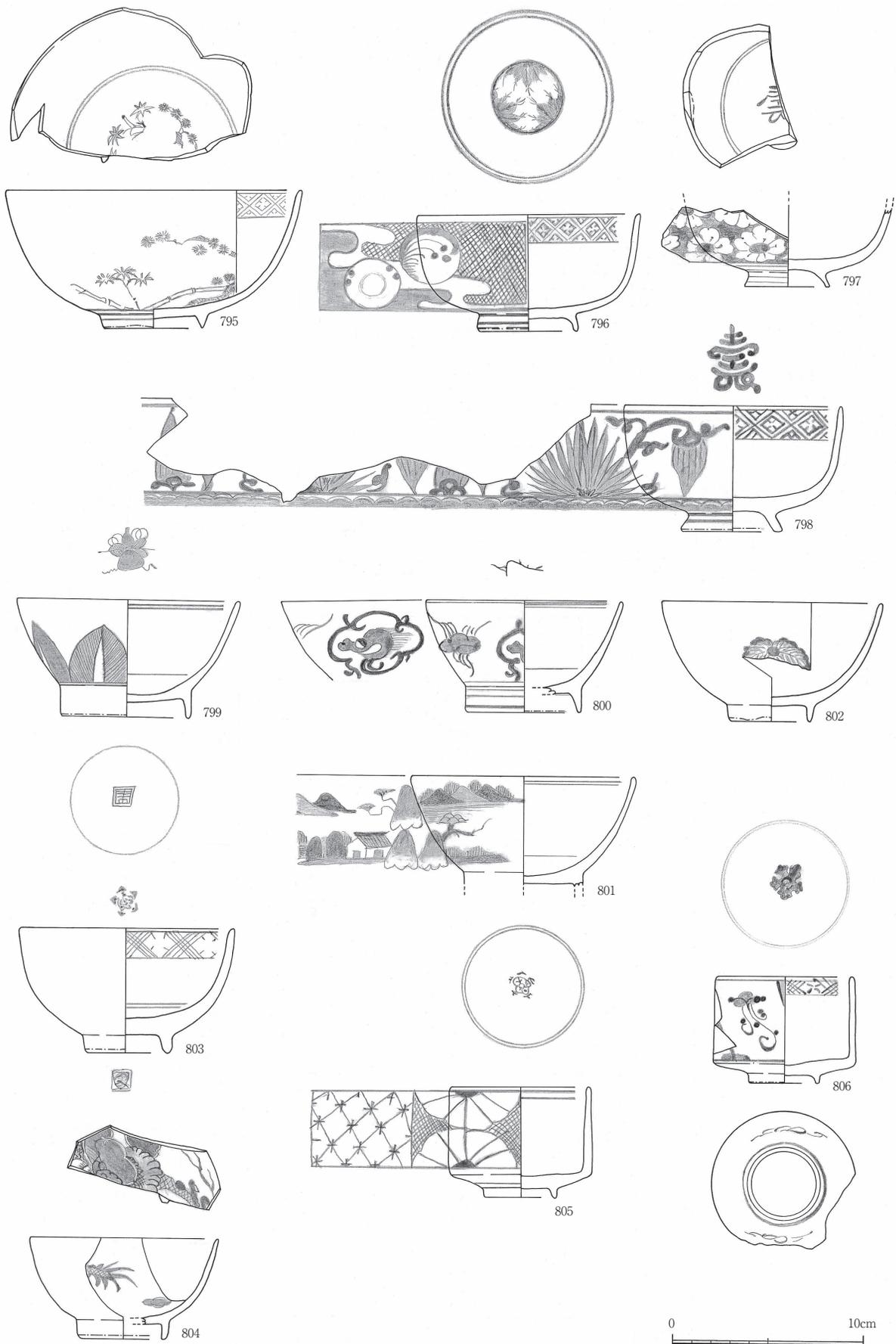


Fig.84 SK25出土遺物実測図 (1)

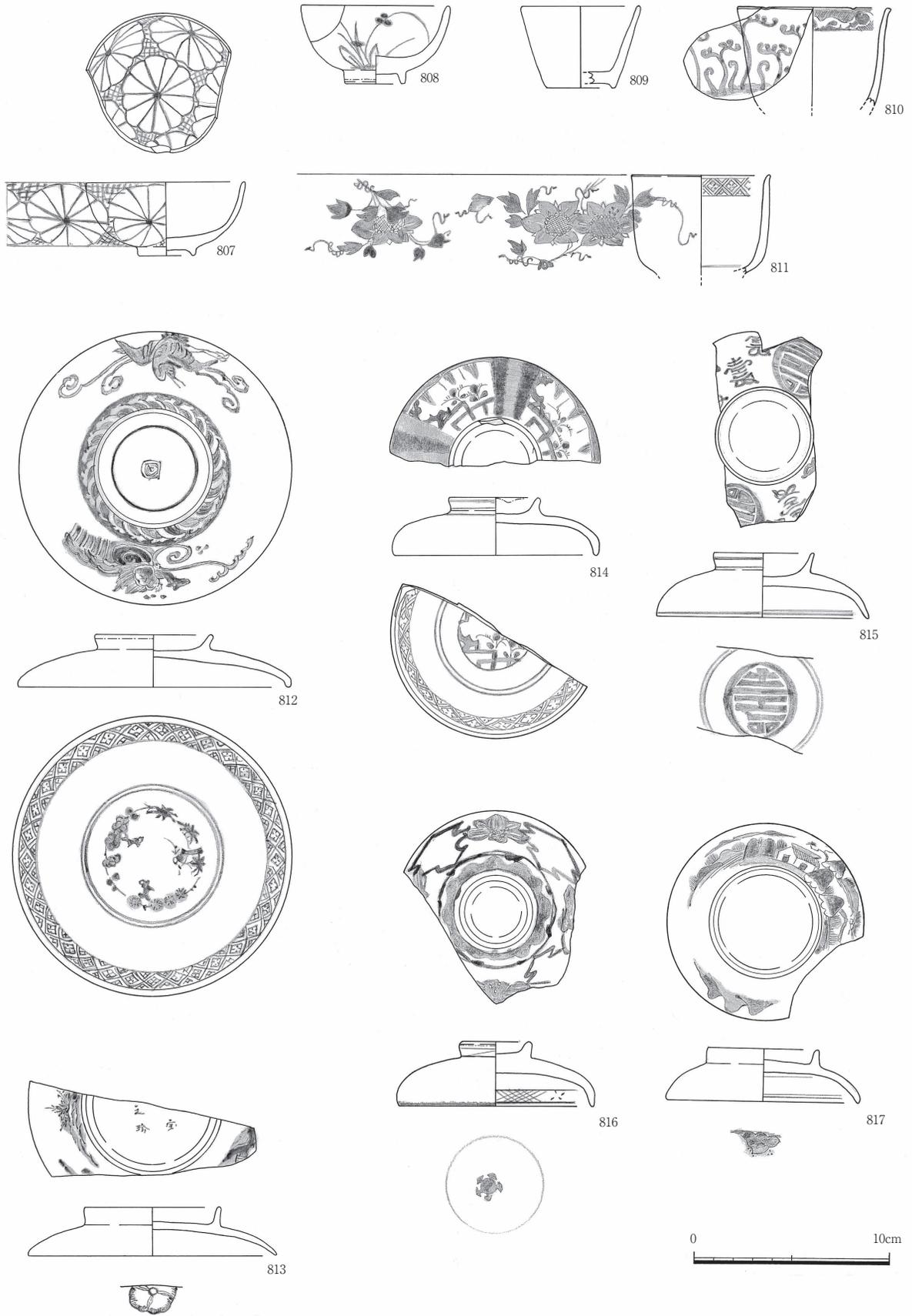


Fig.85 SK25出土遺物実測図 (2)

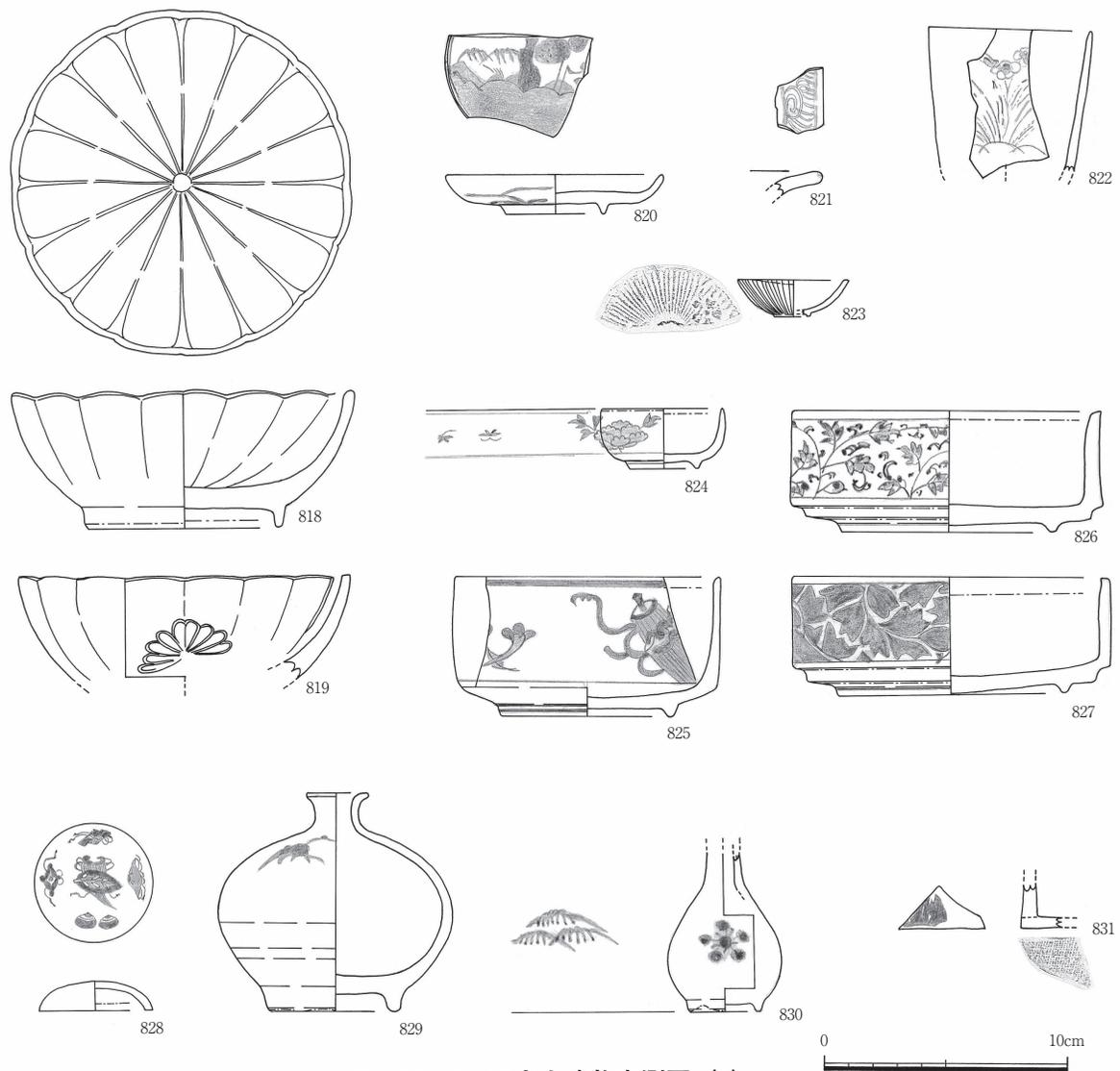


Fig.86 SK25出土遺物実測図 (3)

854は灰釉小皿で、内面に錆絵を描く。855は鉄釉の小皿又は灯明受皿で、内底に砂目痕が残る。856は灰釉の鉢か。ロクロ成形の後、体部を凹圧して変形させる。857は鉄釉の水注。858は鉄釉の土瓶である。859～861は鉄釉の鍋である。862・863は堺産の播鉢である。

864・866は関西系の鉄釉甕。865は丹波焼の甕である。867は瀬戸・美濃産の灰釉陶器で、火鉢又は水鉢か。868・869は鉄釉の瓶。870は尾戸窯の灰釉瓶で、呉須で獅子と草花文を描く。871は植木鉢。焼締めで、底部中央に円孔をもつ。872は大鉢か。白化粧土を厚く施し灰釉を重ねる。873は鉄釉の蓋である。874は香炉又は火入れか。外面に丸彫りによる文様を施し、にぶい黄色の釉を施す。875は器種不明の灰釉陶器底部で、尾戸窯の製品である。876は尾戸窯産で、香炉又は火入れ。灰釉を施し、鉄錆で笹文を描く。877は京焼の火入れか。赤、薄緑の上絵付で草花文を描く。878は京都系の香炉又は火入れである。879は京焼で、器種不明。外面に白化粧土を施釉し、呉須と緑釉で植物文を描く。外底に角枠内「錦光山」銘印をもつ。880は鉄釉の陶器で、外面に2条の沈線を施す。881・882は灯明受皿で、錆釉を薄く施す。883は尾戸窯の灰釉餌鉢。884～886は人形又は水滴で、尾戸窯の製品とみられる。

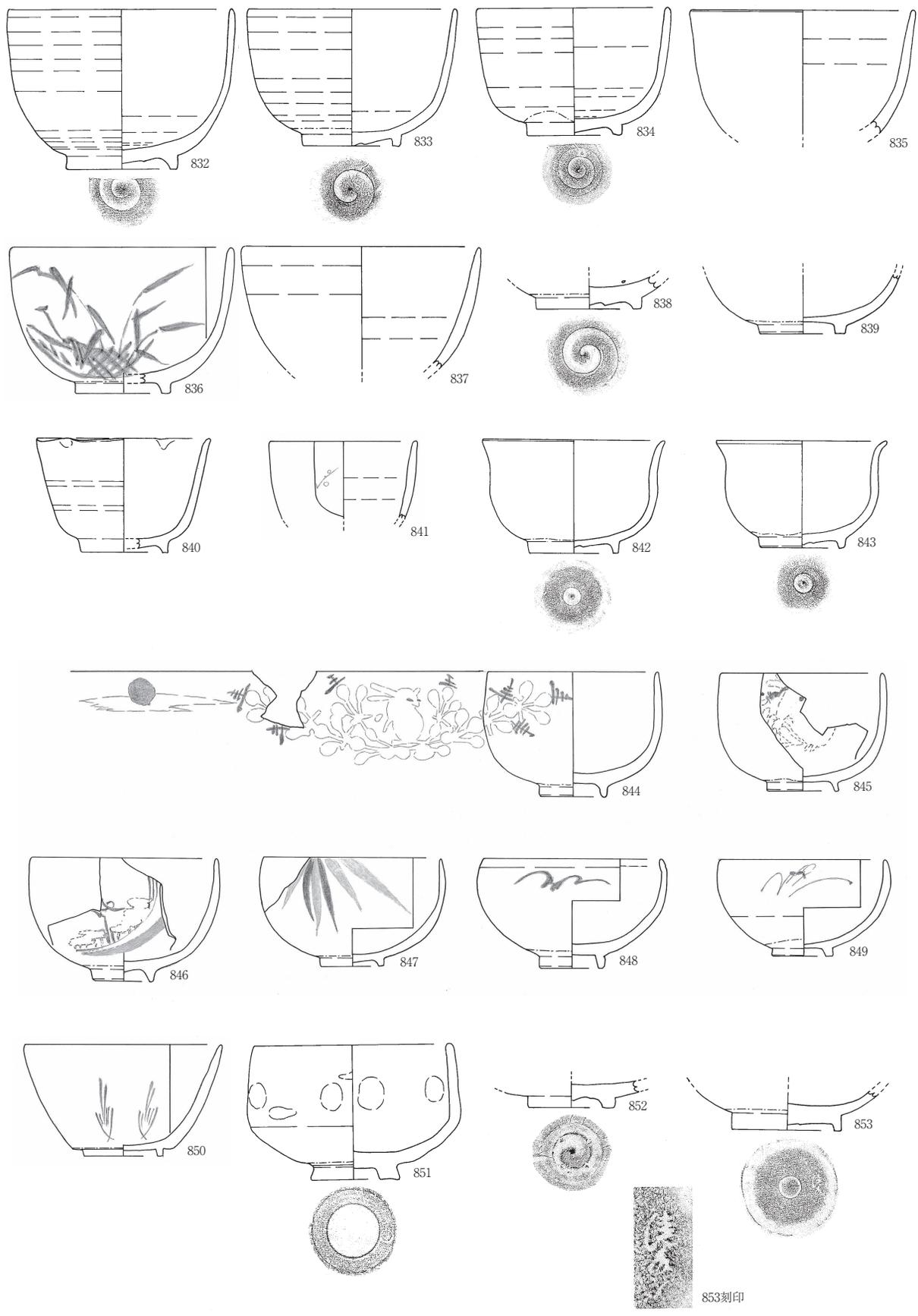


Fig.87 SK25出土遺物実測図 (4)

0 10cm
 (853刻印は実寸)

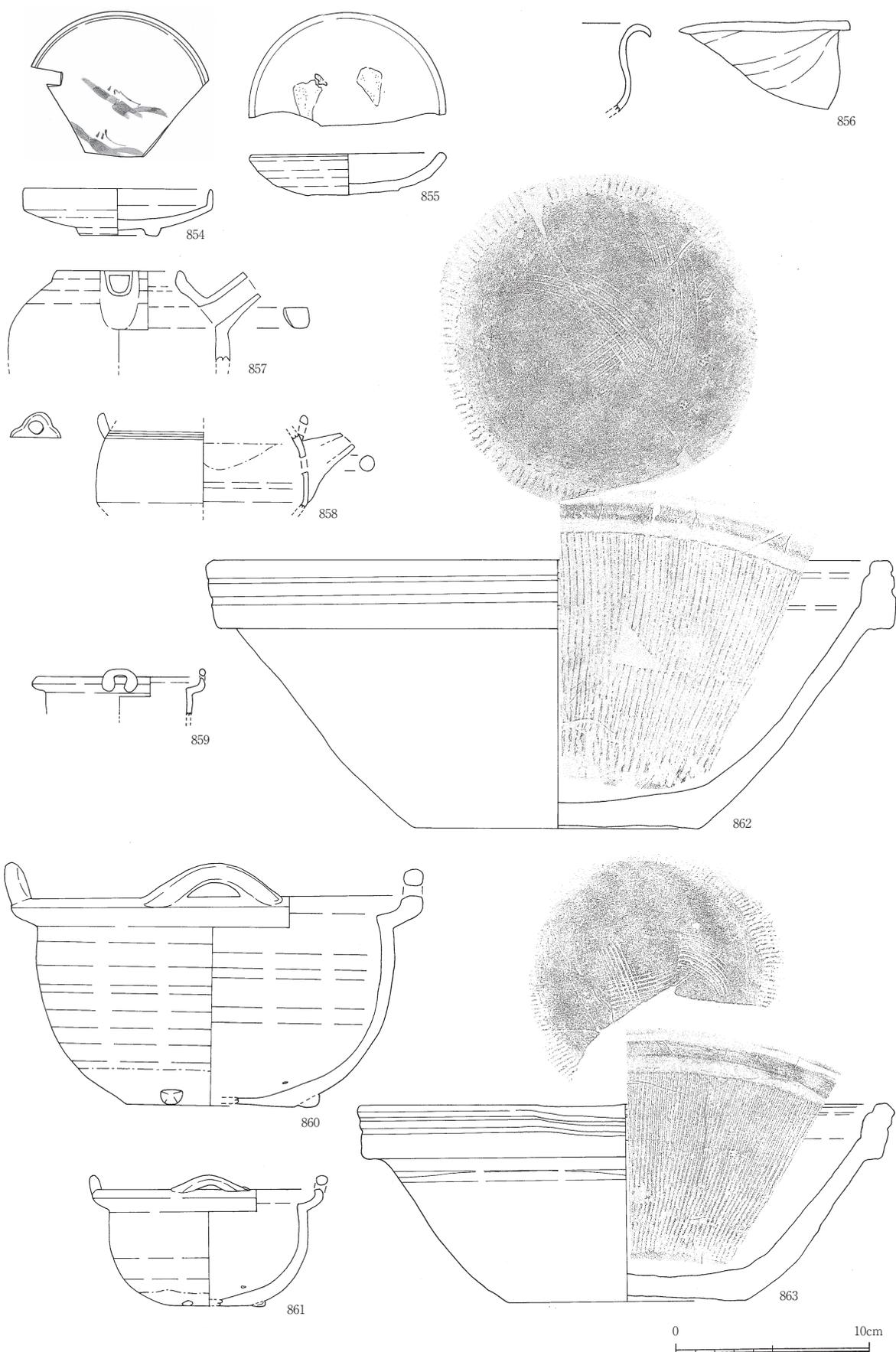


Fig.88 SK25出土遺物実測図 (5)

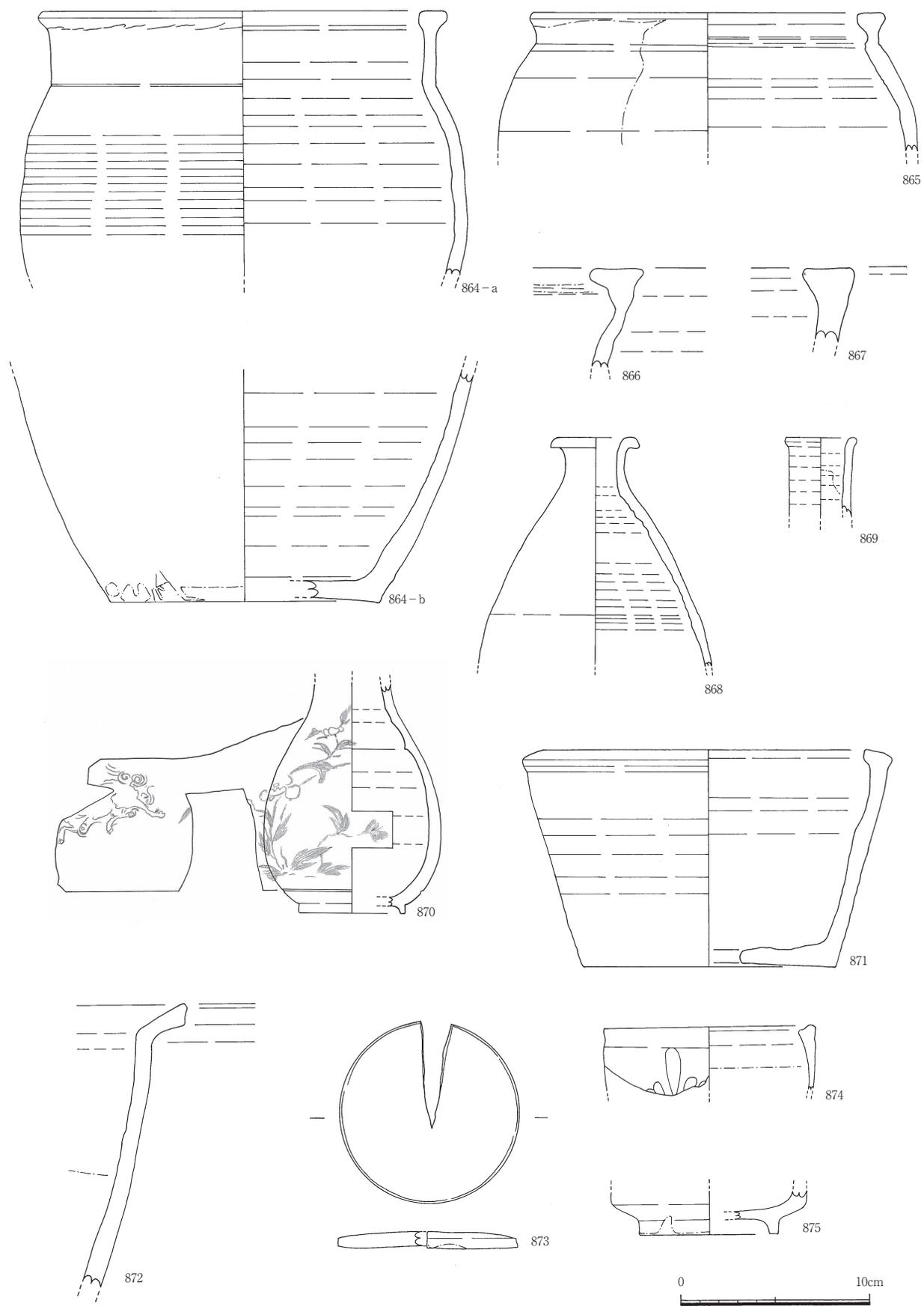


Fig.89 SK25出土遺物実測図 (6)

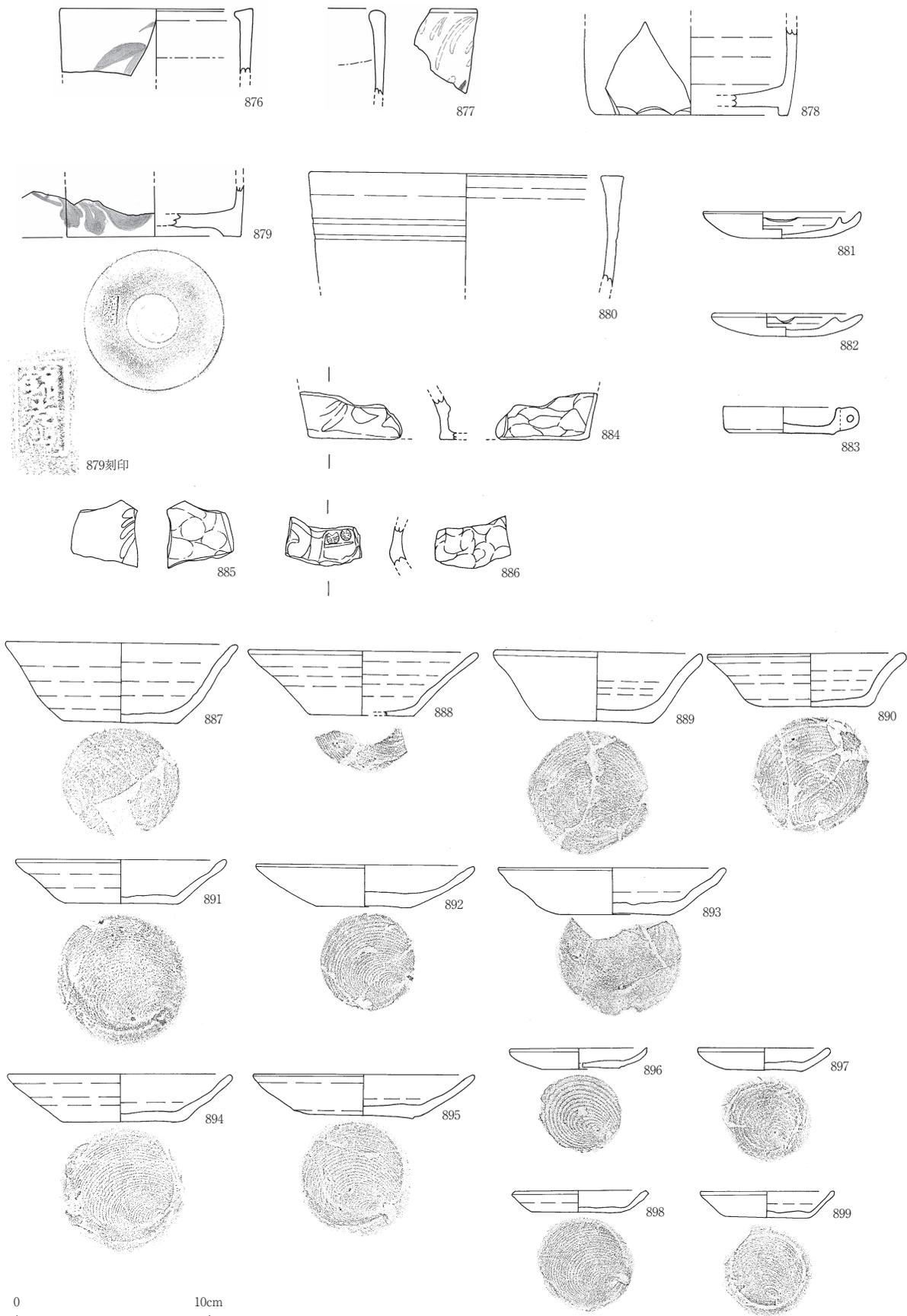


Fig.90 SK25出土遺物実測図 (7)

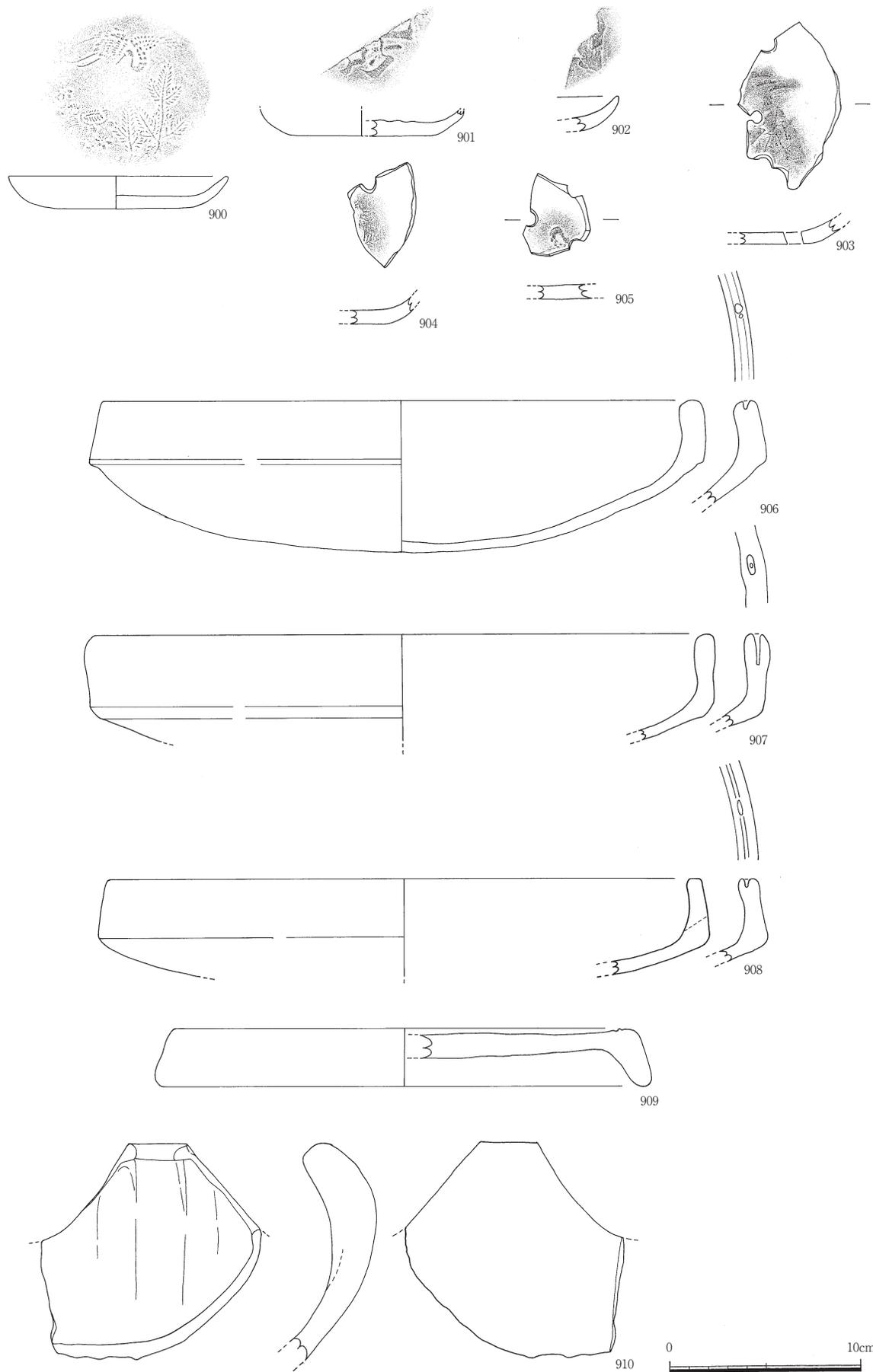


Fig.91 SK25出土遺物実測図 (8)

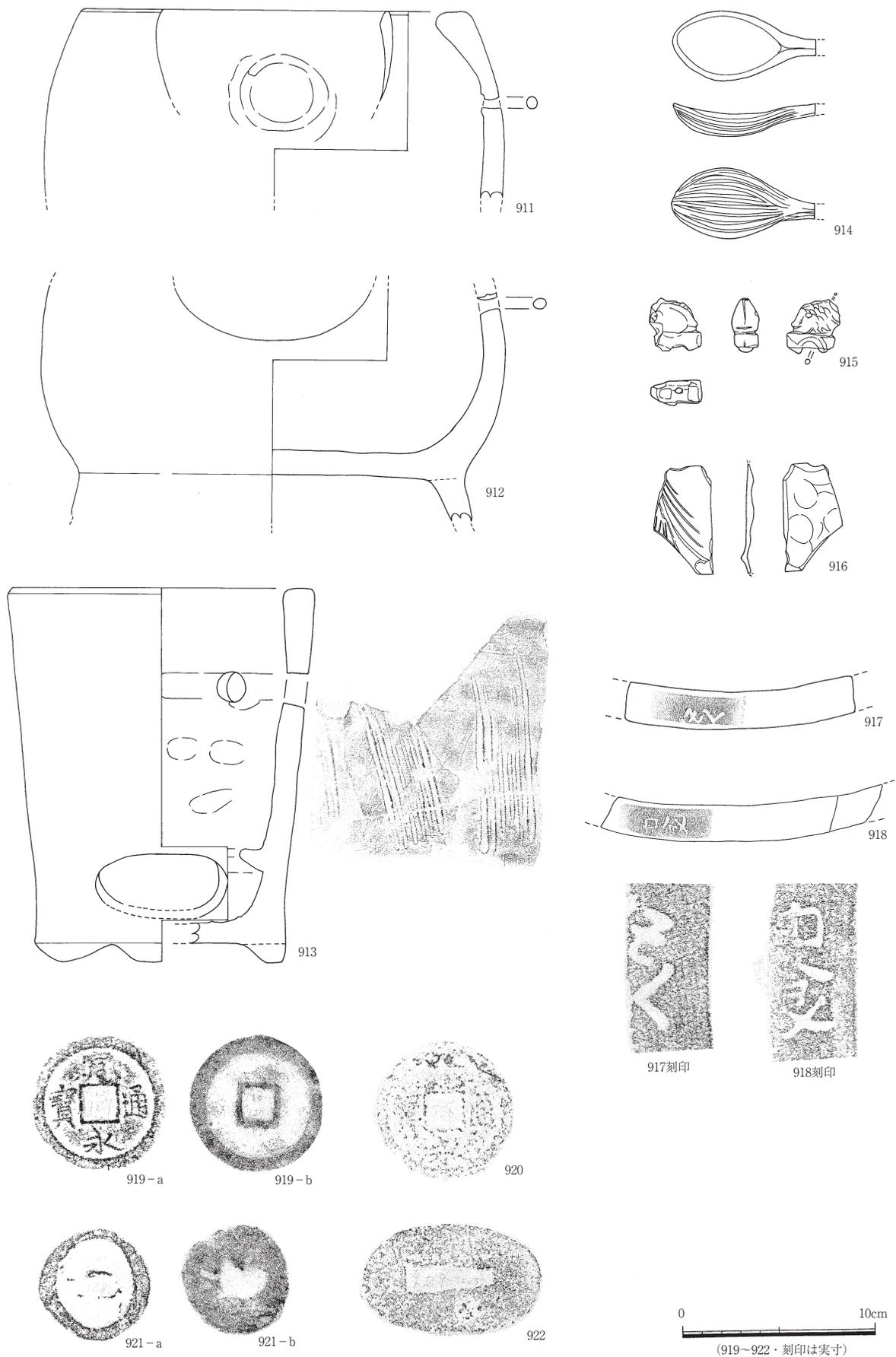


Fig.92 SK25出土遺物実測図 (9)

887～909・911～916は土師質土器。910は瓦質土器である。887～890は杯。891～899は小皿で、891～895は口径10～11cm台のタイプ、896～899は口径6～7cm台のタイプである。このうち891は口縁部にタール状の焦げ、897と899は灯芯油痕を認める。900～905は尾戸窯の白土器小皿で、灰白色の胎土をもち、内面に型押しによる陽刻文様を施す。901は寿字文、902・903は高砂文、900・904・905は松竹梅鶴亀文を施すものである。このうち、903～905は数箇所焼成後の円孔を穿ち、さなとして転用された可能性がある。

906～908は関西産の焙烙で、口縁端部に貫通しない円孔を認める。909は火消壺の蓋である。910～913は焜炉。910は瓦質土器の焜炉で、口縁部に半円形の切り込みをもつ。911・912は土師質土器の丸形焜炉。913は筒形の焜炉で、体部前方下位に楕円形の窓をもつ。

914は施釉土器の匙。ヘラ彫りで縞状の文様を施し、薄緑の低下度釉を施す。915・916は土師質土器の人形。915は鯛。型押し成形左右貼り合わせで、中実。底部から斜め上方へ穿孔を穿つ。916は人物か。型押し成形貼り合わせで、中空。

917・918は平瓦。917は「とく」銘印をもち、徳王子（高知県香南市徳王子）の製品である。918は「和食」銘印をもち、和食（高知県安芸郡芸西村和食）の製品である。

919・920は寛永通宝。920は銅銭と鉄銭が6枚重なり溶着して出土したものである。921は雁首銭で、煙管の雁首を転用している。922は用途不明の銅製品である。

SK25では17世紀後半から18世紀末～19世紀初頭までの遺物が含まれるが肥前産の染付端反形碗、薄手酒杯、瀬戸・美濃産染付磁器は確認できていない。

SK25は18世紀末～19世紀初頭に比定される。

SK26 (Fig.93)

調査区東部に位置する。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸1.48m、短軸0.94m、深さ14cmを測る。断面形態は皿状で、埋土は灰黄褐色シルトである。切り合い関係では18世紀末のSK25を切り、近代のSK27に切られる。

出土遺物は、磁器（中碗1・皿1・紅皿1）、陶器（碗1・甕1・不明1）、土器（小皿1）、及び瓦

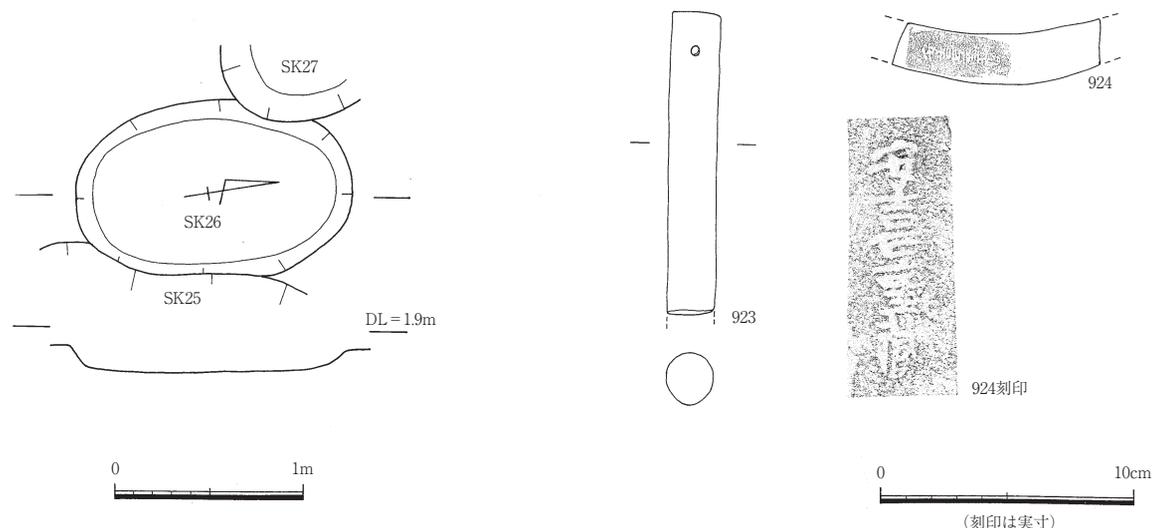


Fig.93 SK26平面図・エレベーション図・出土遺物実測図

片少量である。

図示したものは、923・924である。923は鉄釉の陶器で、把手部分とみられる。中実で、先端部分に貫通する円孔をもつ。924は平瓦。「安喜重蔵」銘印をもち安芸産（高知県安芸市）である。図示したものの他にも、肥前産の白磁紅皿、灰釉碗、尾戸窯の鉄釉甕等が出土している。

SK26は19世紀に比定される。

SK28 (Fig.94・95)

調査区東部に位置する。平面形は不整形で、検出規模は長軸3.72m、短軸2.96m、深さ40～50cmを測る。床面は南部側が低く、壁は斜め上方に立ち上がる。埋土はにぶい黄褐色シルト地で、埋土中に炭化物を多く含んでいる。切り合い関係では、18世紀のSK34と18世紀中葉のSK52、17世紀前半のSK92、及びP128を切っている。

出土遺物は、磁器（大碗1・中碗15・小碗1・小杯2・小皿1・中皿3・鉢2・猪口6・瓶1・紅皿1・水滴1・香炉又は火入れ2）、五彩（皿1）、陶器（中碗10・中皿2・小皿5・鉢5・捏鉢1・播鉢1・壺1・甕2・蓋物蓋1・香炉又は火入れ1）、土器（杯3・小皿27・白土器小皿2）で、17世紀初頭から18世紀前半までの遺物が含まれる。

図示したものは、925～943である。925～929は磁器。何れも肥前産である。925は雨降り文の丸

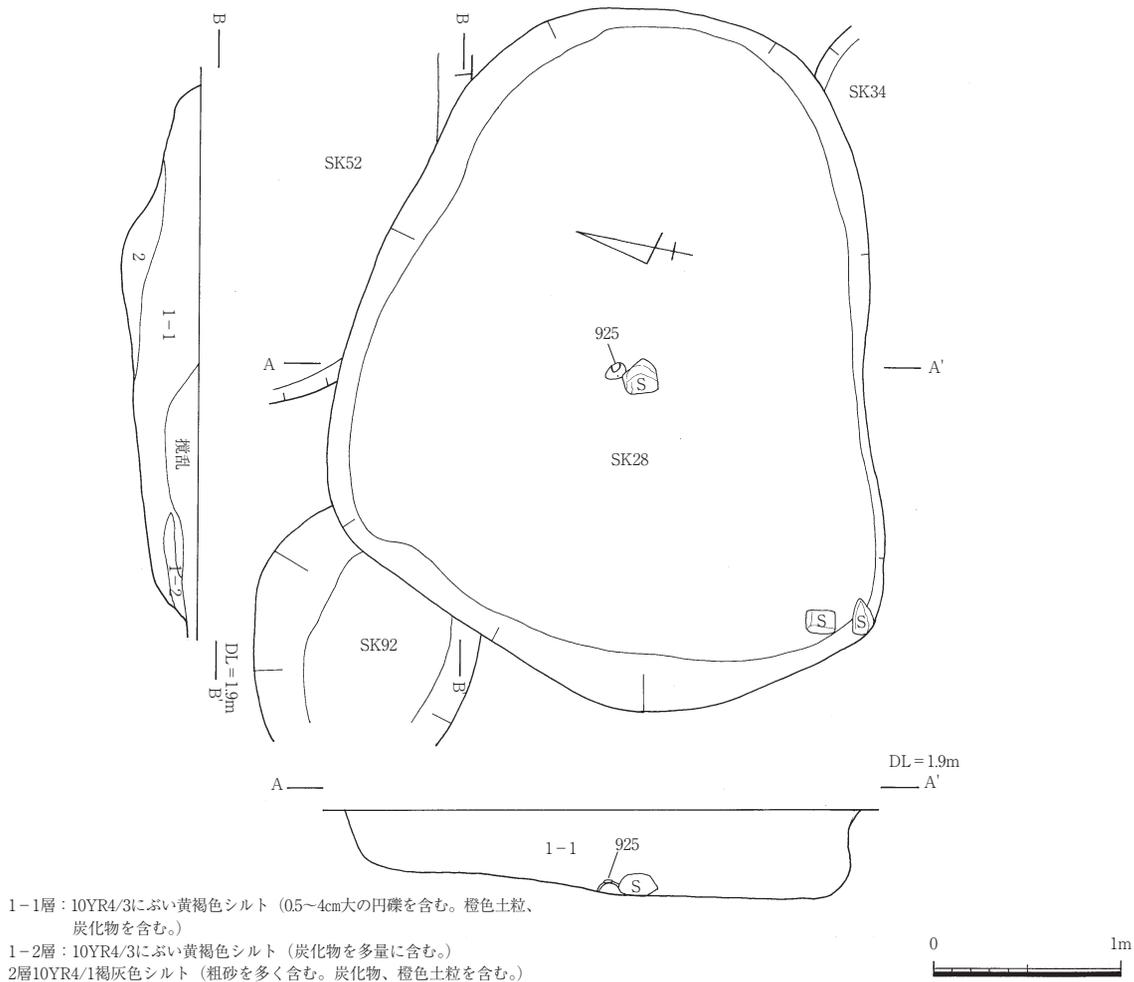


Fig.94 SK28平面図・セクション図・遺物出土状況図

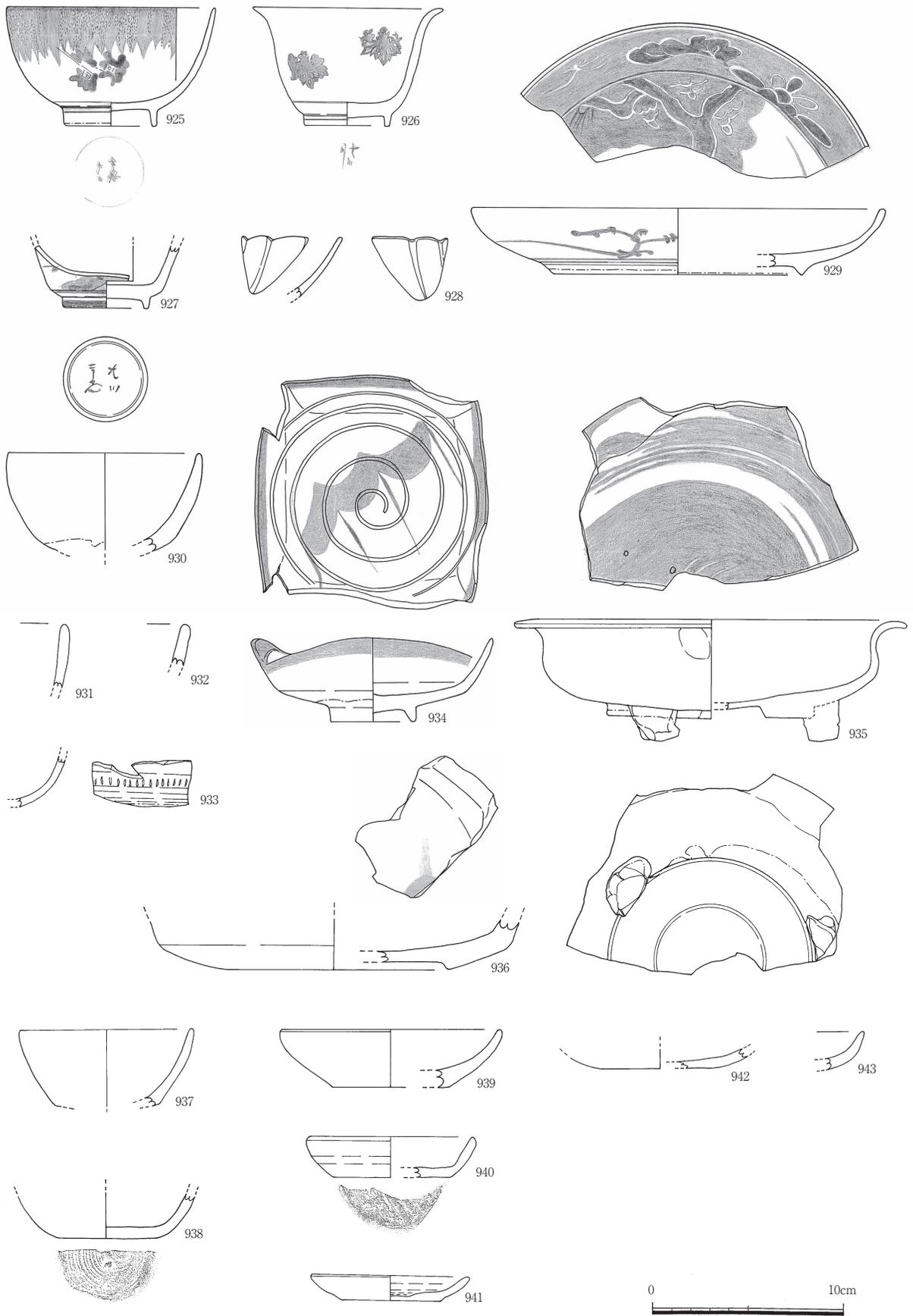


Fig.95 SK28出土遺物実測図

碗で、高台内に「大明年製」銘をもつ。926・927は猪口で、高台内に「大明年製」銘をもつ。926はコンニャク印判による桐文を施す。928は白磁の菊花形鉢である。929は丸形の中皿で、内面に墨弾きによる文様を描く。

930～936は陶器。930は唐津系灰釉陶器の碗。931は尾戸窯の灰釉碗。二次被熱によって釉は変質している。932は志野焼。933は尾戸窯の灰釉碗で、外面下位にヘラ彫りによる列点文を施す。934は絵唐津の変形皿。935は白化粧土刷毛目の鉢で、口縁部の下側を部分的にユビオサエシ変形させる。蛇の目高台で、外底に手捏ねによる三足を貼付する。936は志野焼の向付。長石釉を施し、内面に錆絵を描く。碁笥底で、底部脇に団子状の胎土目痕が残る。

937～943は土師質土器。937・938は杯。939～941は小皿で、939は口径11cmのもの、940・941は口径8cm台のものである。このうち、940は口縁部に灯芯油痕を認める。942・943は尾戸窯の白土器小皿で灰白色の胎土をもつ。942は無文である。図示したもの以外にも、中国漳州窯系の五彩皿細片が出土している。

SK28は18世紀前半に比定される。

SK29 (Fig.96・98)

調査区東部に位置する。平面形は隅丸方形で、検出規模は長軸1.94m、短軸1.78m、深さ20cmを測る。断面形態は逆台形で、平坦な床面から壁が斜め上方に立ち上がる。埋土は灰黄褐色シルトで、床面から径20cm前後のチャート角礫4個がまとまって出土している。切り合い関係では、ピットと19世紀中葉世紀のSK89を切っている。

出土遺物は、磁器（中碗3・小碗1・小皿2）、陶器（中碗4・鉢1・播鉢2・柄杓1）、土器（小皿1）である。

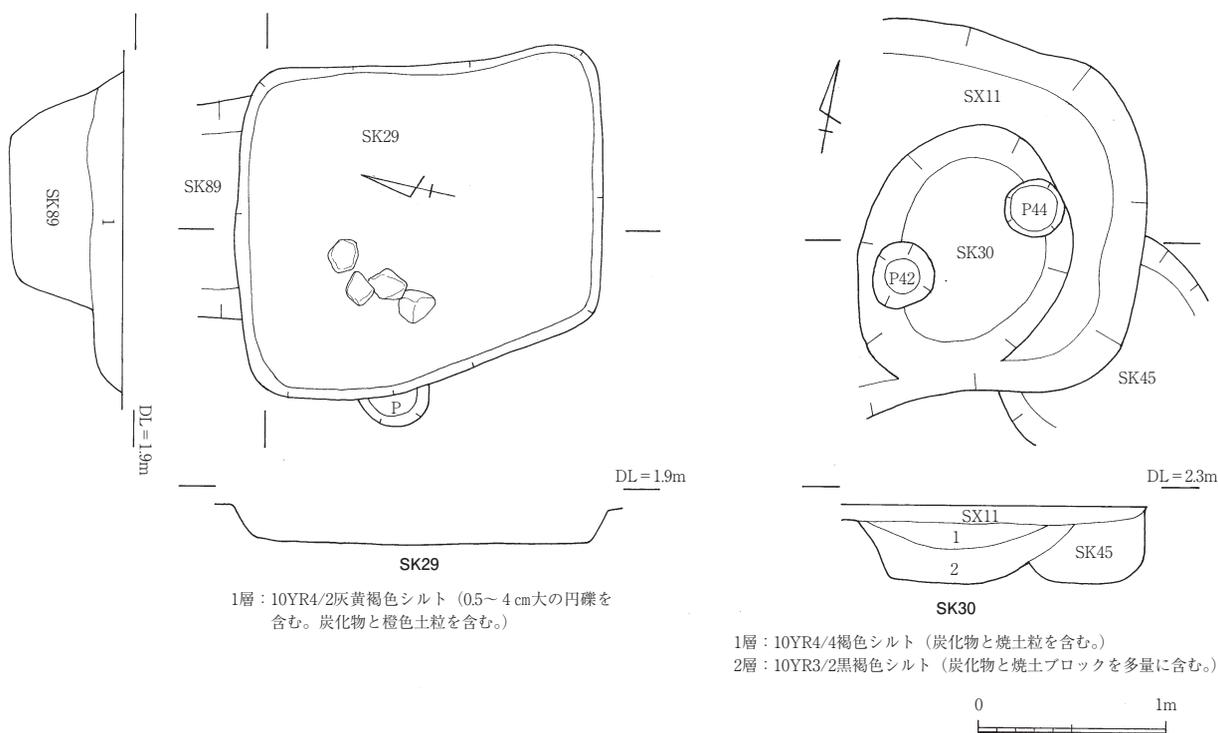


Fig.96 SK29・30平面図・セクション図・エレベーション図

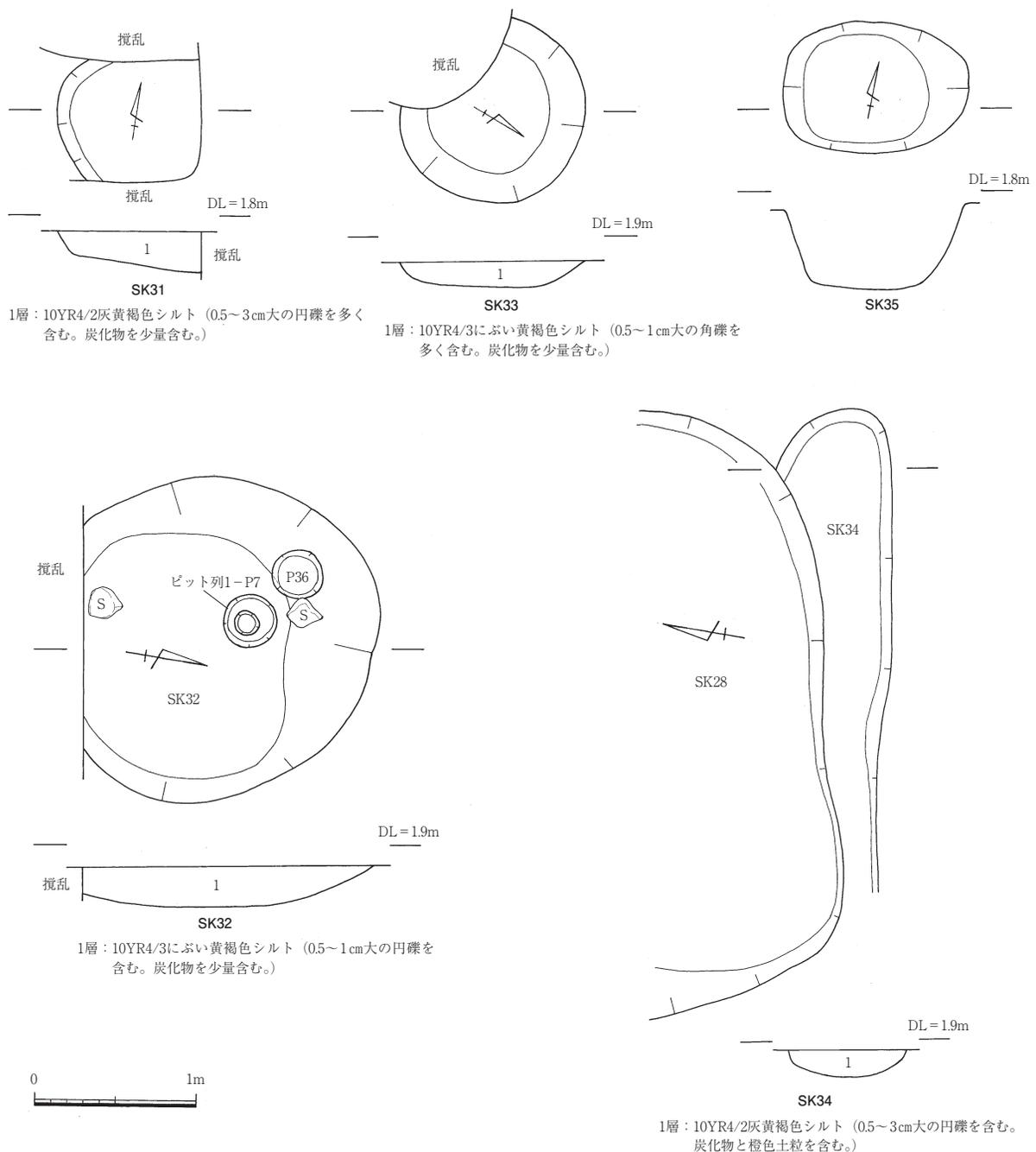


Fig.97 SK31～35平面図・セクション図・エレベーション図

図示したものは、944～946である。944は腰張形の陶器碗で、灰色の胎土に白化粧土を施し、透明の釉を重ねる。外面に呉須で山水文を描く。945は鉄釉の柄杓で、高台内に墨書を認める。946は土師質土器小皿で、口縁部に灯芯油痕が残る。図示したものの他にも、肥前産の染付広東形碗、瀬戸・美濃産の太白手広東形碗、京都系の灰釉碗、尾戸窯の灰釉碗等が出土している。

SK29は19世紀中葉に比定される。

SK30 (Fig.96・98)

調査区南東部に位置し、焼土を多量に含む落ち込み状の遺構SX11の下面で検出された。平面形は楕円形で、検出規模は長軸1.42m、短軸1.12m、深さ32cmを測る。断面形態は逆台形で、壁は斜

め上方に立ち上がる。埋土は褐色シルトと黒褐色シルトであり、埋土中に炭化物と多量の焼土ブロックを含んでいる。切り合い関係では18世紀前葉のSK45と時期不明のP42・44を切っている。また、SK30の上面には、焼土を多量に含む落ち込み状の遺構SX11が広がっており、埋土の共通性からみて両者が同時期に機能したものと考えられる。

出土遺物は、磁器（中碗1・小杯1・鉢1・蓋物1・蓋物蓋1・合子1）、陶器（小皿1・灯明皿1）、石製品（硯1）、鉄製品（釘1）で、17世紀から18世紀前葉までの遺物が含まれる。

図示したものは、947～951である。947は肥前産の染付蓋付の鉢。948は白磁の合子蓋で、片切彫りによる陽刻文様を施す。949は灰釉の変形小皿、950は備前の焼締めの灯明受皿である。951

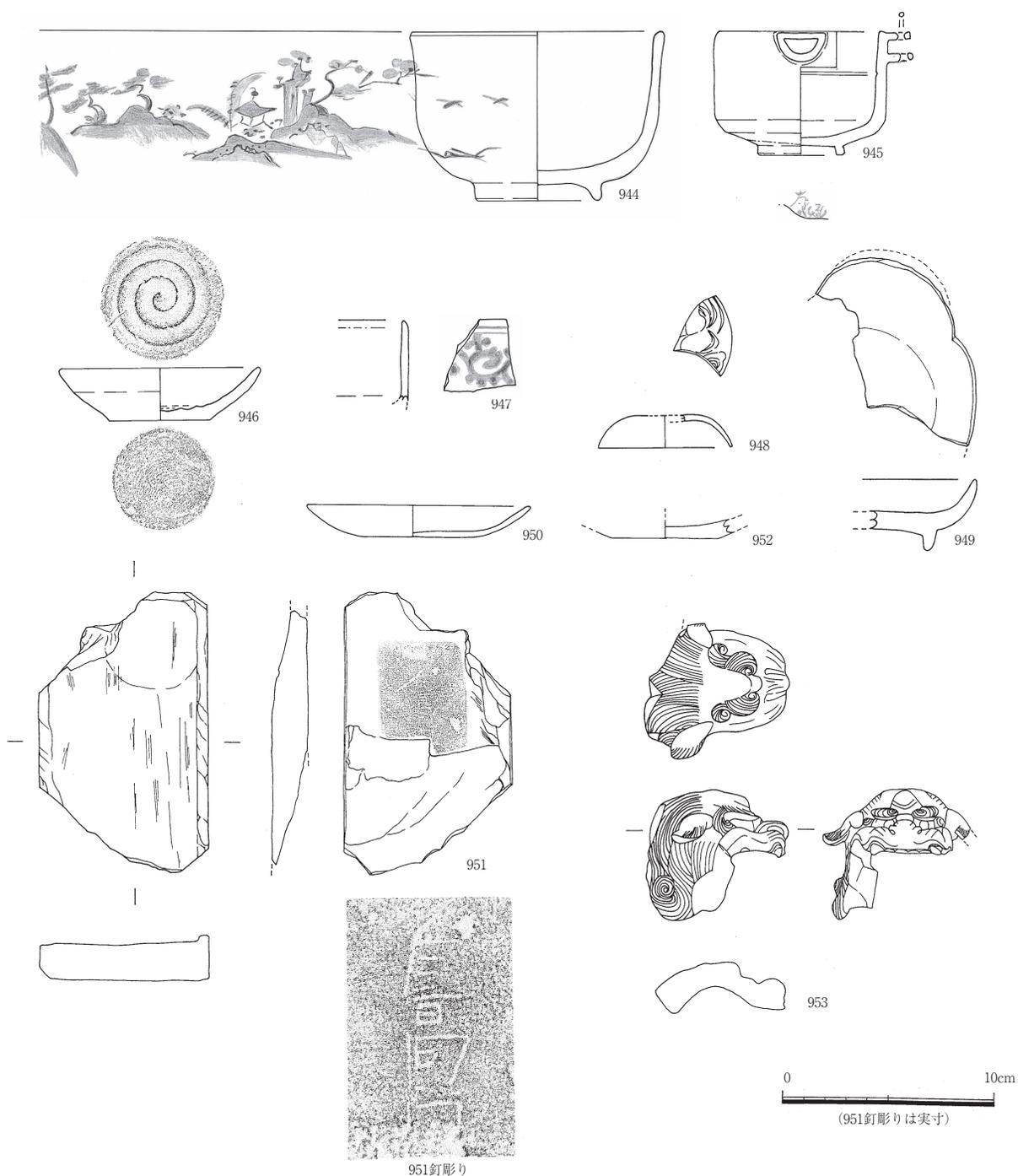


Fig.98 SK29～32出土遺物実測図 (SK29：944～946、SK30：947～951、SK31：952、SK32：953)

は凝灰岩製の硯で、裏面に釘彫りを認める。

図示したものの他にも、肥前産の染付網目文丸碗、染付壺の体部片、備前焼甕と瓶の体部片等が出土しており、出土遺物中には被熱した染付碗が含まれている。SK30は18世紀前葉に比定され、火災後の処理に伴う廃棄土坑と考えられる。

SK31 (Fig.97・98)

調査区南東部に位置する。西部以外の三方が攪乱を受けるため形態、規模とも不明であるが、東西の残存長0.90m、南北の残存長0.74m、深さ24cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は、唐津系灰釉陶器の蓋1点、土師質土器杯1点である。図示したものは、土師質土器小皿(952)である。

出土遺物が僅少で年代の詳細は不明であるが、SK31は17世紀に比定される。

SK32 (Fig.97・98)

調査区南東部に位置する。平面形は円形を呈し、検出規模は東西長2.0m、南北の残存長1.8m、深さ26cmを測る。断面形態は皿状で、埋土はにぶい黄褐色シルトである。切り合い関係では、P36とピット列1のP7を切っている。

出土遺物は、白磁小碗1点、陶器の中碗1点と香炉又は置物1点である。

図示したものは、953である。953は獅子形の香炉又は置物。細部はハケとヘラ彫りで作り出しており、目と背の部分には円孔を穿つ。外面に鉄釉を施す。図示したものの他にも、肥前産の白磁小碗、尾戸窯の灰釉中碗、その他、染付大碗の体部片、青磁細片、土師質土器細片等が出土している。

遺物が僅少で年代の詳細は不明であるが、SK32は17～18世紀に比定される。

SK33 (Fig.97)

調査区南東部に位置する。南部側が攪乱を受けるが、東西長1.16m、南北の残存長1.14m、深さ15cmの円形土坑とみられる。断面形態は皿状で、埋土はにぶい黄褐色シルトである。出土遺物は、京都系灰釉碗の底部1点である。

遺物が僅少で年代の詳細は不明であるが、SK33は17～18世紀に比定される。

SK34 (Fig.97)

調査区東部に位置する。北側がSK28に切られ、また、西側の立ち上がり部分が不明瞭であったため、全体の規模・形態が不明であるが、南北の残存長0.74m、東西の確認長3.00m、深さ16cmの長楕円形の遺構とみられる。埋土は灰黄褐色シルトである。切り合い関係では18世紀前半のSK28とP31に切られる。

出土遺物は、磁器(小皿1・小杯1)、陶器(碗1)、土器(小皿1)である。この他にも、肥前産の染付皿、肥前産の打刷毛目を施した陶器碗の体部片等が出土している。

出土遺物やSK28との切り合い関係からみて、SK34は17世紀後半～18世紀前半に比定される。

SK35 (Fig.97・99)

調査区東部に位置する。平面形は楕円形で、検出規模は長軸1.16m、短軸0.80m、深さ50cmを測る。断面形態は逆台形で、平坦な床から壁が斜め上方に立ち上がる。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は、磁器(中碗4・小碗4・小杯2・小皿五寸皿7・鉢1・猪口3・蓋物2・紅皿1・水滴

1)、陶器（中碗13・小杯1・中皿2・捏鉢1・瓶1・壺1・甕2・火鉢1・不明1）、土器（小皿5・白土器1・焙烙1・火鉢又は焜炉1・火消壺1）、窯道具（匣鉢1）である。

図示したものは、954～966である。954・955は磁器。954は肥前産の染付丸碗で、口鏝。外面に

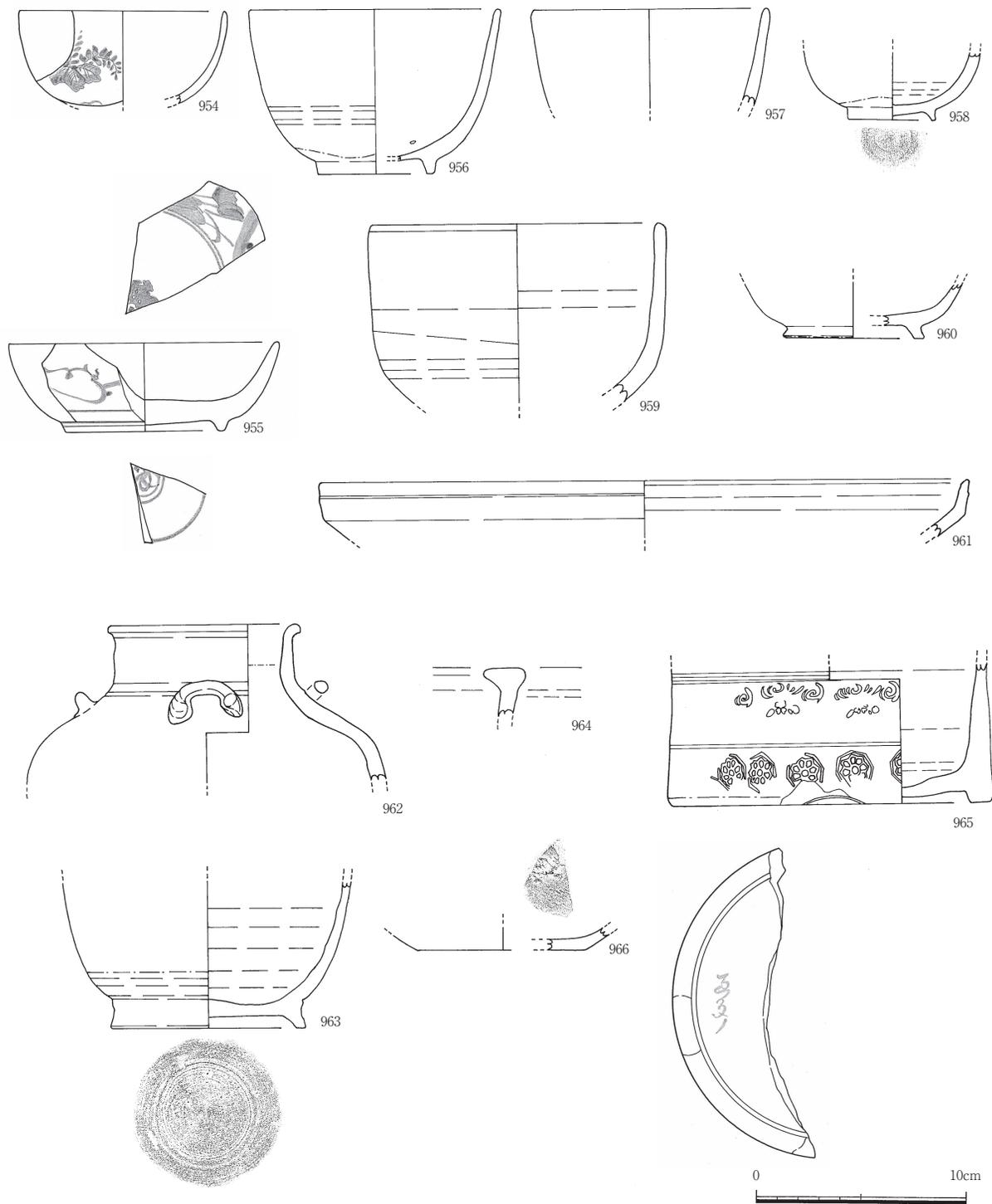


Fig.99 SK35出土遺物実測図

は桐文を描く。955は肥前波佐見産の染付丸形小皿で、高台内渦「福」。見込みにコンニャク印判による五弁花文を施す。956～965は陶器。956～960は尾戸窯の灰釉碗。961は尾戸窯の灰釉皿か。962は信楽産の腰白茶壺で、肩部に四耳を貼付し、灰オリーブ色の釉を流し掛けする。963は瀬戸の灰釉瓶か。964は鉄釉甕である。965は火鉢か。薄緑色の釉を施し、外面に印花文と唐草文を巡らす。966は尾戸窯の白土器小皿で、内面に陽刻による松竹梅鶴亀文をもつ。

SK35は18世紀後半に比定される。

SK36 (Fig.100～102)

調査区南部に位置する。平面形は長方形で、検出規模は長軸1.66m、短軸0.96m、深さ34cmを測る。断面形態は逆台形で、平坦な床面から壁が斜め上方に立ち上がる。埋土はにぶい黄褐色シルトと灰黄褐色シルトである。切り合い関係では18世紀前半～中葉のSK38を切っている。

出土遺物は、磁器（中碗16・小碗4・小杯2・小皿2・鉢3・猪口3・瓶4・蓋物蓋1・紅皿1・水滴1）、陶器（中碗3・小碗5・小杯1・小皿1・五寸皿1・中皿1・捏鉢1・搦鉢1・鍋1・行平1・土瓶1・瓶2・甕2・柄杓1・灯明受皿3・ミニチュア1）、土器（小皿8・白土器小皿1・焙烙4・焜炉1・竈1）、及び瓦片で、19世紀前半までの遺物が含まれる。

図示したものは、967～983である。967～972は磁器。967・968は関西系、その他は肥前産である。967は筒丸形の小板で、外面に丸文を描く。968は草花文の端反形小碗。969は色絵の小皿で、薄緑、赤、黒の上絵付で龍を描いている。970は蛇の目凹形高台の鉢で、内面に鶴と芭蕉葉を描く。971は灰吹き。口縁端部に敲打痕が残る。972は辣蕪形の小板である。

973～978は陶器。973は尾戸窯又は京都系の灰釉中碗で、錆絵を描く。974は京都・信楽系の灰釉碗で、呉須と鉄錆で注連縄文を描くものである。975は香炉又は火もらいか。褐色の鉄釉を施し、前方に円形の窓をもつ。尾戸窯跡から同様の製品が出土している。976は尾戸窯又は能茶山窯の鉄

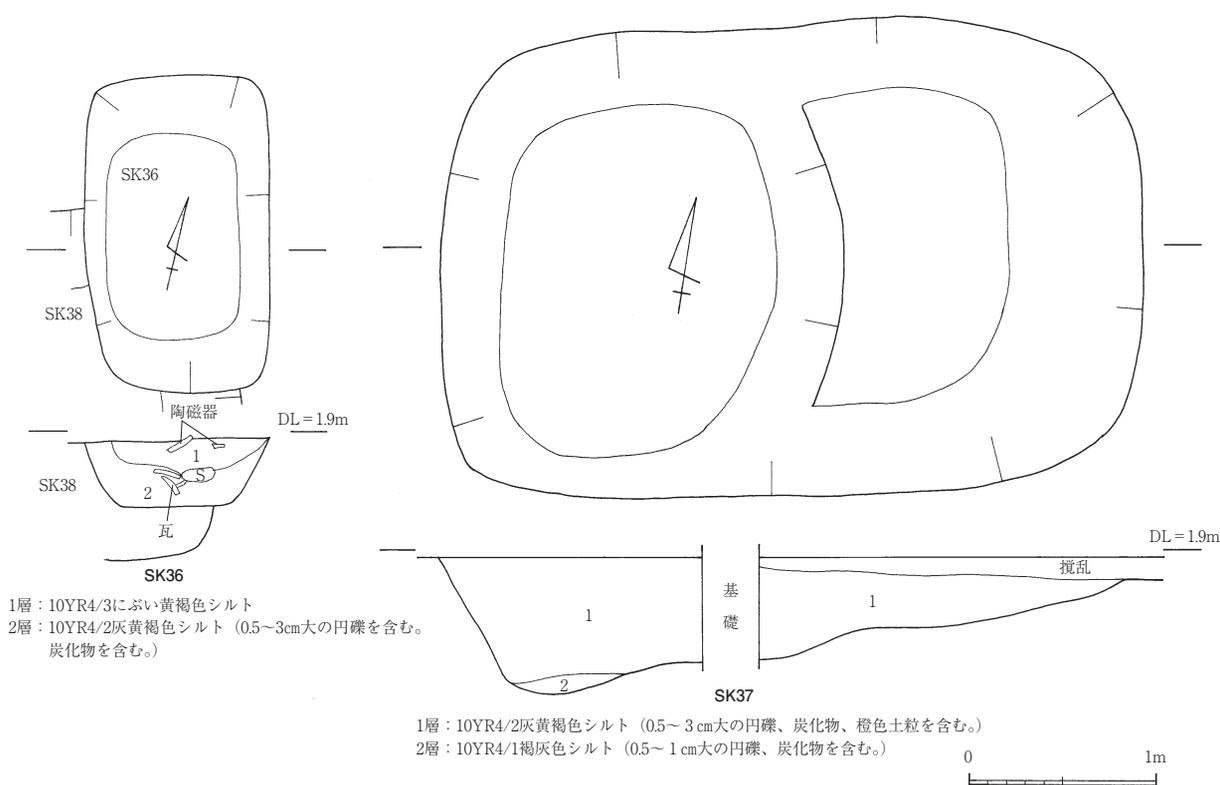


Fig.100 SK36・37平面図・セクション図

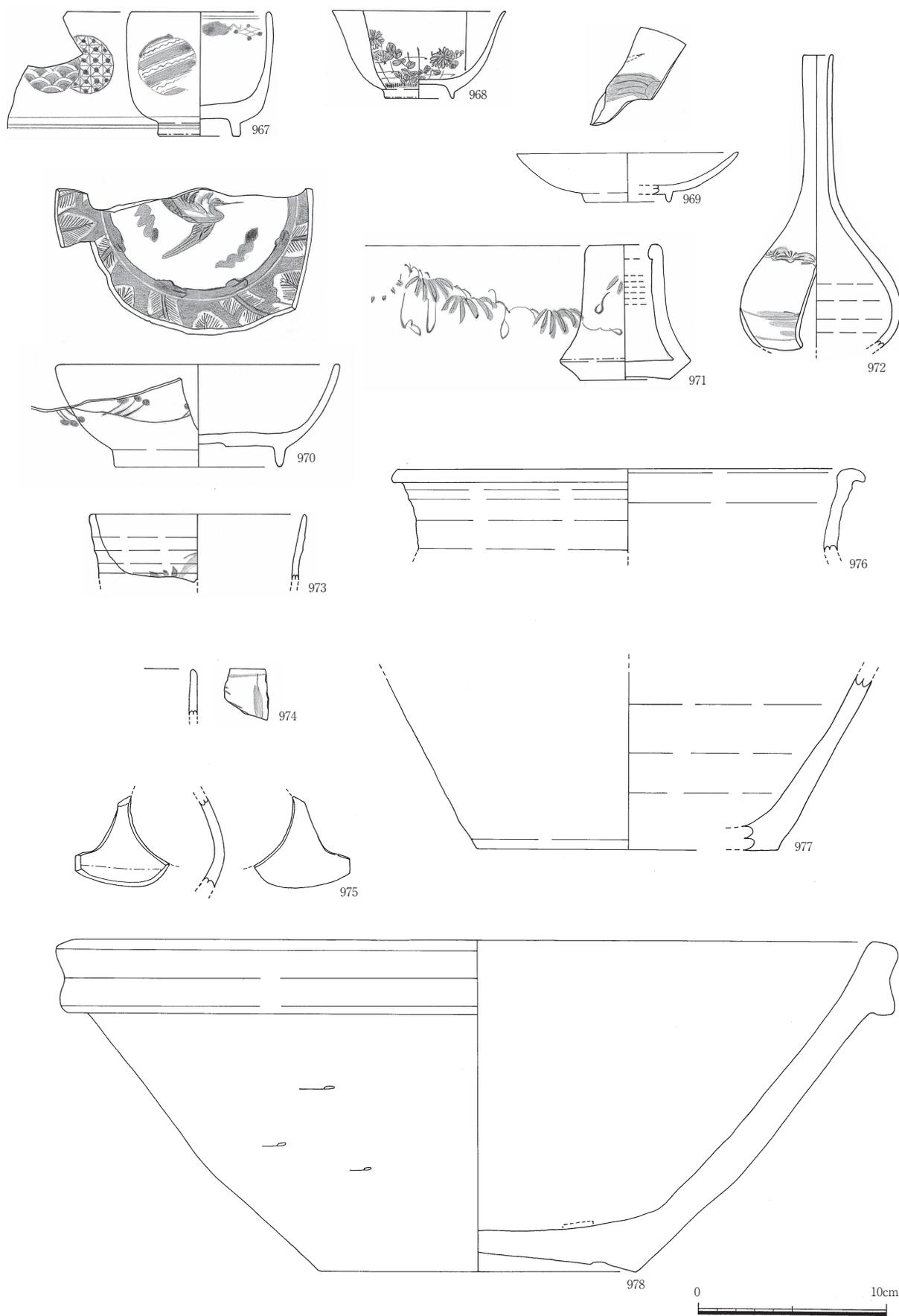


Fig.101 SK36出土遺物実測図 (1)

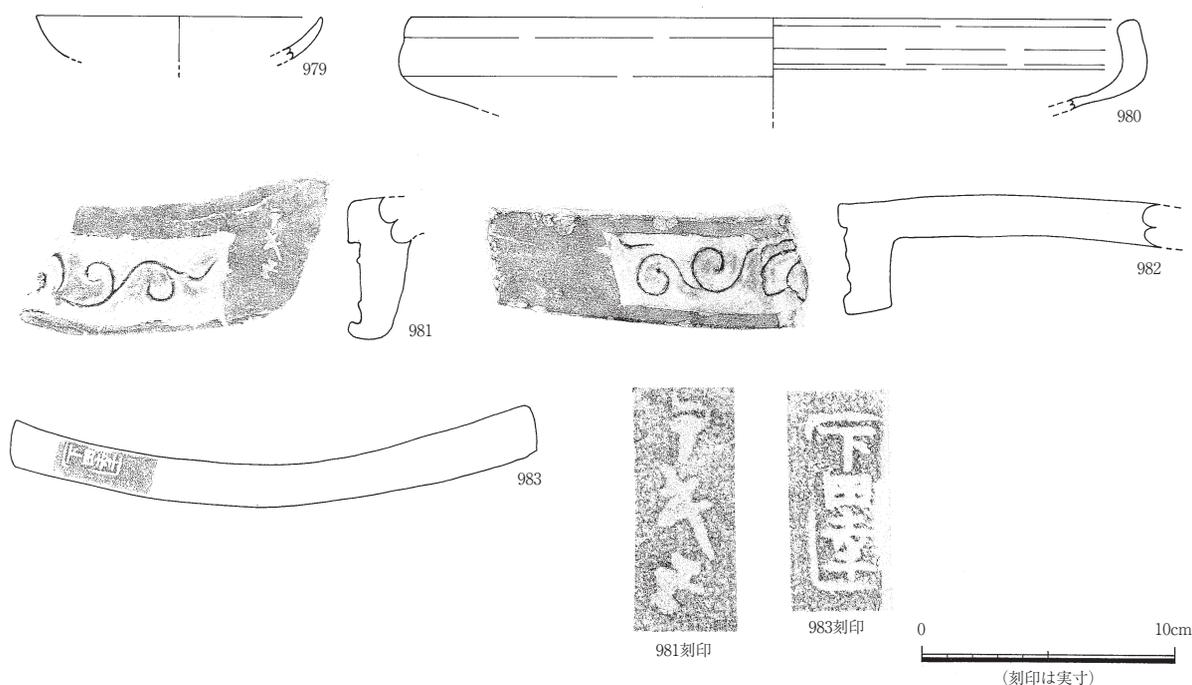


Fig.102 SK36出土遺物実測図 (2)

釉甕。977は丹波焼の甕で、外面は焼締め、内面はオリーブ黒色の釉を施している。978は焼締めの捏鉢である。

979・980は土器。979は施釉土器の小皿で、外面に黒色、内面に赤色の釉を施す。釉は薄くかかり剥離している。980は関西系の焙烙である。

981～983は瓦。981・982は軒平瓦。981は瓦当に「アキ□」銘印をもち、安芸産（高知県安芸市）である。983は角枅内「下田幸」銘印をもつ。

図示したもの他、肥前産の染付薄手酒杯、広東形碗、端反形碗、瀬戸・美濃産の染付碗等が出土しているが、能茶山窯産の磁器は確認できていない。

SK36は19世紀前半に比定される。

SK37 (Fig.100・103～106)

調査区南部に位置する。平面形は隅丸長方形で、検出規模は長軸3.72m、短軸2.50m、深さ72cmを測る。床面は西側に向かって緩やかに落ち込んでいる。埋土は灰黄褐色シルトと褐灰色シルトである。

出土遺物は、磁器（大碗1・中碗69・小碗18・小杯11・小皿五寸皿30・中皿3・鉢7・猪口11・碗蓋5・瓶3・蓋物9・蓋物蓋10・紅皿9・水滴1・ミニチュア1）、陶器（中碗14・小碗8・小杯1・小皿11・中皿4・捏鉢1・片口1・播鉢15・鍋7・行平3・鍋蓋2・爛徳利1・土瓶5・土瓶蓋2・瓶7・水注1・甕8・柄杓1・蓋物1・灯明受皿13・餌鉢1・火鉢3・植木鉢3・水鉢1・不明2）、土器（杯2・小皿13・中皿1・白土器小皿5・焙烙2・焜炉5・竈3・火鉢2・火消壺蓋3・不明1）、鉄製品（釘4）、古銭（寛永通宝1）、及び瓦片で、19世紀を主体に19世紀中葉までの遺物が含まれる。

図示したものは、984～1026である。984～997は磁器で、986・988・989・993は能茶山窯産、その他は肥前産又は肥前系である。984・985は小碗。986は山水文の輪花形小皿で、高台内に「サ」

銘をもつ。988は蛇の目凹形高台の皿又は鉢で、内面に山水文と梅文、高台内角枠内「茶」銘を描いている。989は変形形の山水文小皿で貼付高台。高台内は角枠内「茶」銘である。990は色絵の小皿で、赤・薄緑・茶・黒の上絵付で鶴を描く。991・992は蓋物の蓋。993・994は蓋物の身。993は能茶山窯の蓋物で、外面に宝文、高台内に「サ」銘を描く。995は白磁の水滴。996は白磁の紅皿。997は白磁のミニチュアである。

998～1014は陶器。998は尾戸窯の灰釉碗。999は京都・信楽系の灰釉碗で、鉄錆で注連縄文を描

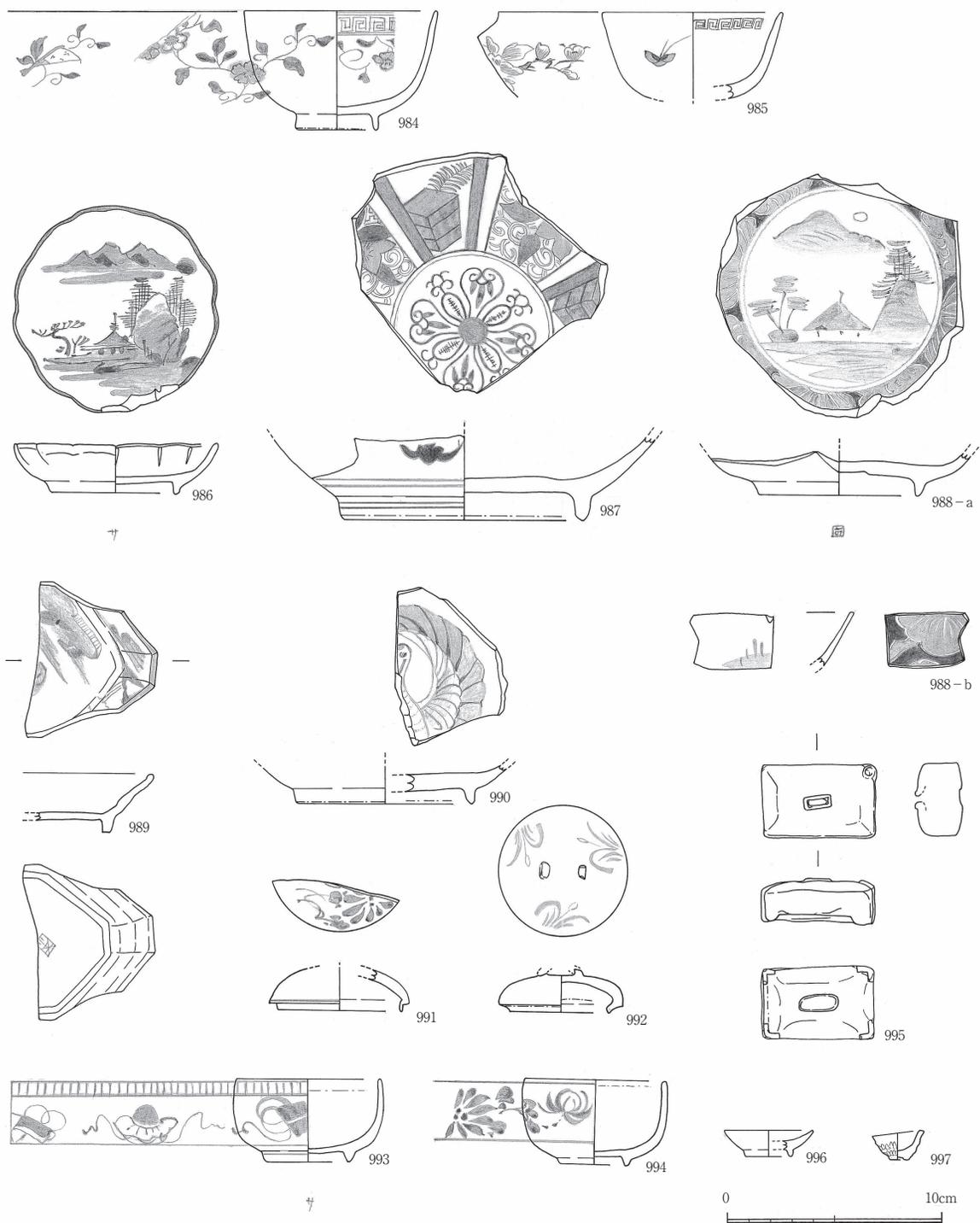


Fig.103 SK37出土遺物実測図 (1)

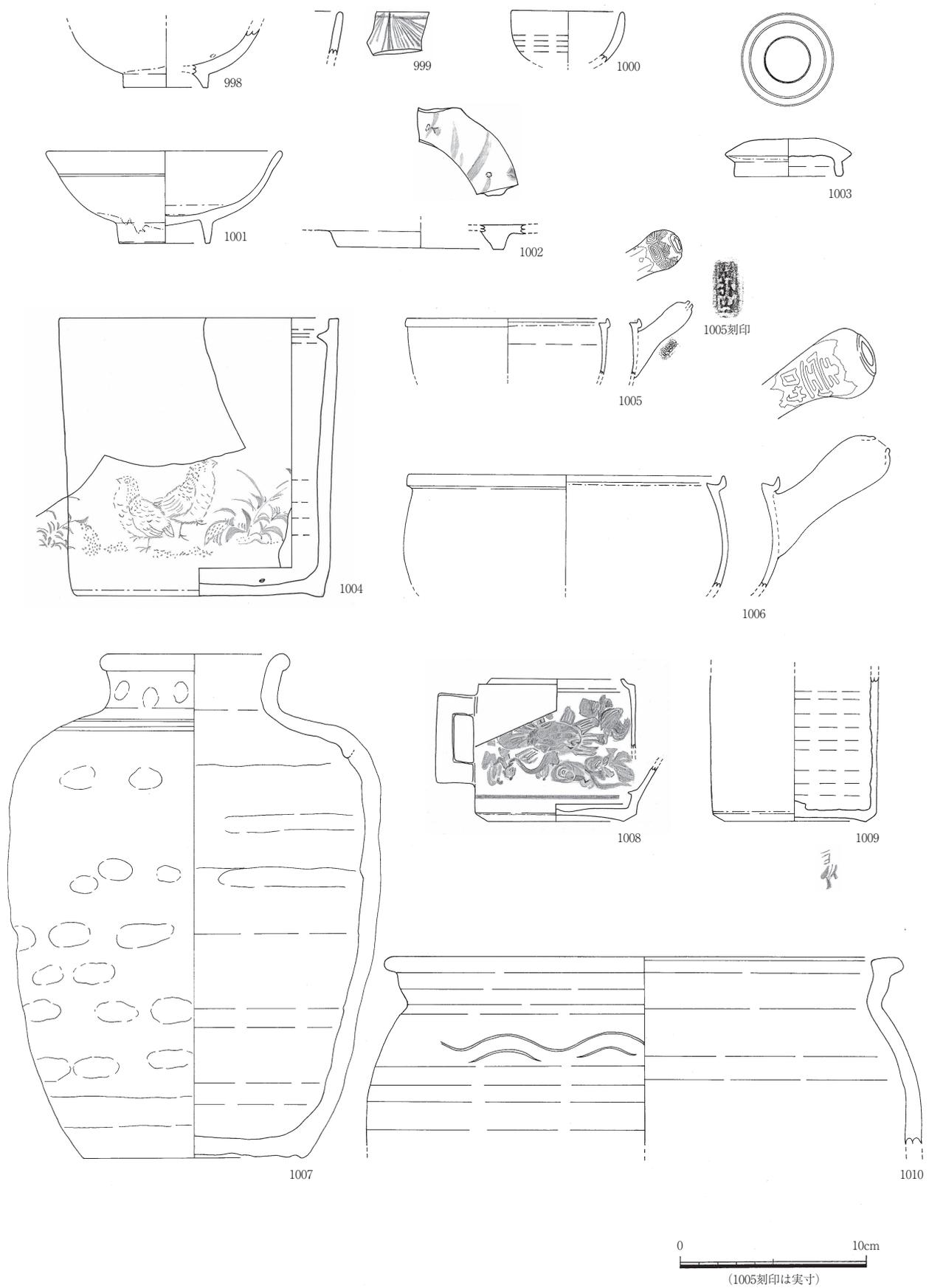


Fig.104 SK37出土遺物実測図 (2)

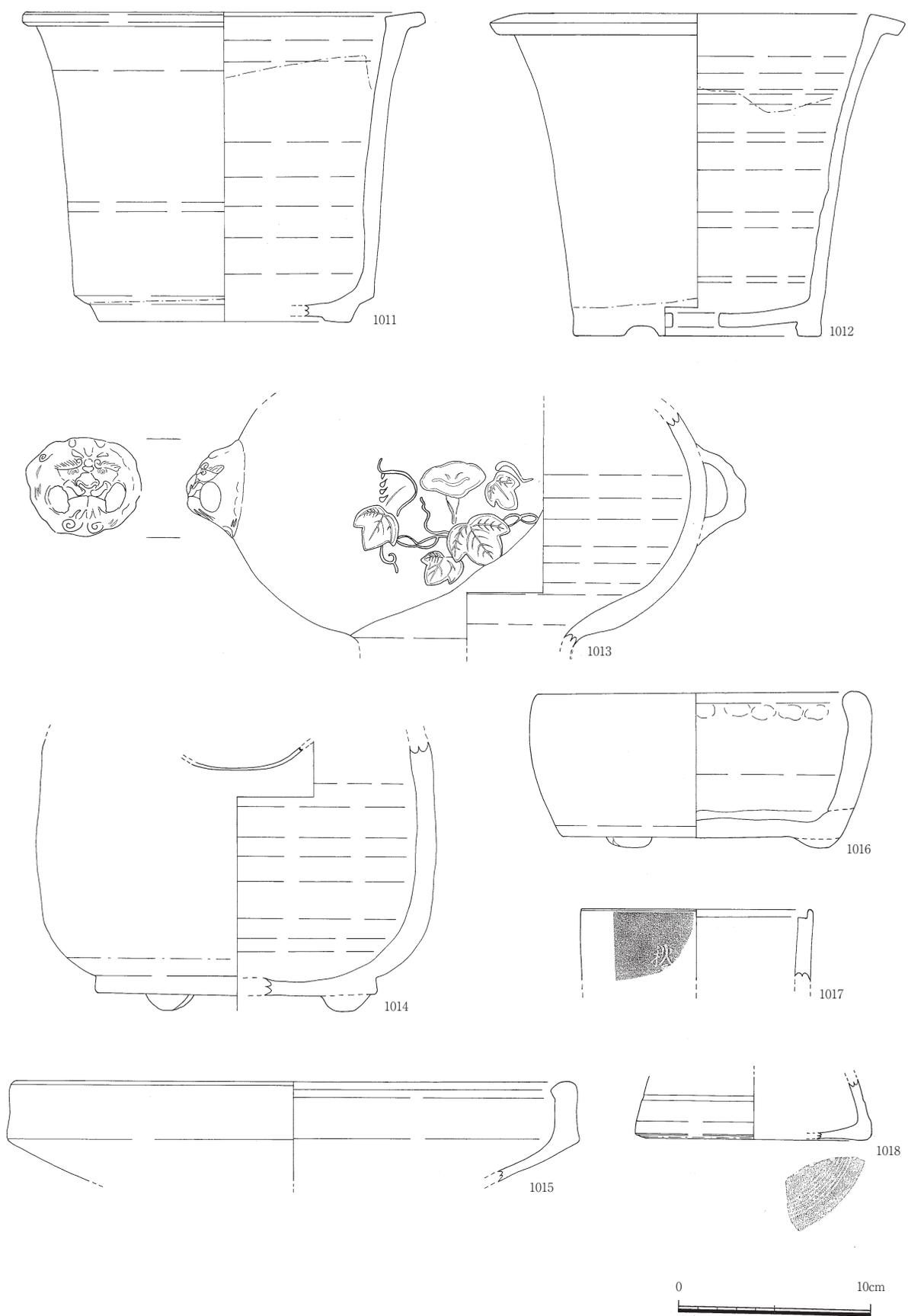


Fig.105 SK37出土遺物実測図 (3)

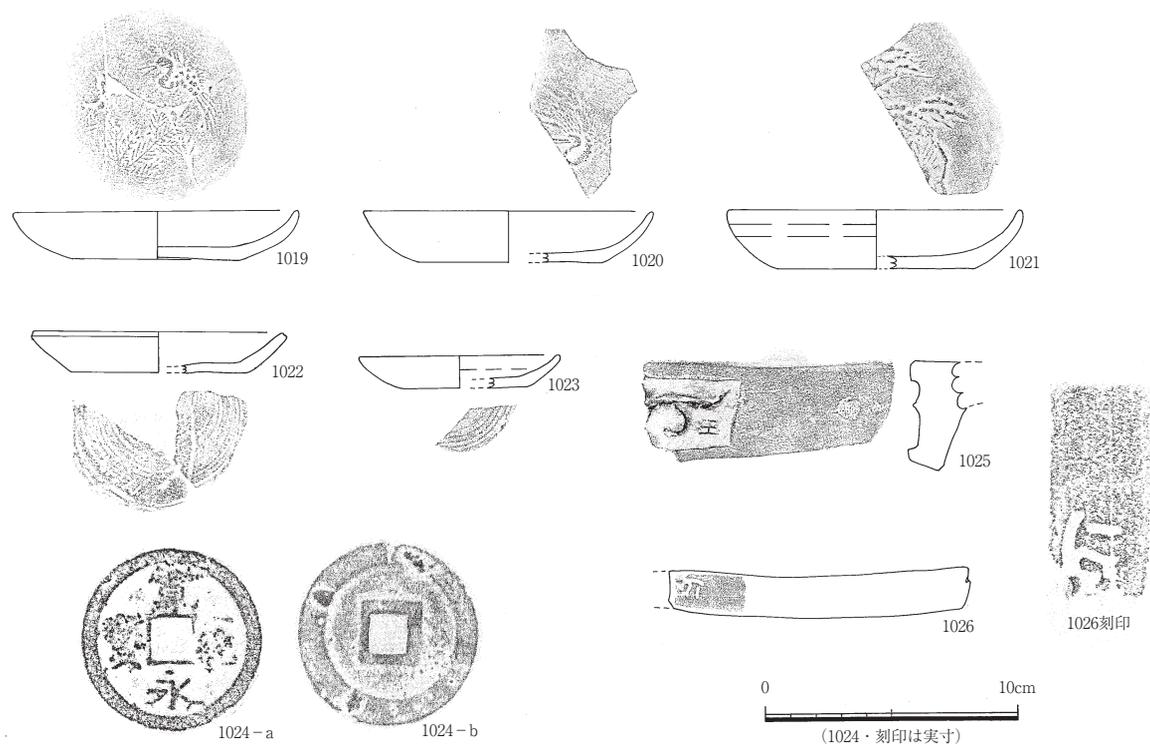


Fig.106 SK37出土遺物実測図 (4)

く。1000は灰釉の小杯で尾戸窯の製品とみられる。1001・1002は皿。1001は能茶山窯の鉄釉小皿で、見込み蛇の目釉剥ぎの後白化粧土を刷毛塗りする。1002は尾戸窯の灰釉皿で内面に錆絵を描いている。1003は灰釉の蓋で、外面に3条の沈線を施し、内面に渦状のロクロ目が残る。尾戸窯の製品とみられる。1004は尾戸窯の灰釉水指で、呉須で鶉と草花を描いている。1005・1006は行平。1005は外面に鉄釉、内面に灰釉を施すもので、把手の下面に銘印をもつ。1006はオリブ灰色の灰釉を施す。1007は信楽産の茶壺である。1008は後手半筒形の水注で、外面全体に白化粧土を施した後、錆絵と灰釉を施す。1009は爛徳利か。外底に墨書を認める。1010は能茶山窯の鉄釉甕である。1011・1012は植木鉢。1012は瀬戸・美濃産の植木鉢で淡黄色の釉を施す。1013は瀬戸・美濃産の火鉢で、外面の双方に朝顔の陽刻文様を施す。外面に緑釉を施し、内面に錆釉を刷毛塗りする。1014は瀬戸・美濃産の灰釉焜炉である。

1015・1019～1023は土師質土器、1016・1017は瓦質土器、1018は施釉土器である。1015は関西系の焜炉。1016は瓦質土器の火鉢である。1017は器種不明で、外面に文字を陰刻する。1018は京都又は京都系の焜炉で竹を表したものか。灰白色の胎土をもち、外面に緑色の低下度釉を施している。1019～1021は尾戸窯の白土器小皿で、1019・1020は陽刻の松竹梅鶴亀文、1021は高砂文を施すものである。1022・1023は土師質土器小皿である。

1025は軒平瓦、1026は平瓦で、側面に銘印をもつ。1024は寛永通宝である。

この他、能茶山窯産の染付広東形碗、瀬戸・美濃産の染付碗、京都系の灰釉柄杓、瀬戸・美濃産の水鉢、灰釉の雲助形土瓶等が出土している。

SK37は19世紀中葉に比定される。

SK38 (Fig.107・108)

調査区南部に位置する。西部側が攪乱を受けるため全体の規模と形態は不明であるが、南北残存長3.52m、東西残存長2.18m、深さ74cmを測る。埋土は褐色シルトである。切り合い関係では19世紀前半のSK36とP61に切られる。

出土遺物は、磁器（中碗3・小碗1・小杯1・小皿1・鉢2・猪口2・蓋物1水滴又は人形1）、陶器（中碗4・小皿3・中皿1・甕1・灯明受皿1）、土器（小皿6・火鉢1）である。

図示したものは、1027～1032である。1027～1029は陶器碗。1027は京焼の色絵碗で、外面に赤・薄緑・黒の上絵付で花木を描く。高台内に「清」銘印をもつ。1028は鉄釉碗。1029は呉器形の灰釉碗で、外面中位にロクロ成形による多段の凹線を巡らせる。灰白色を帯びる半透明の釉を薄く施し、御本が入る。1030は中国景德鎮窯の青花で、段重の蓋とみられる。隅に芯棒を通す突起をもち、外面に花木と花唐草文を描く。17世紀前半の製品である。1031は丹波焼の甕で、輪状の双耳を貼付する。1032は瓦質土器の火鉢である。

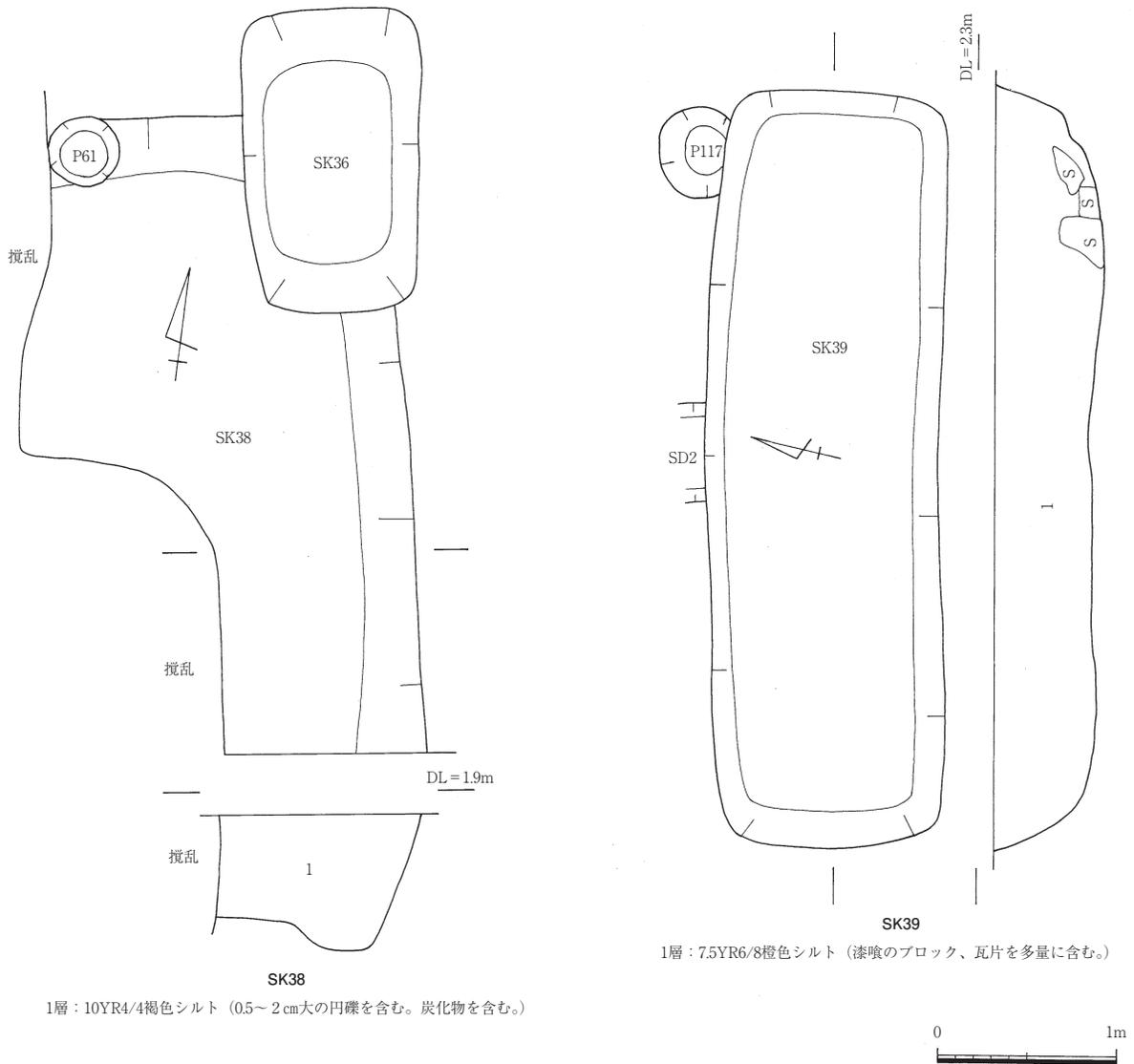


Fig.107 SK38・39平面図・セクション図

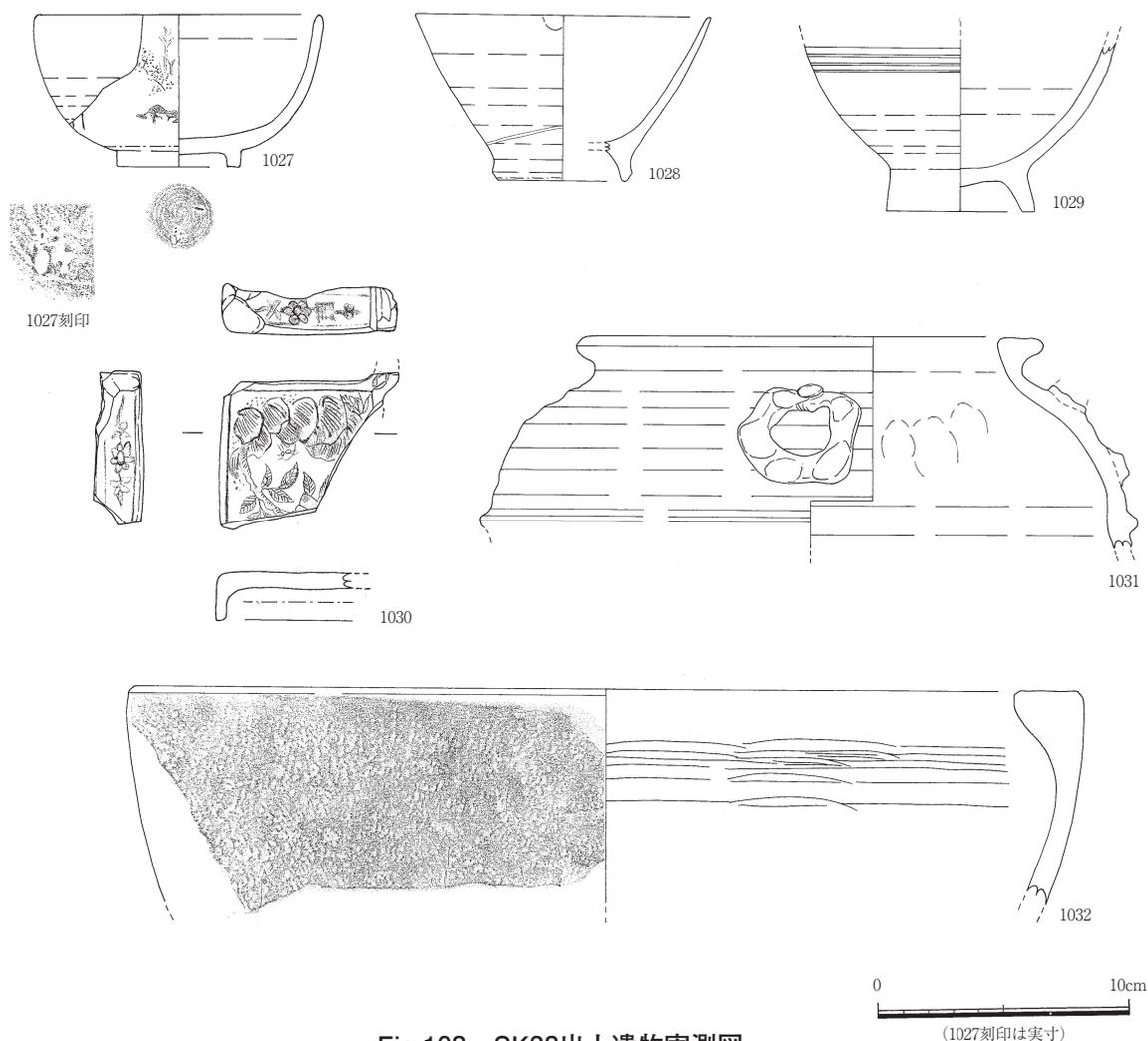


Fig.108 SK38出土遺物実測図

図示したものの他に、初期伊万里皿、肥前産染付雨降り文小碗、肥前内野山窯の銅緑釉小皿等が出土しており、17世紀から18世紀前半までの遺物が含まれている。

SK38は18世紀前半に比定される。

SK39 (Fig.107・109・110)

調査区東部に位置する。平面形は長方形を呈し、検出規模は長軸4.17m、短軸1.30m、深さ60cmを測る。断面形態は皿状で、床面は平坦である。埋土は橙色シルトで、埋土中に多量の瓦片と漆喰のブロックを含んでいる。切り合い関係では、17世紀前葉のSK17と18世紀末～19世紀前葉のSK83、時期不明のSD2、P117を切っている。

出土遺物は、磁器（中碗3・小碗1・小杯1・小皿1・蓋1）、陶器（小皿1・中碗1・捏鉢1・甕1・土瓶1・火鉢1）、土器（小皿1・火鉢1）、及び多量の瓦片で、19世紀中葉までの遺物が含まれる。

図示したものは、棟飾り瓦（1033・1034）、軒丸瓦（1035）、軒平瓦（1036～1040）、平瓦（1041～1048）である。1037・1041・1042は角枠内「ヤス兼」、1038は「ヤス□」、1043は「ヤス三」、1044・1045は角枠内「ヤス貞」銘印をもち、夜須（高知県香南市夜須町）の製品である。1047は角枠内「布源」銘印をもち、布師田産（高知県高知市布師田）。1036は「□□小松勿三郎」、1048は「ア

キ小松卯三郎」銘印をもち、安芸産（高知県安芸市）である。また、生産地不明であるが、1040は「久慶□」、1046は「□□□□」銘印をもつ。

図示したもの以外にも、酸化コバルトによる染付磁器2点、肥前系の広東形碗、能茶山窯の鉄釉甕、行平、灰釉火鉢、瀬戸・美濃産又は関西系の染付小皿、手捏ねによる焼締め土瓶、及び17世紀初頭の絵唐津小皿等が出土している。

SK39は19世紀中葉（明治初頭）に比定され、建物の取り壊し等に伴う瓦その他の一括廃棄土坑と考えられる。

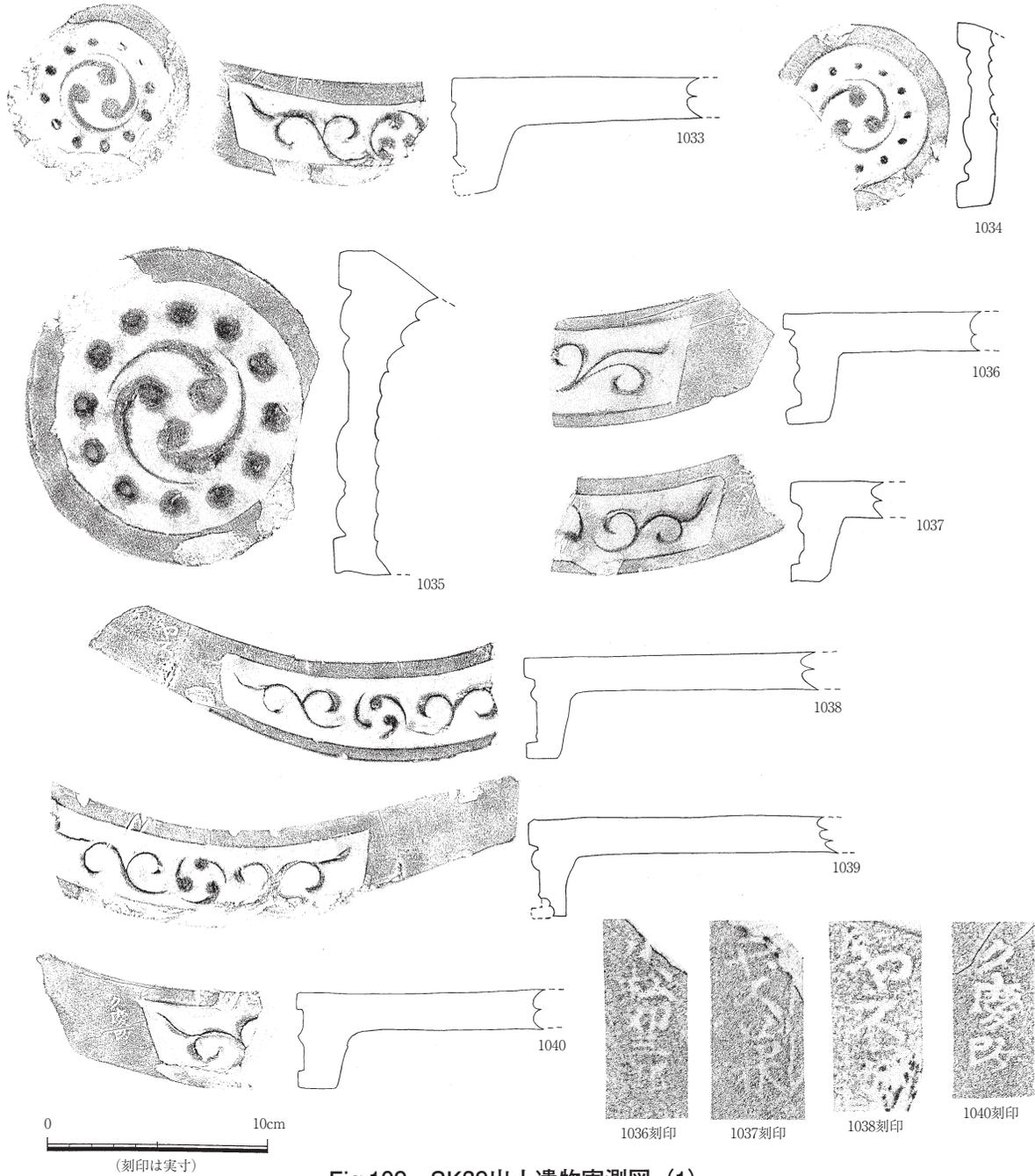


Fig.109 SK39出土遺物実測図 (1)

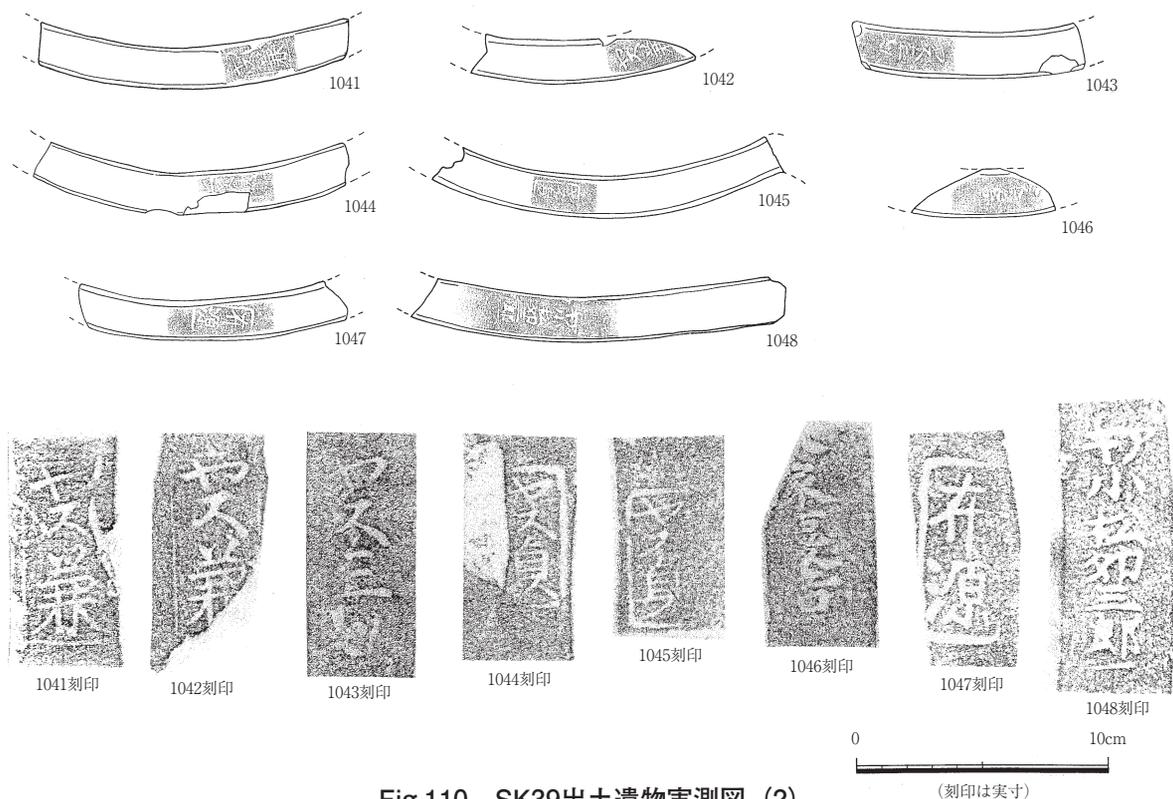


Fig.110 SK39出土遺物実測図 (2)

SK40 (Fig.111)

調査区南部に位置する。西部側が攪乱を受けるため全体の規模は不明であるが、南北長0.98m、東西残存長0.72m、深さ8cmの楕円形土坑とみられる。断面形態は皿状で、埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は、磁器（紅皿1）、陶器（小皿2・中皿1・甕1・火鉢1）であり、肥前産の白磁紅皿、備前焼の焼締め小皿、瀬戸・美濃産の緑釉火鉢等が含まれている。

SK40は19世紀に比定される。

SK41 (Fig.111・112)

調査区南部に位置する土坑で、浅い皿状の窪みSX25の床面から、2基の楕円形土坑SK41とSK53が並んで検出されたものである。平面形は楕円形で、南北の残存長1.40m、東西長1.10m、深さ24cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトであり、SX25・SK53とも同質である。

出土遺物は、磁器（中碗14・小碗1・小皿3・大皿1・鉢1・猪口4・蓋物3・蓋1・瓶2・紅皿1・不明5）、陶器（中碗5・小碗1・中皿1・鉢3・捏鉢2・搦鉢3・瓶1・甕1・灯明皿2・鳥の水入れ1・鬘水入れ1・不明2）、土器（小皿3・火消壺1）である。

図示したものは、1049～1060である。1049～1053は磁器。何れも肥前産である。1049は染付丸碗で、外面にコンニャク印判による松と鶴、高台内に略化した「大明年製」銘を描く。1050は肥前波佐見の染付小皿。見込み蛇の目釉剥ぎで、内面に略化した折松葉文を描く。1051は青磁の猪口。1052は白磁の紅皿である。1053は青磁の大皿で、内面に花卉と紅葉の陽刻文様が施される。

1054～1060は陶器。1054は灰釉中碗で、尾戸窯の製品か。1055は京焼の灰釉鉢で、呉須と鉄錆

で松を描く。型押し成形で、外面に布目痕が残る。揃いのものが4個体出土している。1056は灰釉の蛇の目釉剥ぎ中皿。1057・1058は灯明受皿で、錆釉を施す。1059は鳥の水入れ。1060は備前焼の甕である。

SK41は18世紀前半に比定される。

SK42 (Fig.113・114)

調査区東部に位置する。東部側が攪乱を受けるため全体の規模は不明であるが、南北残存長2.30m、東西残存長1.34m、深さ54cmの楕円形土坑とみられる。断面形態は不整形で、床面は中央が落ち込む。埋土は灰黄褐色シルトであり、埋土中には瓦片と漆喰のブロックを多量に含んでいる。切り合い関係では18世紀後半のSK76と時期不明のP116を切っている。

出土遺物は、磁器（中碗2・五寸皿1・鉢1・猪口1）、陶器（小皿1・鉢1・播鉢1・土瓶1・土瓶蓋1・不明1）、土器（焜炉1・焜炉さな1）、銅製品（煙管1）、鉄製品（不明1）、ガラス製品（不明1）、石製品（棒状製品1）、瓦片、及び多量の瓦片で、19世紀を中心に17世紀初頭から19世紀中葉までの遺物が含まれる。

図示したものは、1061～1064である。1061は用途不明のガラス製品、1062・1063は軒平瓦、1064は平瓦である。1062・1063は「王子定」銘印をもち徳王子（高知県香南市徳王子）の製品である。1064は角枠内「下田□」銘印をもつ。この他にも、能茶山窯の鉄釉蛇の目釉剥ぎ小皿、鉄釉の算盤形土瓶、備前焼播鉢、橙色の低下度釉を施した軟質施釉陶器の体部片、砂岩製の棒状製品等が出土しているが、酸化コバルトによる染付磁器は確認できていない。

SK42は19世紀中葉に比定され、建物の取り壊し等に伴う廃棄土坑と考えられる。

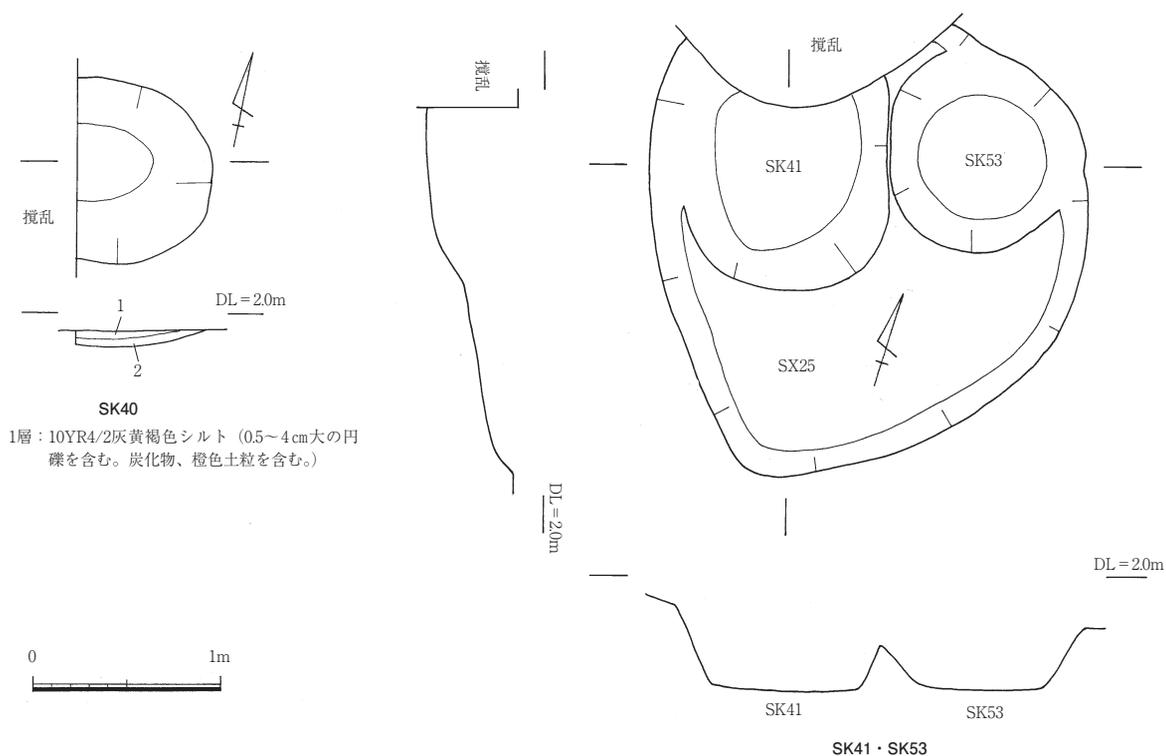


Fig.111 SK40・41・53平面図・セクション図・エレベーション図

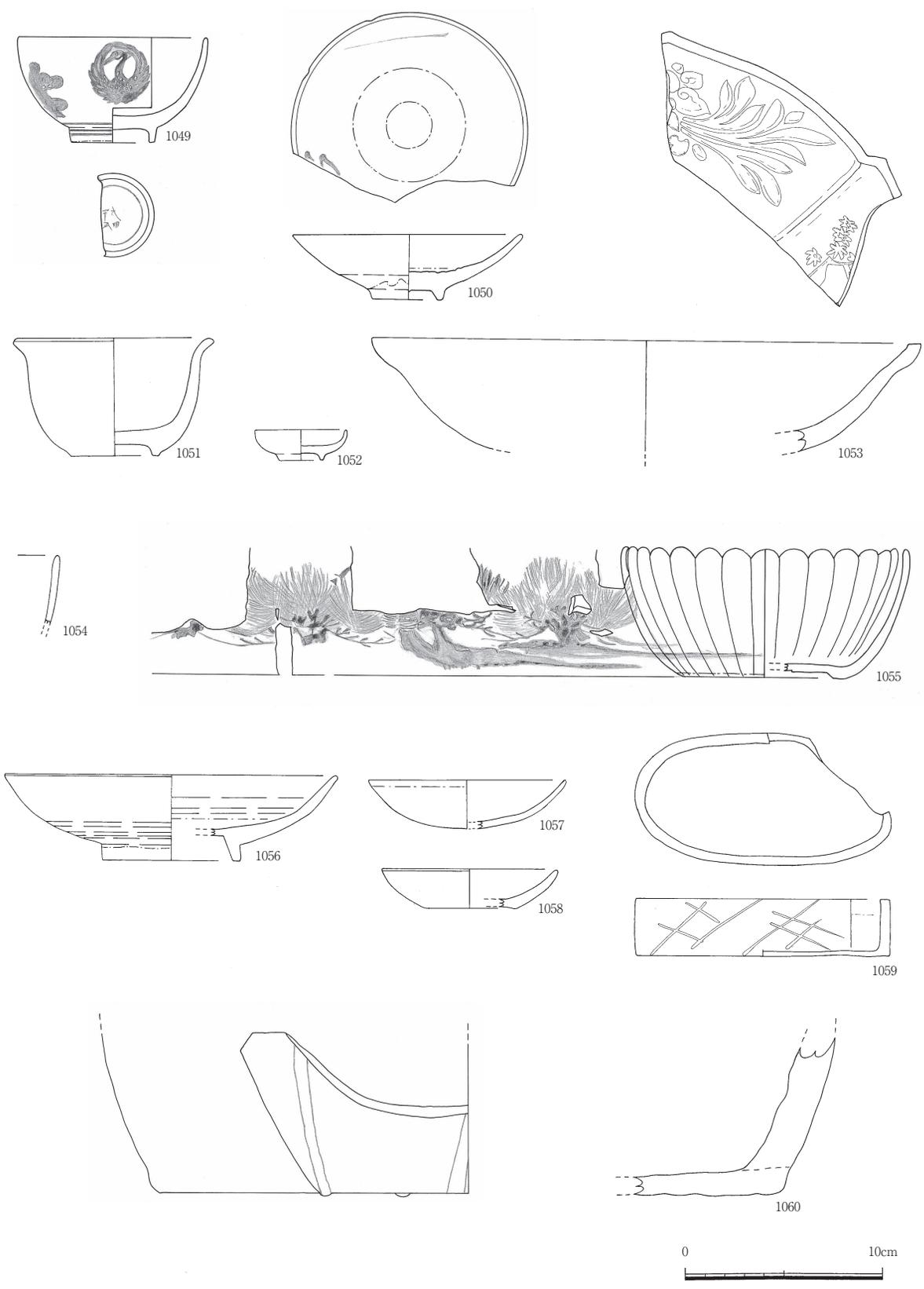


Fig.112 SK41出土遺物実測図